

生活文化

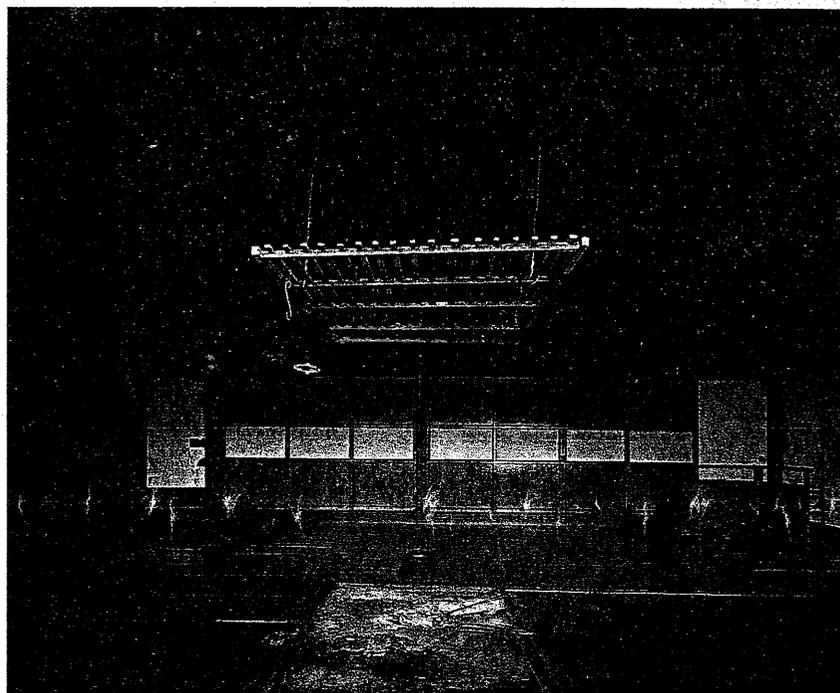
seikatsubunka

目次

- P 2... 語る会のお知らせ
- P 3... 2001年度総会報告
- P 4... 2001年会計報告
- P 6... 第一回語る会報告
- P11... 1回目の「語る会」に参加して
- P12... 林業なくして木造建築なし
- P14... 景観模型報告その5
- P18... 木造住宅[私家版]仕様書・架構編が増刷に
- P19... 2002年会費について

生活文化同人会報

2002年2月 No.55



第9回大平建築塾へのお誘い

今年も大平建築塾を開催します。ふるってご参加を！

テーマ 『自然環境保全と木材資源の活用』

開催日時 7/20(土)～22日(月)

語る会のお知らせ

今回は構造設計家増田一眞さんをお迎えして『なぜ木にこだわるか』をテーマに語っていただきます。

4月から増田さんが開講する『新伝統木構法セミナー』のことも交えながらお話していただけるそうです。

参加希望者は必ず3/27日までに事務局に申し込んで下さい。

生活文化同人事務局 アトリエ・ヌック 新井聡
〒335-0014埼玉県戸田市喜沢南2-5-5-404
Tel/048・432・8651 Fax/048・443・8713
E-mail/nook@d6.dion.ne.jp

〈世話人 益子昇〉

日時：3/29(金) 18:30~20:30
場所：市田邸

増田一眞(ますだかずま)

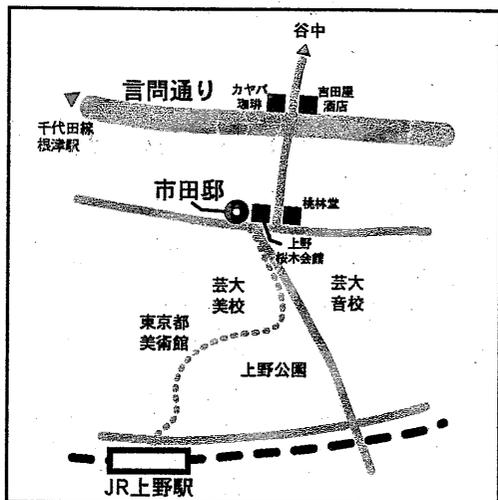
略歴

1934年広島生まれ。1958年東京工業大学建築学科卒業。(株)松村組入社。1961年東京大学生産技術研究所田中尚研究室。1964年増田建築構造事務所設立。代表取締役。

主としてプレキャストコンクリート構造、木構造、耐力診断と補強法、躯体構築法一般の研究。構法セミナー主催(毎月1回)。

主な構造設計

ICU理学本館、鎌倉雪の下教会、筑波第一小学校体育館、熊本機能病院、天竜原木センター、他約1200棟。



伝説の智慧に学び
現代の知見を加味し
創造的体系を工夫した！

新伝統木構法セミナー

講師 増田一眞

4月開講 月一回 一年間

- 才一回 伝統木組の継承と発展
- 才二回 三次元架構の応力伝達
- 才三回 部材の抵抗と仕口継手
- 才四回 合成部材の思想と方法
- 才五回 軸組構法の基本的形態
- 才六回 足回・通貫・折回の構法
- 才七回 耐力壁と軸組構法
- 才八回 三次元化した筋違構法
- 才九回 部分壁と活かした構法
- 才十回 差鴨居胴差軸組構法
- 才十一回 二方向に伝達する格子梁
- 才十二回 三次元小屋組の有効性

新伝統木構法セミナーの内容

丈夫で永持ちして美しく、環境と風土に適合した日本の誇りを継承し、文化の伝統を私たちが継承し、さらに発展させなければなりません。肝心なことは、歴代の匠たちの知恵に学び、その上に現代の知見を加味して創造的に体系づけたい。工夫と必要もある事です。今回主として留意し工夫した真を列記すると次の通りです。

- 一 全ての応力を活用して形態と探る
- 二 柱の曲げ、壁の剪断の両れを復活する
- 三 部分壁を合成された構造部材とする
- 四 格子組や絞様壁を耐力要素とする
- 五 伝統の仕口・継手を重視する
- 六 集成材に頼らずムクの本木を使用する
- 七 筋違構法も含めて三次元の立体架構とする
- 八 合成材も含む格子梁組を完成させる
- 九 小屋組も三次元化を図り合理化する
- 十 性能を明らかにする裏付け資料を作成する

本セミナーは在来軸組の止揚も含めて、伝統の知恵を活かした多様な新伝統木構法の技を一端も拓いたつもりです。今後各地域でさらにゆたかな展開が望まれます。

伝説の知恵と現代の知見
新伝統木構法セミナー
増田一眞

■生活文化同人 2001 年度総会報告

2001 年 12 月 22 日、市田邸にて生活文化同人 2001 年度総会が行われました。

■2001 年度の活動報告

定例会 (対談シリーズ)

2 月 23 日 対談者：広瀬鎌二氏

4 月 12 日 早川正夫氏

6 月 29 日 泉幸甫氏

9 月 14 日 木寺安彦氏

語る会

3 月 21 日 益子昇氏＋高橋俊和氏

5 月 24 日 山本厚生氏

7 月 12 日 中村文美氏

9 月 12 日 新井聡氏

12 月 22 日 吉田桂二氏

会報

No.47 号～No.52 号まで 6 回発行

■2002 年度世話人選出

代 表：吉田桂二

事務局：新井聡

会 計：岸未希亜

会 報：飯島克如、高松俊秀

機関誌：益子昇

大平建築塾実行委員長：鈴木久子

語る会：磯畑とも子、豊崎洋子、中村文美

世話人：松本昌義、伊藤秀夫、日影良孝、斉藤彰、佐々木貴章、石引浩子、戎居連太、金田正夫、宮越喜彦、長谷川順持、飛山龍一、八代茂子、岡部知子、外岡生帆、寺田一枝、佐々伸子、吉塚幸雄

※世話人の自薦・他薦・申し出てください。

■第 9 回大平建築塾

2002 年 7 月 20 日 (土) ～7 月 22 日 (月)

実行委員長：鈴木久子

■2002 年度年間テーマ

「なぜ木にこだわるか」

■その他

2002 年度は、毎年偶数月に行われていた『定例会』をやめて、上野桜木：『市田邸』を会場にして、不定期に、全員が積極的に発言する新「語る会」を開催することになります。

	摘 要	収入金額	支払金額	単位支出計	差引残高
	2000年残高繰り越し				253,907
固定収入	年会員 (¥8000) : 44名	352,000			
	会報会員 (¥3000) : 25名	75,000			
臨時収入	定例会聴講費 : 計19名	37,000			
	世話人会等飲食残金	2,270			
	郵便貯金預金利子	265			
	大平建築塾収益より				
会報	会報47 印刷製本		17,388		
	" 発送 90×101		9,090		
	" 雑費		1,050	27,528	
	会報48 印刷製本		19,440		
	" 発送 90×100		9,000		
	" 雑費、宅配便		2,050	30,490	
	会報49 印刷製本		11,592		
	" 発送 200×171、80×3		34,440		
	" 雑費、宅配便		4,964	50,996	
	会報50 印刷製本		17,010		
	" 発送 90×120		10,800		
	" 雑費、宅配便		1,870	29,680	
	会報51 印刷製本		20,527		
	" 発送 90×130		11,700		
	" 雑費、宅配便		1,820	34,047	
	会報52 印刷製本		9,660		
	" 発送 90×90		8,100		
	" 雑費、宅配便		1,300	19,060	
	小計 (会報費用)		191,801		
機関誌	機関誌 : 昨年印刷費として		150,000		
	小計	466,535	341,801		

	摘 要	収入金額	支払金額	単位支出計	差引残高
定例会	定例会〔1〕：池袋芸術劇場				
	会場費、機材費		21,000		
	講師謝礼（広瀬謙二氏）		20,000	41,000	
	定例会〔2〕：神楽坂高橋ビル				
	会場費、機材費		15,000		
	講師謝礼（早川正夫氏）		20,000	35,000	
	定例会〔3〕：池袋芸術劇場				
	会場費、機材費		9,400		
	講師謝礼（泉幸甫氏）		20,000	29,400	
	定例会〔4〕：池袋芸術劇場				
	会場費、機材費		9,400		
	講師謝礼（木寺安彦氏）		20,000	29,400	
	小計（定例会費用）		134,800		
	備品（ハガキ、カセットテープなど）		8,957		
	通信費（振込み手数料、切手など）		1,630		
	小計		145,387		
	単年度収支	466,535	487,188		-20,653
	最終残額				233,254

※今年は会員数の減少（会費未納者の増加）により、単年度収支が赤字となりました。

例年通り、大平建築塾の収益から10万円程度の予算をいただければ黒字になるということをご報告します。

第一回「語る会」報告

■NPO「やみぞの森」の試み…………… 報告者：飯島克如

2002年の最初を飾る、第一回の語る会はNPO「やみぞの森」の立ち上げに関わった、吉田清明氏（株式会社U-MAC 代表取締役）をお招きして、その活動と山側から見た木へのこだわりを語っていただきました。



NPO「やみぞの森」は茨城県北部の美和村、里美村、大子町にまたがる山林地、通称「やみぞ材」の産地をフィールドに立ち上げられたNPOです。産直型の建売住宅「日立樹の家」を実現するなど、林業・住宅生産の中でユニークな活動を展開しています。「季刊 チルチンびと」No.19 2002 Winterの「風土を生かす家づくり」に取り上げられています。

■流通の仕組みを変える

まず、大きいのは、生産される材の中身の問題、そして、木材の流通の問題の二つです。

材の問題として大きいのが、「中目材」という20から30cmの直径の材です。これが大量に山側でストックされています。この、中目材は現在の木材流通の規格（例えば3寸角の材）では、端材が大量に出てしまうため、流通にのりにくいのです。この「中目材」を無駄なく流通させることが大きな課題の一つです。

そして、流通の問題です。山で切られた木材は原木市場と言うところで競りにかかります。ここでつく価格が「立木代」です。この立木代が現在、立米当たり3,000円程度（立木1本当たり1,000円）です。山では最初に植林するときにヘクタール当たり3,000本植えるらしいのですが、それが、最終的には間引かれて、最後には1,000本ぐらいになる。でも、50年育ててヘクタール当たり100万円にしかならない。それが、最終的に10万から11万円ぐらいの価格で流通する。つまり、一般に国産の木材は高いと言われているのですが、山側からすると非常に安い、生産者側の意識と消費者側の意識のギャップが生まれています。

この生産される材の問題と流通の問題を解くために「やみぞの森」で考えた解決策が、中目材を市場をとばして流通させるという方法です。中目材から、通常の流通の規格に乗らない材を出し（具体的には5寸角の材など）、それらを、市場を経由させない産直型で流通させる。この時、立米当たり3,000円の立木代を1万円程度にして、最終的には10万から11万円ぐらいにします。

既存の流通システムに対してあまり過度なインパクトを与えないで、市場を跳ばした分を山に還元させること、通常は流通に乗りにくい「中目材」を流通させること等ができません。

■資源を循環させ、山側を保証する量産体制

この提案の目標は資源の循環型の構造を作ることです。山が山を切った分再生を行えるようにしたい。しかし、今の山は、木を切ったらそのまま取りやめになっているということが一般的です。それは山側の経営の基盤が弱くなっているからであって、先程の1万円前後の価格帯ができ、一定量が保証できるのであれば、山側にも再生の基盤を保証できるのです。

そのためにさらに一步踏み込んで、山側に材の生産を保証するような材の供給と需給の仕組みを作る事が必要です。巷の産直型はかなりの部分が一品生産で、材の量産に結びついていません。私は年間50戸を目標にしようと思っています。本来は、年間100戸とか200戸の供給を山側に保証しないといけないと思います。そのためには、住宅の仕組みを最初からあるルールに則ったようなものにして、産直型だけでも量産の仕組みを作る必要があります。「やみぞの森」が実現させた「日立樹の家」も公団と組むことで、その辺のところを意識しました。

具体的には住宅自体の構造の技術的な仕組みと、流通上の組織の仕組みを検討する必要があります。

技術的な仕組みでは、ある標準的な構法や構造をつくる必要があります。それによって、できるだけ端材を出さない。また、農林規格にあわない材でも大量に出れば山側に寸法を返して量産に結びつきます。注文住宅においてでもある一定の仕組み、特に構造材の中の仕組みというものを前提として、注文住宅を作ると言うことはあり得ると思います。その辺は設計者の集団の中でバリエーションを持った構造の仕組みを考えてもらえば良いと思います。

そして流通上の仕組みとして、山から最終的にはエンドユーザーを含めた一貫した流れをもった組織づくりが必要です。量産体制を前提とした地域ビルダーとディベロッパーとの連携がとくに必要になります。その中でも、量産体制の仕組みとして大きな役割を持つのは、ディベロッパーです。彼らと組むことがどうしても不可欠だと私は思っています。勿論、ディベロッパー自体も頭を切り換えることが必要ですが、量産体制を組むための事業体制として販売をしていく企業と連携していく必要がある。ディベロッパーの発注の下に木材生産、製材、設計、施工、行政が上手く連携していく必要があります。

■日立樹の家

それでは、具体的に、「やみぞの森」ではこれらのことをどう実現したのか。

「やみぞの森」が実現した「日立樹の家」は、「ひたち野うしく」という駅の周辺で住宅公団が区画整理を行ったところにあります。そこで、5棟の建売住宅を実現しました。

「日立樹の家」が実現するまでに、まず、実際に民間のメンバーを入れて、住宅の技術的・構造的な仕組みをシステム化しました。一つのモデルを吉田桂二先生に鍊っていただいて、基本設計をやって、ディベロッパー4社を入れて、住宅を造りました。その中で、5寸角のものを使うということ（大半は杉材です）と、材の量を人坪当たり1立米にするこ

とにしました。これは、一般のハウスメーカーの2.5倍くらいの量です。平均して35坪ぐらいの住宅ですが、35立米位の木材を使っています。

実現した住宅はグリッドでまわりを囲んでいるので、束がない構造です。外面を見ると、自然材を多く使った良い住宅だとはなかなか見えないので、外から見ても他の住宅とは違うと見えるようにするのがこれからの課題です。

内部は実際には2階建てなのですが、人が立つことのできる屋根裏部屋があります。住み手側としてはプラスアルファのスペースができたというかなり得をしたという印象を与える作りになっています。また、自然材をふんだんに使っていますからビニールクロスを貼ったような接着剤の臭いは全然しません。例えば、床材は板の厚さが27mmの杉材を使っています。腰壁までが杉で、そこから上は珪藻土を使っています。

エレベーション的には印象が今ひとつですが、買った人は中に入ったとたんに印象がだいぶ違うので、相当強いインパクトを与えて、共感を持たれたのではないのでしょうか。

価格ですが、量産体制にするために坪当たり建設コスト45万円を目標にしています。売値が、坪当たり52万になっていますので、そういう価格帯でモデル的に住宅をつくりました。

そして、この住宅を販売するにあたり、三回のセミナーを行いました。最初は、「自然材の住宅はこういうものだ」と、例えば、「節があるのは当たり前」「割れがあるのは当たり前」「多少は狂います」ということや、もちろん自然材の良さというのも含めて、説明しました。一回当たり60人位集まりました。第二回目は構造ができあがった段階で行いました。最終的には完成の姿を見せて販売を行いました。つまり、今までのハウスメーカーができあがった状況で販売を進めているのとは違い、プロセスをみせ、現場を体験させながら、販売したと言うことです。

そこで行ったアンケートをやった結果ですが、やはり、アレルギーの問題とか省エネとかの興味が強かったです。価格については多少高くついても良いという人が多い印象を受けました。

この住宅は、区画整理の端の方にあり、立地的には良いところではないのですが、完売しました。

■木のこだわりに対する意識改革

今までの活動を通して感じていることは次のことです。木に対するこだわりの問題、木工事の問題、責任体制の問題です。

まず、材のこだわり方を変えるべきです。節があっても構わないという感覚や、並材というものをどう積極的に使うのかを考える感覚が必要です。特に設計者側に意識の改革が必要です。設計の時にこの材じゃなくてはだめだとあまり強調しすぎますと、山側としてはその選択が非常に困難になるので、出さないようになってしまうのです。また、一般的にも節があるものが低価格で悪い材だと長い間思われているようなので、その常識を消費

者も含めて変えていく必要があります。もちろんそのために、材の性能の保証をどうやってきちんとするのか、材を送り出す側の課題といえます。これは、乾燥の問題ですけれども。茨城ですと、山側で葉枯らしを行っておろして製材、それから人工乾燥を行っています。

価格のコントロールの中で木工事の省力化ができないかと思っています。普通木工事は工事費の割合で35%から50%ぐらいになるといわれているのですが、そのうちの約半分は大工手間だそうです。一方、材料費は17%で、多くても25%程度です。大工手間を材料費と比較すると、同じ位の割合なので、その大工手間をどのくらい省力化できるかがテーマだと思います。しかし、こここのところが、木造住宅にこだわる人や施工者作り手側の考えと大きく隔たるところだと思います。しかし、実際に山側から材を出すモノの解決としては、この辺を是正しないとどうしようもないと思います。

そして、このような産直型の組織の責任は誰が持つのかという問題です。一貫した組織体系というのは大集団です。設計の仕組み、施工の仕組みを作ったとしても一体どこが責任を持つのかと言うことが明確にならない。茨城の場合ですと、「日立樹の家」というのを5棟ばかり造って、それをディベロッパー4社が販売したわけです。一応今の段階ですとディベロッパーがノウハウ、パテントを登録して、4社が責任を持つということになりつつあるのだけれども、実際の中身は段々曖昧になって来るといことがなきにしもあらずです。どこかでそこをコントロールできる仕組みを確立しなければいけないと思います。

基本的にはそのために、NPO「やみぞの森」を創ったわけです。材の出荷体制、材の乾燥の問題、設計、施工、できあがるプロセスの管理の問題、出来上りの保証の問題、メンテナンスの問題等も含めて、責任体制の明確なコアになるということを目論んでいます。しかし、まだ完全にNPOが責任体制としてできるとはなっていません。しかし、NPOは「やみぞの森」はそういう体制で動きつつあります。

■NPO「やみぞの森」について

NPOのメンバーは理事が12、3人です。立ち上げたのは一昨年秋でした。茨城県の方と何回もやりとりをして、認可までに3ヶ月ぐらいかかりました。構成メンバーは、森林組合のメンバー、施工グループ、左官業、サッシ屋さん、設備屋さん、設計者のグループ、一番多いのは施工会社のグループでしょうか。

「やみぞの森」は、環境の問題、社会教育の問題などをNPOの本来の活動にしています。NPOの事務局本部に問い合わせた時に、こういう自然材を使って住宅を作ること自体が実は環境に還元するわけだから、NPOの本来の目的にあっているのではないかという話もありました。一方で、茨城の方では、私が最初に行って話をしたときには「何だ、それでお前は儲けようとしているのではないか」といわれたこともありました。しかし、収益をあげた上で、山側に還元する形にできればいいと思います。実際、杉材のうちの1%を売ったときにNPOの資金源とするとか山側に返す、あるいは住宅を売ったときに5%をNPOの資金源と

するという決意をしています。まだ、件数が少ないから、なかなか集まってきましたが。

■今取り組んでいること

いま、これと同じ様なことを埼玉でもしようとしています。県と市と公団の埼玉支所、それから民間の各専門領域の業者（森林組合、設計、施工、ディベロッパー等）を入れて、去年から立ち上げています。茨城と同じように、埼玉の実態がどの様なものか調査しました。調査と材の評価を踏まえて、実際の立ち上げの準備を始めようとしているところです。現在、ディベロッパー会議というものを持って、どれくらいの規模で、どれくらいの性能で、どれくらいの価格帯でやるかを決めようとしています。今モデル住宅を作っていますが、ディベロッパーサイドとしてそれが妥当かチェックをしています。それを基にして、施工のメンバーと調整をします。

組織体制としては、将来「やみぞの森」のようなNPOをつくらうとは思っていますが、茨城の場合は「棟匠」というのが強力な牽引力を持ったコアがいたのに対して、埼玉の場合にはそれがちょっと見えてこないところが課題です。

■ 1回目の「語る会」に参加して…………… 松本昌義

「なぜ木にこだわるか」をテーマとした今年1回目の「語る会」に参加した。私の中では「なぜ」は自明のことなので、「どう」の方に興味がある。講師の吉田さんのお話には「なぜ」に対する答えのひとつ、低迷する国内林業の現状に対する憂慮があった。このことに関しては私にも同様の認識があり、今自分を動かしている原動力のひとつになっている。

国産材の活用に関する吉田さんの具体策は、山から建主（購買者を含む）までの一貫した産直型量産供給システムを組むことであった。山や市場の現状調査に始まり、行政や公団、さらに民間を巻き込んでのプロジェクトには説得力があった。山に利益を還元しなければ（つまり、材を高く買わなければ）林業経営が成り立たず、価格面で外材に対する競争力を付けなければ（つまり、材の値段を安く押えなければ）国産材の需要を高めることが難しいといった矛盾する問題をどう克服するのか。現状の流通を見直して差分を山に戻すための産直、山側に量を保証するための量産、生産コストをトータルに下げるためのシステム化であると理解した。

私も以前に、コストダウンを目的として木材の産直をした経験がある。その中で見えてきたものは、コストダウンは結果であり、産直は日本の山にできるだけ多くのお金を届けるため、だったので吉田さんの考え方に一部重なるところがある。その後もゲリラ的な動きを続けているが、量の問題は個人の設計者ではどうにもならないものを感じている。複数の設計者が束になってかかればとも思うが、価値観や設計スタイルの違いを呑み込めるかといった問題があるだろう。

吉田さんが掲げた課題のひとつに、主に設計者に対することとして、材へのこだわりの是正があった。つまり、節や材の色違いを気にし過ぎではないかということ。私は節を欠点とは思っていないし、材を無駄なく使おうとすれば赤白は当たり前と思っているので、そうではない設計者が多いという話は意外だった。節があってもよい設計を心掛けているつもりだし（しかし、これが時々問題になる）、これらを嫌う建主や施工者には、価格面での合理性や色違いは数年でわからなくなるという事実を説明して切り抜けている。

私は国産材を使うということを当然のことと思いたい。山側の人たちと関わり合いを持ちながらのものづくりは、時にはしんどいこともあるとはいえ、私には楽しみの方がはるかに多い。自分の内なるものを表現するばかりではなく、材を見て、材から形を発想するといった設計スタイルもあってよいと考えている。

■林業なくして木造建築なし……………小川耕太郎

皆さん、お久しぶりでございます。2年ほど前に私どもが販売している「材木屋とハチミツ職人が作った未晒し蜜ロウワックス」を同人誌に紹介して頂いた尾鷲の小川耕太郎です。昨年は大平建築塾に参加できず残念に思っておりましたが、「なぜ、木にこだわるのか」というテーマで語る会が開かれると聞き、「これは行かなくっちゃ」とはせ参じました。今回、そのときに感じたことを書かせていただこうと思っております。理解不足の点があるかと思いますが、ご容赦下さい。

さて、先日は「なぜ、木にこだわるのか」という年間のテーマを受け、「木材の地域材活用事例紹介」が行われました。NPO「やみぞの森」の立ち上げにかかわった吉田清明先生を講師にお招きし、茨城県の常磐新線沿線での地域材を使った住宅建設のシステムや林家から製材、設計、施工に至る流れを紹介いただき、その後、国産の木を使っていくためにどうすべきかという語る会が行われたわけです。話し合いの中で出てきた意見は、「節のある木をもっと使おう」、「林家に安定供給して貰うために、年間100棟程度発注できる体制が必要だ」というものだったと思います。そのとき、私はある疑問を感じましたので、そのことを以下に述べたいと思います。

そもそも、生活文化同人が木のことを語り合おうとするのは何のためでしょうか？国産の、あるいは地域産の木を中心に語るのはなぜでしょうか？木とはなんぞや？樹とは？山とは？

当然の事ながら、生活文化同人でこのようなテーマを取り上げる意味は木造軸組による建築を大切に守り育てていこうということであり、日本の山を守り、環境を守るために貢献しようということだと思っております。生活（人が生きること）・文化（人が生きることが積み重なってできるもの）にまでこの同人が関わろうというのであれば、話し合いの中で出てきたものは何か違うのではないかと感じました。

つまり、それは、木あるいは山と生活・木や山の文化という視点が欠けてはいしまいか、ということです。木は節があるから成長する。だから、節があるのが当然だ。という意見がありました。そして、その材は今、大変安価に手に入れることができ、施主に提案しやすい材になってきています。無節がよいというこだわりを捨てた方が良いという意見もありました。私には、これらの意見は住宅をいかに受注するかという視点でしかないように思えます。材木には節のある材もあります。でも、節のない材もあります。一般的に、木の根本に近い部分は役物といわれる材がとれ、私の地元の尾鷲ヒノキなら、元玉、2番玉のほとんどが役物です。元玉、2番玉の材積は全体の7割位でしょうか。金額で言うと9割くらいを占めます。

木や山と生活を考えた場合、役物を生かす仕組みがないと、あるいは、役物の価格を下げ使いやすくする代わりに節物の価格を上げないと林業を守ることはできませんし、その

生活や文化も廃れてしまうでしょう。林業なくして木造住宅を語れるでしょうか。

また、木や山の文化という視点から見ますと、木の使われ方、木造建築の美しさ、その歴史などを同人の皆さんは語る必要があります。そして、山がどのように育てられ、材になっていくかを知る必要があると思います。(先日の語る会での林業の話には、間違いが多くあったように思います。)単に強度はあるから、安くすむから節材を使うというのであれば、生活文化同人でなく、設計士がどう仕事を取ればよいかの会で十分です。そうならば、国産材や木造にこだわる理由もありません。

現在、日本の林業・製材業は無くなるうとしております。木を伐採・搬出する人はどんどん仕事を辞めていっております。苦しい今なら、どの地域からでも1棟分から材を運んでくるでしょう。困っているのは、量ではなく材を余すことなく使い切ってはくれないことです。魚屋さんでみんながマグロのあらだけを買ひ、赤身やトロを買わなかったらどうなるでしょうか。そのような買い方をしてマグロを生かし、漁業の為になっていると言えるでしょうか。

こういう発言をすると「苦しいのはどの産業も同じだよ。そんなことを言っただって現実にお金を払ってもらえるのか。」という声をよく耳にします。それではなにも出来ません。私たちは、国土、水、食料など人が生きていく上で必要不可欠な物を次の世代にきちんと受け渡す義務があるのではないのでしょうか。数十年前まで私たち日本人は、あるものを無駄なく使いきる、決してむさぼらないという素晴らしい文化を持っていました。ところが、高度成長期に安価な物は捨て、儲かる物はどこまでもむさぼるというふうに変わってしまいました。そして今、逆に安易な物しか使わず、多くの人が手をかけ、大切にしてきた物を捨て去ろうとしているように思えます。本当に、捨て去って良いのでしょうか。

私は、昨年11月に、尾鷲の森林組合・木材協同組合・プレカット(協)・内装材加工(協)・林家・製材所・原木市場・木材運送業者・木工所等に声を掛け、「(株)おわせ木楽屋」という木材販売会社を立ち上げました。蜜ロウワックスを使ってくださっている2,000件を越える大工・工務店・設計士の方々に直接、材を販売していこうと思っております。(お陰様で、これだけ使ってもらえるようになりました。)まだまだ、設立したばかりで十数件の問い合わせしかありませんが、数件の注文も受けました。言い訳をしている暇があったら、行動する。私にはこれしかありません。同人の方々には、ぜひ、設計の立場から今ある材をすべて生かす方法を考え、広めていく事をやっていただきたいと思ひますし、そういう語る会にさせていただきたいと思ひます。

その昔、奈良の法隆寺には西岡という名の鬼がいたと聞いております。知識・経験等、西岡棟梁とは比べようもありませんが、「尾鷲の、日本の山を生かす鬼たらん！」私はいつても、そう思っています。ご意見、ご批判等をお聞かせ下さい。次回お会いできる日を楽しみにしております。

山の神の日に生まれた男 小川耕太郎

景観模型報告 その5

(有)景観模型工房 盛口

今年度は、下記の方々でした。

- | | |
|------------------------|---------------------------------|
| [ザンビア：チボ] | ルサカ国立博物館
製作テーマ（タンガニーカ湖畔の村） |
| [中国：ワン] | 福建省博物館
製作テーマ（客家円楼：懐遠楼） |
| [ラオス：セントン] | ルソナム州情報文化局
製作テーマ（ジャール平原の遺跡） |
| [サウジアラビア
：アブドゥルアジズ] | ナジラン博物館
製作テーマ（アラビア半島南部の祖父の家） |
| [ベナン：ビア] | アボメイ歴史博物館
製作テーマ（僕の妻の育った村） |
| [ラオス：ペット] | ラオス国立博物館
製作テーマ（タット・ルアン） |

先日、ある若手歌人が、新聞のコラムで次のようなことを云っていました。

「—— ふわふわと流れる時間におもりをつけるのが歌。自分の表現も時間も形になって残ります。——」

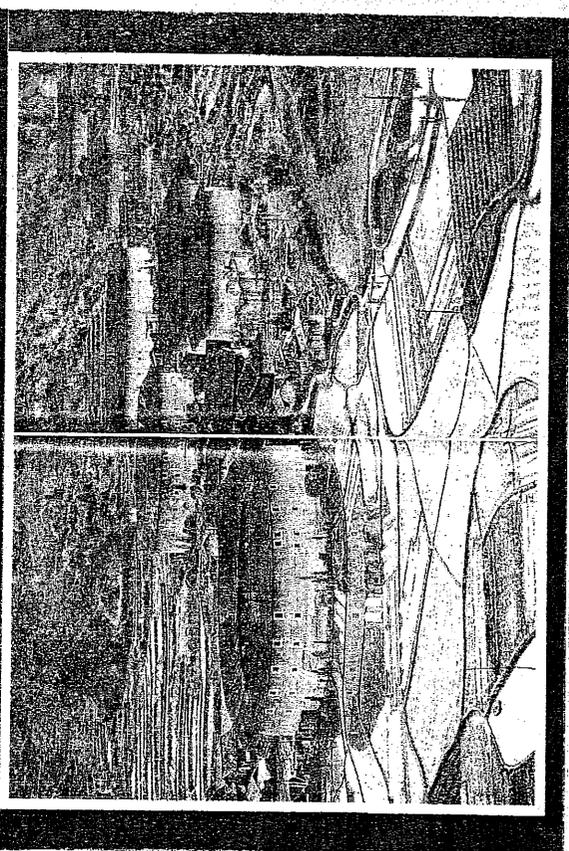
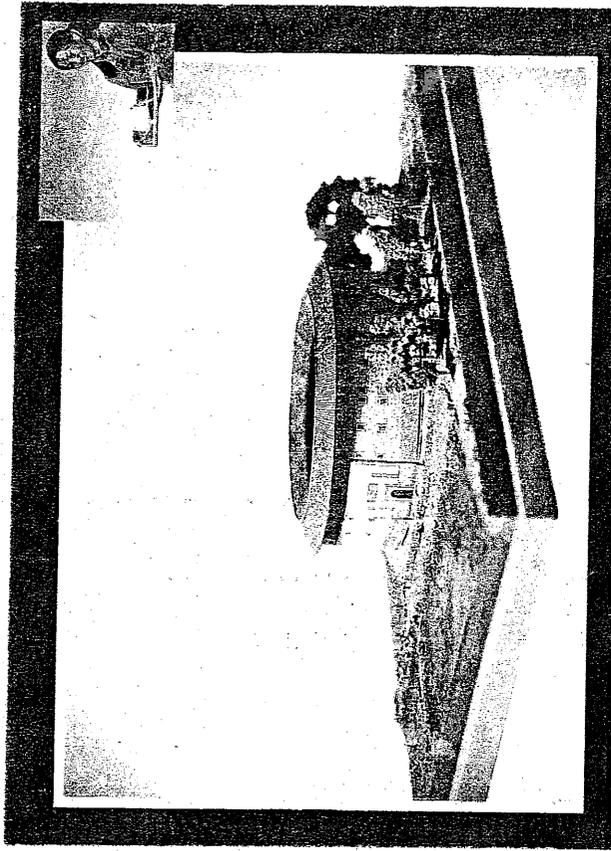
そして我々の模型製作という表現も、この言葉に仲間入りさせてもらえるのなら、「空気についておもりを見つけようとしているのかな——」とも感じます。

風土とは、空気にかぶりついたおもりなのでしょうか？

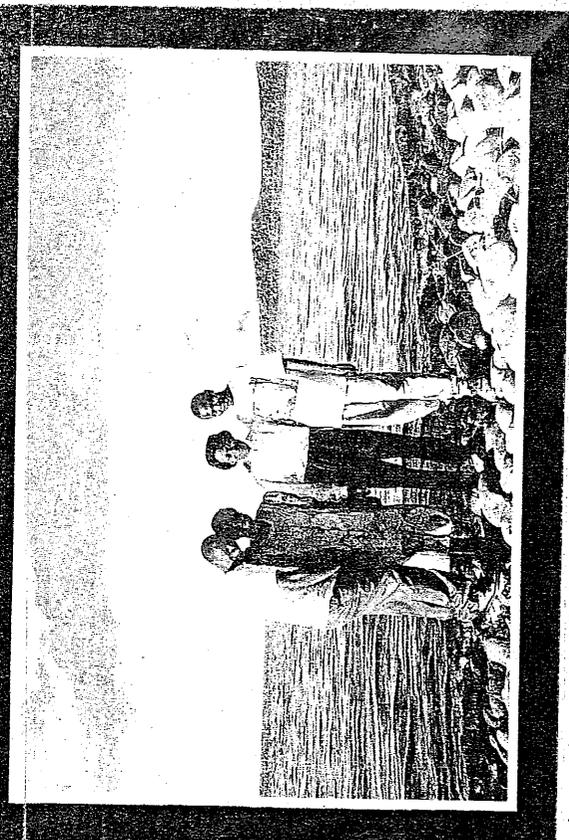
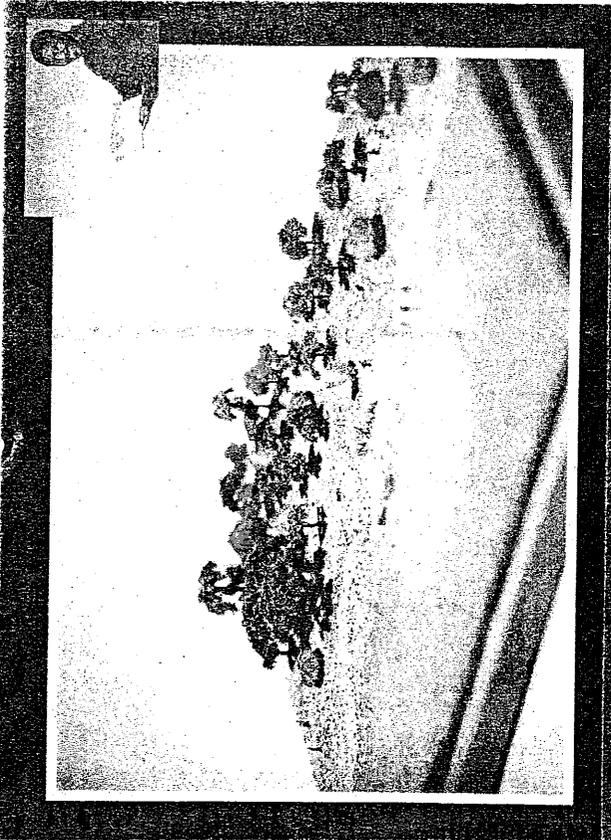


松林図復元

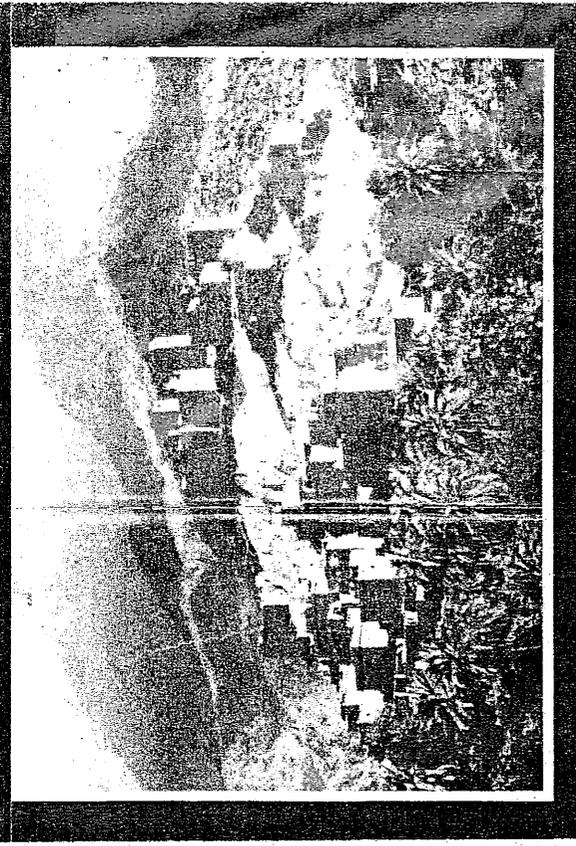
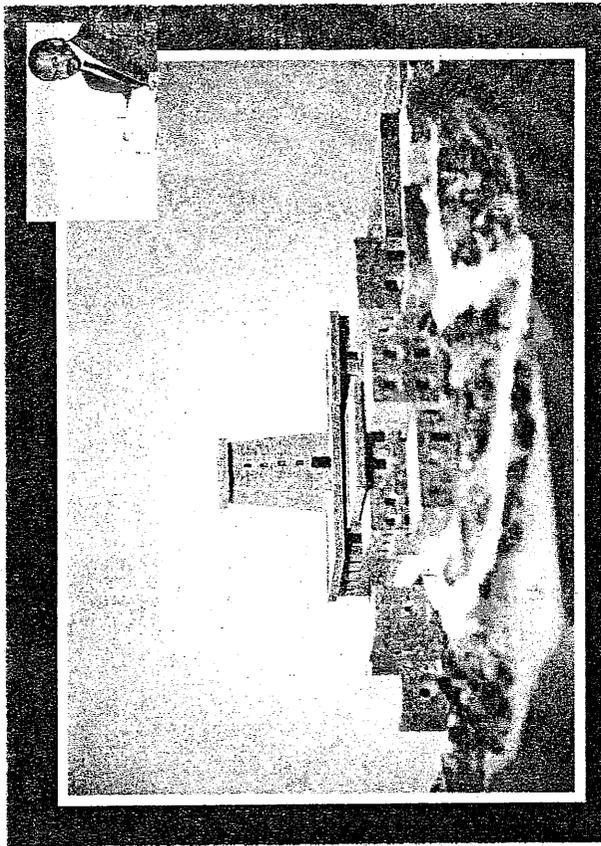
（長谷川等伯の見た風景）



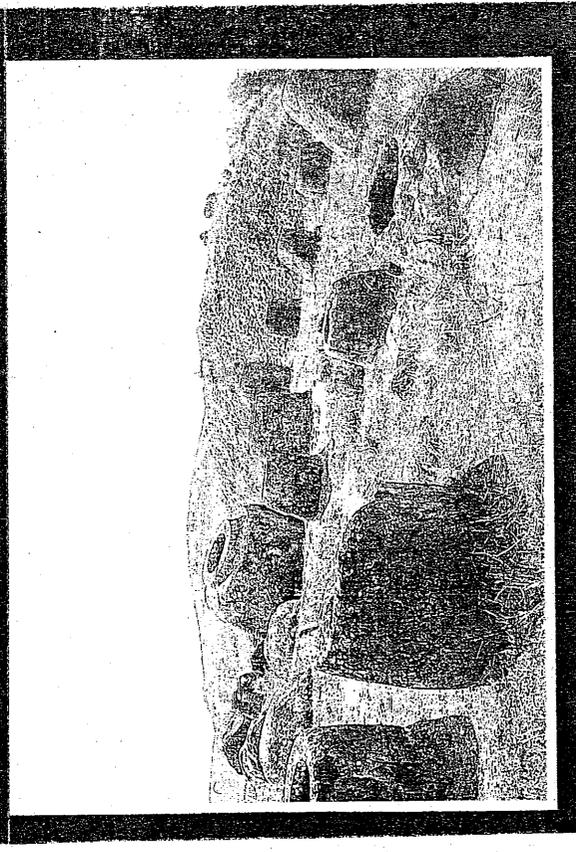
中国
客家円楼（懐遠楼）



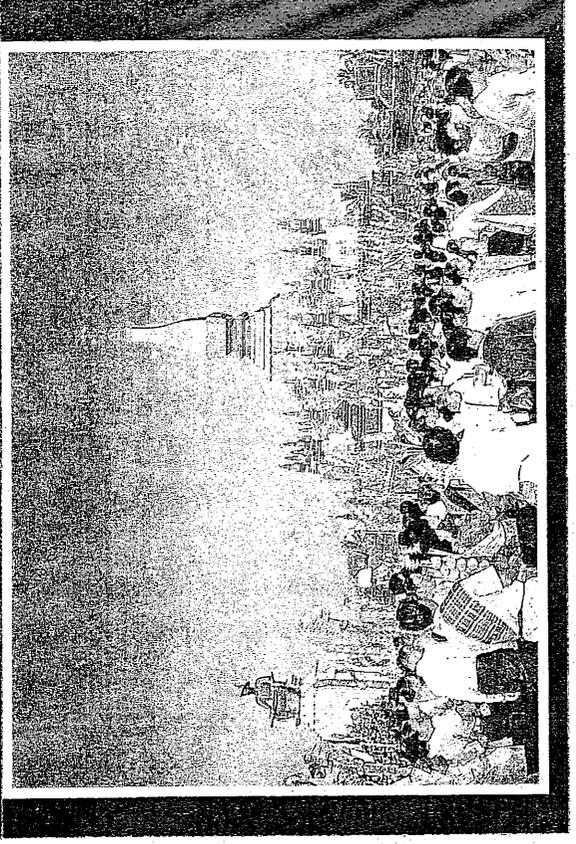
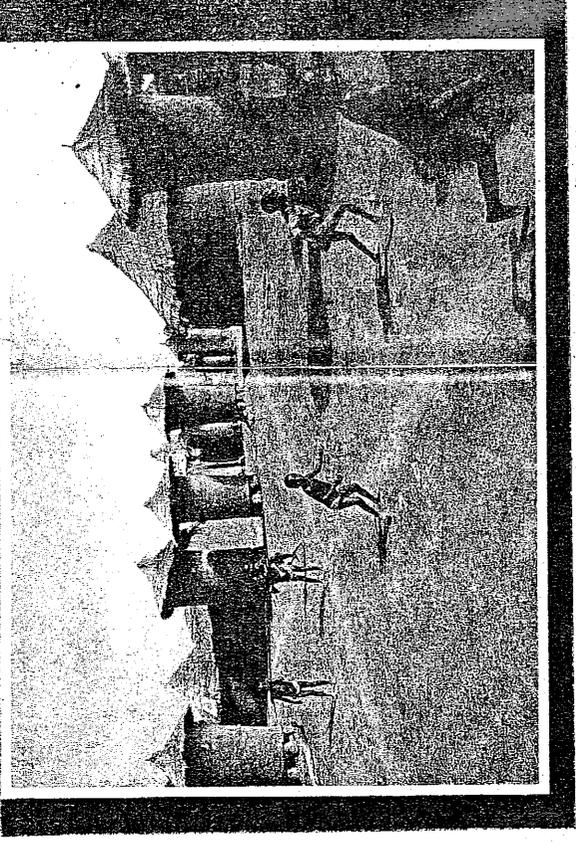
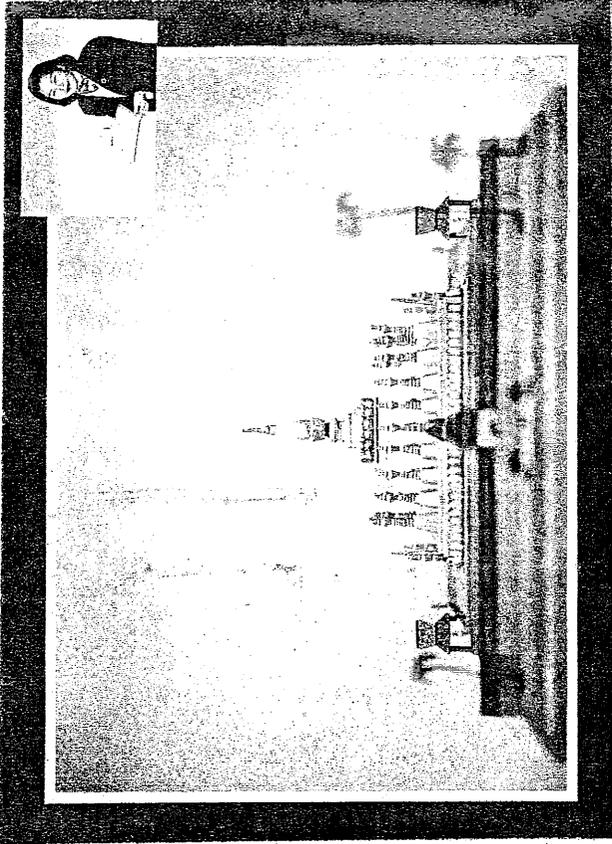
タンガニカ湖畔の村
ザンビア



アラビア半島南部の祖父の家 サウジアラビア



ジャール平原の遺跡 ラオス



僕の妻の育った村

ベナン

タット・ルアン

ラオス

■木造住宅 [私家版] 仕様書・架構編が増刷に\(^0^)/

宮越喜彦

松井、小林、宮越でまとめた私家版仕様書が今年に入って改訂増刷された。著者のひとりとしてはたいへんうれしいことだ。諸先輩から教えていただいた伝統的な木造構法を我々なりに整理したもので、実は著者がいちばん役立てている。

先輩諸兄からは、何をいまさらといった向きの話し、マニュアル化の危険性などの指摘も聞き及んでいる。しかし、いたって実用的で、どちらかと言えば地味な内容でありながら、急激には部数を伸ばさなかったが、じつくりと確実に3年にして増刷されたことは、こういった木造の内容が必要とされていたということと受け止めている。

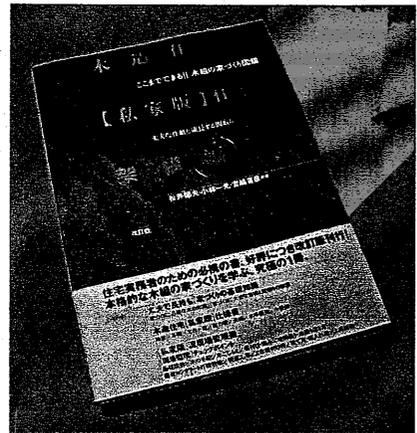
読者は、設計事務所関係ばかりでなく工務店や施主、学生までもが参考にしてくれることに、木組の家への期待の広がり、我々の目指す方向性が間違っていないことが確認された。

しかし、建築界を取り巻く状況は必ずしもバラ色ではなく、特に法規制の面で、伝統的な木造技術に不本意な足かせがあまりにも多く存在してしまっただけがある。何のため、誰のための法規なのかよくわからないものが、一昨年の法改正でバタバタとできてしまったようだ。多少は修正が加えられつつあるようだが、法を作る側も混乱しているように見える。困ったものである。

さて、現在、月刊建築知識では現場編として3人の現場での苦悩(?)を俎上にあげて木造を考えている。今回は構造家にも参加してもらい、定量的に押さえるという我々の最も弱い部分をフォローいただいている。

7年前と同様に、読者とのコラボレーションを意図した設問やインターネット上に会議室を設置するなど読者とのキャッチボールを期待したが、どうも世の中の動きとかみ合っていないようだ。あまりにも反応がなさすぎ、以前の状況とは何かが変わっているように感じている。何だろうか？

同人の皆さんからの意見、感想をぜひお寄せいただきたい。



■2002 年会費について

1. 年会員 (会費 8000 円/年)
 - ・語る会聴講 (5 回以上/年)、機関誌 (1 回/年)、会報 (6 回発行/年)
 - ・すべての同人の活動情報を会報以外にも提供します。
2. 学生会員 (会費 5000 円/年) (本年より設定しました)
 - ・語る会聴講 (5 回以上/年)、機関誌 (1 回/年)、会報 (6 回発行/年)
3. 会報購読会員 (会費 3000 円/年)
 - ・会報 (6 回発行/年)
 - ・語る会に参加する際は、その都度、会場費等として参加費をお支払い下さい。
4. 語る会聴講 (参加費 一般 2000 円/回、学生 1000 円/回)
 - ・年会員、学生会員でない方は参加費を支払っていただきます。

☆ 年会員・学生会員、会報購読会員の会費は1月から12月まで1年分とし、中途入会の方も上記の会費にてお願い致します。

☆ 入会希望の方、会員の方は、下記用紙に必要事項を記入してFAX・郵送するか、下記書式に従いメールを送るか、いずれの方法でも構いませんので、必ず事務局まで届けて下さい。

☆ 会費納入は郵便局にて以下の口座にお振込み下さい(手数料は各自でご負担願います)。

総合口座 10010-54101181

生活文化同人 代表者 吉田桂二

☆ 不明な点、質問などは新事務局までお問い合わせ下さい(事務局が変わりました)。

生活文化同人事務局 新井 聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南 2-5-5-404

TEL: 048-432-8651. FAX: 048-443-8713. E-mail: nook@d6.dion.ne.jp

※生活文化同人はボランティアにて運営されている会です。滞りない会の運営のために、**会費の納入は2月末まで**にお願いします。

生活文化同人事務局 新井聡 行

■2002 年生活文化同人登録書 (入会申込み・会員更新・変更届・退会届)

(会員数の把握、名簿整理のため 2001 年度会員の方もお送り下さい。ご協力お願いします)

1. 下記の該当する欄に○をつけて下さい。

新規会員の方 1. 年会員 2. 会報購読会員

既に会員の方 1. 継続 2. 年会員に変更 3. 会報購読会員に変更 4. 退会

2. 氏名、連絡先等をご記入下さい

氏 名: _____

勤務先: _____

勤務先住所: 〒 _____

TEL _____ FAX _____

自宅住所: 〒 _____

TEL _____ FAX _____

E-mail: _____

3. 会報送り先を下記のどちらかに○をつけて指定して下さい。

1. 勤務先 2. 自宅

■2002年第2回「語る会」のお知らせ

語る人 増田一眞 (増田建築構造事務所 代表取締役)

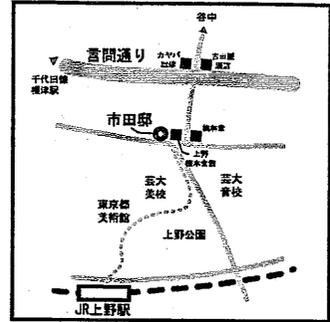
「建築構法の変革」などの著書や、セミナーなどを通して建築の構造、構法にさまざまな提言を行っている増田一眞氏をお招きし、氏の「木のこだわり」について伺います。

日時 3月29日(金曜日) 午後6時30分から

場所 谷中・市田邸 東京都台東区上野桜木1丁目6-2

・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います。(酒代等は割り勘です。)

・参加希望者は3月27日までに下記までご連絡ください。発表希望者も下記までご連絡ください。



◆事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南2-5-5-404

Tel : 048-432-8651. Fax : 048-443-8713.

E-Mail : nook@d6.dion.ne.jp

■次回世話人会のお知らせ

日時・場所：未定 (会員の方には後日、事務局よりご連絡いたします)

- ・生活文化同人の活動方針や、定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」ですが、世話人以外の方も自由に参加できます。(ただし、酒代などは自腹です。)参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■編集後記

- ・突然、会報編集を任せられ、戸惑いながらもはじめた会報づくりでしたが、とにかく第一回目の会報が出来上がりました。一年間よろしくお願ひいたします。(飯島)
- ・大平のパンフに続き会報の担当に…飯島さんとともに頑張りますのでよろしくお願ひします。(高松)

■会報編集局より

- ・会報原稿を募集しております。「私の近作」「主張」「旅の報告」「スケッチ」など何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・同人会員の活動等、情報をお寄せください。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・会報を偶数月の初旬に発送する関係上、原稿締め切りは奇数月の20日です。

◆2002年度事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南2-5-5-404

Tel : 048-432-8651. Fax : 048-443-8713.

E-Mail : nook@d6.dion.ne.jp

◆2002年度会報編集局 飯島克如 (まちづくりカンパニー・シーブネットワーク)

高松俊秀 (東京理科大学修士1年)

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-7YK 駿河台

Tel : 03-3233-2311 (代表). Fax : 03-3233-1312.

E-Mail : kijijima@tama.or.jp

生活文化

seikatsubunka

目次

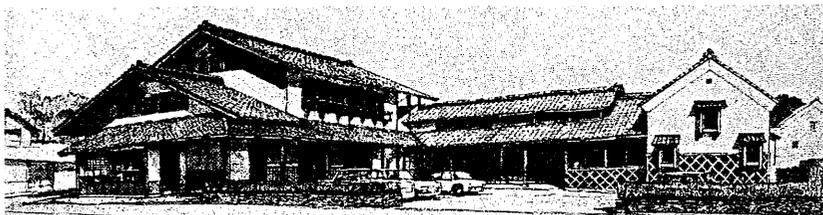
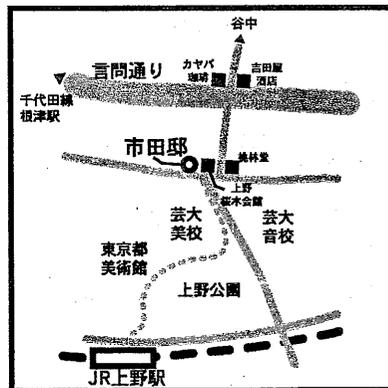
- P 2... 第9回「大平建築塾」へのお誘い
- P 6... 第二回語る会報告「伝統木構法の復権」
- P14... 増田一真さんの伝統木構法の復権に参加して
- P15... 第三回語る会案内
- 別紙... 大平建築塾参加申込書

生活文化同人会報

2002年4月 No.54

2002年第3回「語る会」のお知らせ

講師：吉田桂二
テーマ：私の近作から
日時：6月7日（金） 6時半～
場所：谷中・市田邸



■第9回「大平建築塾」へのお誘い……………吉田桂二

衣食住の全般にわたる化学物質による汚染は、住宅空間においては「シックハウス」症候群と呼ばれるなど、多くの人達の告発によって根絶に向かいつつあります。農作においては「有機農法」、建築においては「自然素材」が、時代を先取りしたものとして評価を高めています。これは良いことであるに違いありません。

しかし、評価を高めているということは、それを簡えば「儲かる」ことを意味しているため、「この際これで一儲け」とか、「羊頭狗肉」の商法が混入しつつあることも事実です。これは「環境保全」という全人類的命題からの逸脱でしかありません。



このため、生活文化同人では、『今、何故、木にこだわるか』

を、今年のテーマとし、例会を開いてきました。今回の「大平建築塾」は、このテーマについて、もっと多くの人達と共に語り合うことで、参加した人がそれぞれに、より本質的な理解に至ることを目標として開きます。基調講演をしてくださる木原啓吉さんは、大平宿の保存再生運動を、朝日新聞の1ページ人の大きさで最初にキャンペーンして下さった恩人です。それから30年の年月が経ちました。その年月は何を意味しているのでしょうか。大平宿にとっては記念すべき講演です。多くの方々のご参加を求めます。

生活文化同人

■第9回大平建築塾

テーマ：「自然環境保全と木材資源の活用」

開催日時：2002年7月20(金)～2002年7月22日(日)

7月20日

現地到着次第受付

13:00～ 開塾式……………会場：紙屋

15:00～ 大平宿探検散策

17:00～ 夕食

19:00～ 夜会公演

アフリカン太鼓



7月21日

現地到着次第受付

9:00～ 基調講演

木原啓吉

『木の文化』

12:00～ 昼食

13:00～ 分科会

分科会Ⅰ 「地域材活用型住宅」をつくる

講師：石川毅、聞き手：吉田桂二

分科会Ⅱ なぜ、国産材にこだわるのか

講師：小川耕太郎

分科会Ⅲ 散策「天然林」

講師：田中淳司

分科会Ⅳ 三重の林業事情と私の取組み

講師：堀内宏樹

17:00～ 夕食

19:00～ 懇親会 会場：紙屋



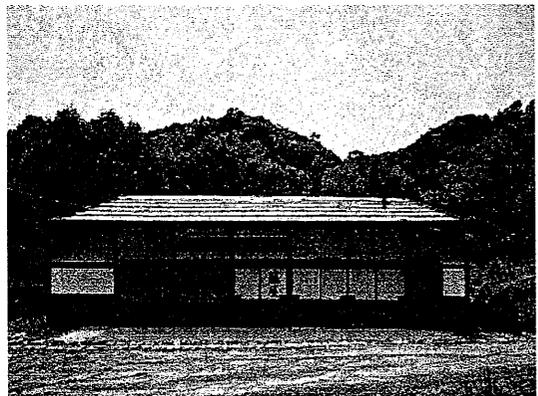
7月22日

現地到着次第受付

9:00～ 各宿清掃・改修

11:00～ 閉塾式

12:00～ 解散



■分科会紹介

分科会Ⅰ：「地域材活用型住宅」をつくる

講師：石川毅氏 聞き手：吉田桂二

内容紹介

国産材の活用を図るには、需要の確保が絶対的な前提となる。そのためには、誰にでも求められる低価格の住宅を、量的安定的に造ってゆく態勢が必要である。しかし同時に、山林資源のサイクルを恢復することも重要となる。前者は「常陸樹の家」後者は「NPO やみぞの森」と、運動としてスタートした。

石川 毅…NPO「やみぞの森」理事。茨城県水戸市の工務店「棟匠」社長、石川林産社長の傍ら、家づくりに対する問題意識を共有する仲間と水戸市内を中心に勉強会を重ね、NPO設立への運動を積極的に推進した中心的人物。社長の座を息子に譲り、現在はNPO活動に専念している。「『やみぞの森』はボランティア団体でなく、一般市民を参加させた循環経済システムづくりの事業をやるところなのです」

吉田桂二…生活文化同人代表にして大平保存再生協議会理事。昭和51年に大平を訪れて以来、市民、行政、学者を巻き込んで大平宿の保存と再生に情熱を注ぐ。連合設計社市谷建築事務所代表取締役。全国町並み保存連盟顧問、日本ナショナルトラスト保存活用委員など。日本建築学会賞など受賞多数。住宅、町並みに関する著書多数。

分科会Ⅱ：なぜ、国産材にこだわるのか

講師：小川耕太郎氏

内容紹介

- 1・外材ではダメなのか。
- 2・国産材にこだわるのはなぜだ。
- 3・国産材をどう使うべきか。
- 4・山を守ろう。
- 5・今後の課題。
- 6・自由討論

小川耕太郎…1961 生早稲田大学卒。不動産会社・旭化成ホームズ（株）を経て、1992年に家業の製材業を継ぐため尾鷲に戻る。1998年の製材業倒産をきっかけに地域の山林循環経済活動に対しどのような取り組みをしたらよいのか考えるようになる。

1998年紀州の林産物「山のハチミツ」のからでる無駄巣（蜜ロウ）を利用して作ったワックス「未晒し蜜ロウワックス」開発着手する。1999年に自然の恵みを活かした商品の販売を始め、同年5月に未晒し蜜ロウワックス 特許出願する。

現在 未晒し蜜ロウワックスの製造・販売を中心に自然食・炭の販売をしている。

NPO エコリビング推進認証協議会 理事

尾鷲ひのきプレカット協同組合 理事

木材販売会社(株)おわせ木楽屋 アドバイザー

分科会Ⅲ：散策「天然林」

講師：田中淳司

内容紹介

当分科会は、木曾の天然林を田中淳司さんに案内してもらいます。

天然木にはいろんな個性があります。山のプロにいろいろ聞いてみましょう。

子供達もどうぞ。

田中淳司…1951年、木曾郡南木曾町に生まれ。1969年、地元の蘇南高校卒業後、東京墨田区向島の材木店に就職する。1971年、木曾へ帰り、家業の田中木材店を手伝う。国有林、民有林の立ち木を買い付け、伐採、搬出、素材販売及び造林業を行って現在に至る。

田中淳司さんは、長野県林業士に認定され、2001年から長野県林業士会長を務められています。また、日本林業技術協会認定の林業技士（森林評価、林業経営）の資格も取得し、前向きな仕事をしています。1977年には、地元の若者達と南木曾町林業研究クラブを立ち上げ、山づくり、町づくりを実践しています。

ここ十年程は、木曾川の上下流交流を行っており、愛知県等の親子連れなど多くの人に木曾へ来ていただき、山仕事を体験してもらうなどの活動も行っています。また、1995年には「がんばれ神戸」で神戸の被災者の住宅環境の整備のための木材支援も行ったそうです。

分科会Ⅳ：三重の林業事情と私の取組み

講師：堀内広樹

内容紹介

我々にとっての林業というもの。これは『知っているようで意外と知らない』ものであるように思います。この分科会では20年間三重県の山中で林業経営にたずさわっていらっしゃる堀内さんに話していただきます。

- ・堀内さんの林業生活の紹介（スライド）
- ・林業の現状、そして今、林業の何が問題なのか
- ・地方行政と林業の間にあるもの
- ・戦後の植林政策は果たして失敗だったのか * これからの林業の可能性

堀内広樹…1959年 三重県の中央部、飯南郡飯高町に生れる。

1970年 11歳で上京、東京暮らしが始まる。

1977年 成蹊大学経済学部入学。

1982年 同大学中退。家業である林業を継ぐ為に帰郷。叶林業合名会社を経営しながら現在に至る

■「伝統木構法の復権」…………… 報告者：飯島克如

第二回の語る会は構造家の増田一眞氏（増田建築構造事務所 代表取締役）をお招きして、伝統木造を構法の切り口から見た木へのこだわりを「伝統木構法の復権」というテーマで語っていただいた。



■伝統木構法の取り巻く現状

建築構法は「環境問題」「資源問題」「文化の問題」「生活の問題」「形態の問題」の5つの大きな問題に関わっている。

「環境問題」と「資源問題」では、特に今、森林の役割の話がよく巷でされているが、外国産材が入ってきて日本の山が荒れて、山の状況が徐々におかしくなっている。やはり、森林を育成しないとどうも良くない。「文化の問題」では、日本の伝統文化として、伝統構法をどう活かすのか。「生活の問題」と「形態の問題」では、人間の生活の経済と文化という、大きな構法をどうするのか。建築構法の問題は多岐にわたる。しかも、これらの問題は歴史的な流れの中で考えなければならないはずだ。しかし、品格法ができて以来、在来軸組以外の構法ができない事態になり、木造の建築構法が全くおかしくなっている。大棟梁達が綿々と伝えてきたものが科学の名の下に否定されている状況である。

■伝統から学ぶということ

では、歴史的な流れの中で考えるとはどういうことなのか。

山本勝巳さんは、現代建築でありながら伝統民家を尊重した作家である。

古民家再生も結構だが、何で現代の設計がこれから200年後に移築する価値を持ったものできないのかという皮肉を問わずにはいられない。「古民家、古民家」と騒いでる作家に対して、現実に彼の様に頑張っている人もいる。

以前やった仕事で古厩邸と言う住宅が(図1)ある。この古厩邸は基本的には本棟造り風という平屋。これは二階の柱を1mぐらい伸ばしてそこに小屋裏をつくって、全部貫で頑張ったというものである。

この古厩家は塩尻にあり、昔は新潟から塩を運ぶ馬を扱っていたという家柄である。その家の歴史を繙くと、前回の新築が安永9年1780年で、今回2002年。220年経っている。220年経って、「新築しました」といっている。今の建築はその十分の一である。兵庫県の、室町の初期の民家は500年。千年家といわれているのが500年くらい。法隆寺は1,300年。伝統建築について持た

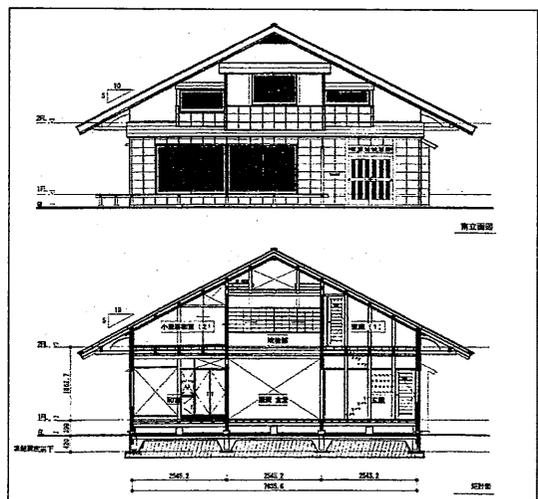


図1：古厩邸、立・断面図

せるに値する文化財を造った事は評価するが、木造が千何百年も持つのは嘘だ、みたいな

事を言う人もいるが、そんな事はない。

例えば、五重塔というのはなぜ地震に強いのか。あんなのは大工が偶然作ったから価値がないみたいな意見もある。しかし、そういう言い方をしたら、発見なんて全て偶然に過ぎないという言い方しかできない。偶然にできたのはなぜかという事を分析して初めて理論になる。

五重塔を揺らすと各層ごとに蛇行する(図2)という事が一般的に知られている。五重塔は、足固めと、桁固めを持ったラーメン構造で、その典型である。そして、柱が太くて梁が細い。つまり、揺れを受けた五重塔の柱が傾くと梁の一方は下がり、一方は上がり、全体として梁はS字状に変形する。この梁の中央に水平線を引くと、一つ上の層の柱は傾いた高さで立ち上がる。つまり、元々真直ぐ建っていたものが反対に傾こうとする。これが地震を制する制震力となる。

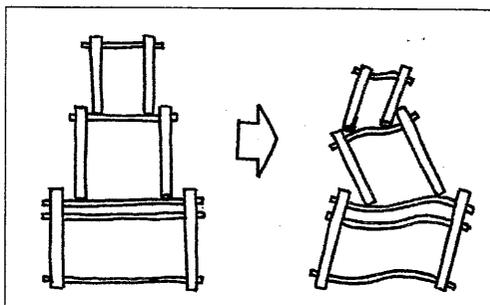


図2：五重塔揺れのモデル

免震という考えは、地面の揺れの縁を切ろうという考えである。ところが、制震というのは、例えばビルの上に水槽を置いて揺れようとする力を戻そうとする力である。五重塔は期せずして制震構造になっていたのだ。だから、五重塔がなぜ地震に強いのかを研究していれば木造の5階建て、10階建てぐらいは実現していたはずである。高層にするほどこれは有利になる。現に、道後温泉では3階建ての柱だけのものが立っている。昔の3階建ては殆ど壁がない。そういう構造は原理として成り立つのだ。高層にすればするほど固有周期は長くなる。これが一つの経験された形が生み出す効果なのだ。こういう事実ですら気がついていない。構造がなぜそう振舞うかを考えてみてようやく解るのだ。

実際に沖縄の建築なんか見ると柱は太くて梁は細い。その方が、揺れに対しては有利なのだ。以前そんな説明を先の古厩邸をやってくれた大工の三浦氏にしたら、彼がある地方の三重塔を見せてくれた。確かに、柱は太いけれども細い梁がダブルで入っている。静力学的に考えると、ラーメン構造で柱が細くて梁が太い方が合理性があるけれども、制震性というパタンを考えるとこっちの方が優れているという事が予測されるのだ。

一方で次のような話もある。伝統木構法で使われる土壁というのは剛性が高い(1cm変形させるのに何kgの力が必要かというのが剛性という)。剛性の高い土壁に最初に地震力が入ってきて揺られているうちに土壁が剥落する。それで、貫構造でやるときは壁の耐力を一切無視して柱と貫の曲げ抵抗だけでどのくらいもつかを構造計算する。貫と柱によって変形を受けるとめり込もうとする。そのときの許容応力度は木構造の基準が決められているから、それで許容応力度以内であると証明をして役所に出す。ところが、「そんな事を書いた本はどこにもない」という。「本を読んでしているわけではないが、力学を応用して許容応力度以下なのにどこが悪いのか」というと、「前例がない」となる。建築学会の基準に則ってやったことがオーソライズされないという現実がある。

■伝統木構法と在来構法の違いについて

日本伝来のものというのは、壁にあまり頼らない。柱だけの架構が主で、壁はつけるにしても非常に二次的な部材である。それが在来工法になると壁以外を構造要素として認めないと言う。

壁と柱のどこが違うか、柱というのは曲げ。壁というのは剪断力。剪断力を筋交いで頑張る。筋交いは軸力系。

ヨーロッパ人から教わって初めて筋交いが見直された様に言われているが、知らなかったということではなくて、平安時代以来、大きな地震が起こる度に筋交いを入れたらいいのではないかという話は必ず出ていた。しかし、入れてみるとどうも具合が悪いという経験的なもので否定されてきたわけである。

確かに、ヨーロッパのように架構を立体構造にすれば筋交いも成り立つ。しかし、今の筋交い構造は壁が孤立し、そこに筋交いを入れる。だから、力を入れると壁は倒れようとする。それを金物で押さえる。極めて発想が単純なのである。

■建築構法の「原理的考察」

伝統木構法と現代木構法を原理の上で比較すると、20項目ある。これで明らかになってくるのは現代の木構法は伝統を否定した上で成り立っているものだから、伝統から学んでいるものは一つもないということである。

1：総持構造・単一構造	8：多段抵抗・一発勝負	15：解体移築・使い捨て
2：立体架構・平面架構	9：各層独立・連層壁柱	16：耐久使用・短期使用
3：応力分散・応力集中	10：抵抗関節・回転関節	17：素材活用・資源浪費
4：応力平等・軸力偏重	11：曲直自在・直線平面	18：適材適所・乾式ボード
5：靱性志向・剛強志向	12：締付接合・金物接合	19：環境適合・拒否反応
6：合成材化・単材主義	13：構造表現・構造隠蔽	20：四季対応・気密断熱
7：制震免震・最大入力	14：保守点検・放置主義	

1：総持構造・単一構造

単一構造には抵抗要素として筋交いと金物だけしかない。伝統木構法だと11位数えられる。その中で一番重要なのが、柱と梁の関節抵抗だが、土壁、手摺、造作材と呼ばれている物や、建具ですら、ちょっと頑丈な物を造れば抵抗要素となる。奈良の町を歩いていると太い格子2寸ぐらいの格子がよくある。これらも完全に耐力壁になる。つまり伝統構法ではこれが耐力だと特定できないくらいたくさん抵抗要素がちりばめられている。個々で見るとそんなに強くないが、全体としては丈夫になる。つまり総持構造。しかしこれは、計算にはなかなか乗らない。そんな事はないと計算をきちんとする必要がある。

2：立体架構・平面架構

縦、横、垂直、水平に組み合わせて一つの格子を作る。ちょうど、ジャングルジムのように三次元の架構になる。

3：応力分散・応力集中

例えば 95%の信頼性があるものを直列結合する。例えば鎖を縦につないでいく。そうするとその 1 個が 95%の信頼性があっても、100 個直列につながると、信頼性が 0%に近づく。(図 3) 縦に信頼性を書いて横に部品の数のグラフを書いてみると、つなげる部品の数が増えると 0 にどんどん近づく。逆に信頼性が 5%ぐらいしかない物を、並列に結合

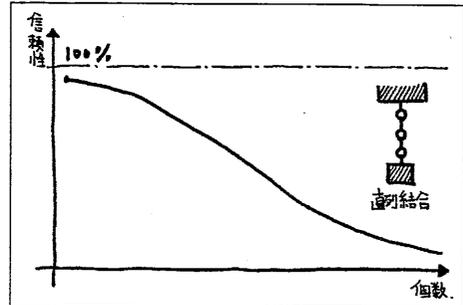


図 3：直列結合の場合

していく。そうすると、1 個だと 5%の信頼性しかない物が 100 個つながると信頼性は 100%に近づく。(図 4) 航空機の世界ではフェイルセーフと呼ばれている。日本建築は大昔からこれを採用していた。

筋交い構造と比較すると、筋交いは 1 つの架構にせいぜい数箇所、それ以上はまずない。x y 方向にあわせてもせいぜい 8 から 10 箇所がやっとである。だから、筋交いだけの場合、10 本の筋交いのうち 2 本が蟻でやられたら、8 割なる。

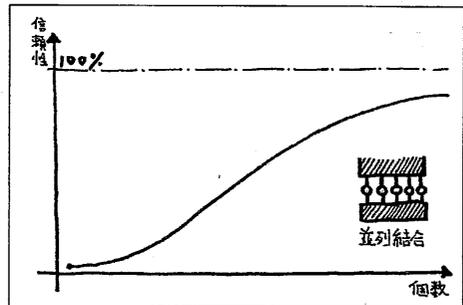


図 4：並列結合の場合

それに対して、伝統木構法の接点の数は 500 から 1,000 箇所ある。それらがすべて、地震に対して抵抗要素になっている。地震に対してそれらの接合部が抵抗要素になっているので、1 箇所 2 箇所おかしいところできておびくともしない。だから、大工さんがちょっと楔を甘く締めたからって、問題にならない。

4：応力平等・軸力偏重

応力とは、架構がどういう抵抗をするのかということで、外力に対する内力ということ。一つは曲げ。柱や梁を S 字に曲げる力で、回転で示される。二番目が軸力。これは、筋交いやツッパリで、材軸方向に働く。三番目は剪断。剪断力は面材に特有なもので、こういう平行な力を加えても簡単に平行四辺形にはならない。構造というのはこの応力をコントロールして、建物を大丈夫な壊れない範囲にとどめるかということだから、三つの応力は対等に扱うという事。

5：靱性志向・剛強志向

荷重をかけていくと、はじめは変形が直線だが、段々と曲線になってどこかで壊れる。靱性というのは壊れるまでのこの面積の事をいう。これが大きいほど、簡単には破壊しない。筋交いはこの変化がもっと急激に高い。というのは、剛性が高いから。剛性が高い変わりに、靱性が少ない。木造フォーラムで発表されていたが、伝統建築の貫と板倉、この二つのもっている靱性は非常に大きい。

6：合成材化・単材主義

一つの架構を考えたとき、柱と壁に取り付いている腰壁や垂れ壁、これがあるかないかでもものすごく負担の仕方が違ってくる。見方を変えれば壁というのは、せいど大きい合成された柱なのだとみなすべきで、それに水平に貫通している腰壁、垂れ壁は合成された梁と

見なすべきなのだ。これはこれで太い柱と太い梁でラーメン構造になっている。つまり、すべてを構造に活かそうというのが構造屋の発想である。だから、部分壁もすべて構造材として考える。

7：制震免震・最大入力

五重塔が何で倒れないのかというのは制震性があるから。

免震の話では、阪神大震災の後、すぐ、二層の山門を見た。なぜか山門からずれて礎石がある。これは、おそらく、山門が耐え切れなくて、ぼんと飛んだのだ。話には聞いていたが、実際にこれを見たときは本当に驚いた。足下と礎石を固定していたら間違いなく倒れていた。だから、固定しないほうが絶対に良い。これが、しなるだけしなって耐え切れなくなったらボンと飛ぶ。礎石のものは本当に免震性がある。

8：多段抵抗・一発勝負

伝統木構法では、外力に対して最初に土壁が抵抗して、その次は貫、差物、柱と抵抗し、最後に石が抵抗する、少なくとも五段階の逃げを持つ。外力に対して、一発でやろうというのは筋交いの考え方である。筋交いがもしペシヤンとなったらドンと倒れる。阪神大震災の被災地を全部回って、伝統をきちんと守っているところは壊れていないという報告もある。

9：各層独立・連層壁柱

通し柱で無ければいけない理由は何にも無い。通し柱の通す事のメリットというのは、地震の揺れで大きな引抜が起った場合、全自重が抵抗に参加するから、安全だという話だけである。それならば、桁を返して柱を抜けないようにするという工夫を昔の人は色々やっている。柱を通すということは、一様に傾くとき、完全に折れる。在来構法軸力系を採用して、いながら、曲げが発生するやり方を強制する。これは在来構法の大きな矛盾だ。軸抵抗に徹するならば、各層独立を採用するべきである。

10：抵抗関節・回転関節

通し貫を最たる物として、ホゾというのは通常梁幅の三分の一から四分の一の寸法といわれている（実は、三分の一ぐらいにしたほうが良いのではないかと思うが）。在来軸組ではホゾの抵抗を0にしている。しかし、ここの抵抗がけっこうがんばる。引き抜きにも耐えるし、剪断や曲げにも耐える。それらを全部活かすべきである

11：曲直自在・直線平面

木というのは成長の過程でいろいろと曲がる。その部分をアテと言う。そこは常時曲げを受けているために強い。ところがそれを製材してしまうと、基応力（元々木が受けている応力）が解凍してバンとはじけてしまう。基応力は、曲がったなりにしておいてやれば活きるけれども、それを製材すると、むしろ木を狂わしたり、壊したりする力になる。だから、昔の民家は曲がり材を曲がったなりに使った。柱でも梁でも、実にそのほうが自然なのだ。引っ張り試験をしますと、繊維の方向に引っ張ると非常に強い。それを少し傾けるととたんに引っ張り強度は落ちる。今の梁はアテの部分も真直ぐに切るため、真直ぐな梁に対して斜めに繊維がはしっている。梁に一番引っ張り応力がかかるのに、これではひとたまりも無い。

12：締付接合・金物接合

込み栓やシャチというのは穴をあけてずれないようにとめるだけではない。例えば、ホゾ穴の場合（図5）、ホゾ穴をあけて、それを受けている梁のほうは少しずつ穴を開ける。微妙にずらして穴をあけているので、栓をすると部材が互いに引き付けられる。これを締め付け接合という。これは単なる組み立てではなくて、接合部をしっかり固める効果がある。昭和5年ごろの建物の解体に立ち会ったことがあるが、柱と梁に打ってある楔は手でいくらやっても抜けない。それぐらい打ち込んで非常に大きな与圧を与えているから、木の乾燥についていく。繊維方向の乾燥率は8%ぐらい、長手方向でもコンマ何%ぐらいにはあるので、普通にただ組んだだけではガタがでる。楔とかシャチとかで締め付けてやるということは基本的に大事なことなのである。

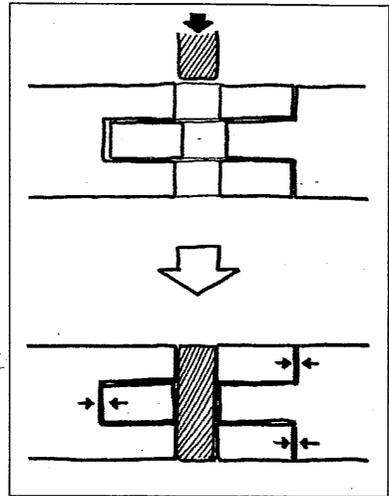


図5：ほぞ穴の締め付け接合

13：構造表現・構造隠蔽

構造と意匠とが完全に一体になっている。これは日本建築の最大の特徴である。

14：保守点検・放置主義

点検をし易くしておかないと保守が出来ない。そういう意味では昔の建物というのは、小屋裏や床下に入れるようになっていて、そこにもぐりこんで、保守の仕事が出来るようにゆったりと造っている。庇というのは主構造を支える役目に加えて、あがれば母屋も治せる。気仙の方の町並みでは庇が道路に対してダツと連なっている。何でそうなっているのかというと、何かのときそこが一つの道路になる。昔の人は町並みまで考えていたのだ。

15：解体移築・使い捨て

現代建築は解体して移築するということが出来ない。伝統木構法では組み手、差し口、柱を支えている物を抜けばそのままガラガラと移動して、また他の場所で基のように作ることが出来る。古いからといって捨てない。むしろ、百年ぐらい経てば、乾燥は十分という状態で、狂いも終わり、木は完全になる。その完全乾燥の材を再利用する。そういうことがあたりまえ。古建築を見ると必ず古材が使われている。

16：耐久使用・短期使用

耐久使用。今の建築は25年と言われている。しかし、実際には15年ぐらいでみな壊されている。これは、経ってから200年くらいはもつ。

17：素材活用・資源浪費

素材の活用では、古材の活用も含めて、木というものを如何に知って素材というものを使っていたのか。これは、現代建築の浪費とは全然違う。素材重視である。

18：適材適所・乾式ボード

適材適所というのは土台には、石を使う。壁には土壁を使う。建具は木や紙を使う。先の素材活用とかなりダブってきてはいますが、トータルとしては環境に非常に適合している。

19：環境適合・拒否反応

どの部分も腐れば土に返り、環境を汚染しない。町並みなんかも、非常に周りの景観に溶け合っている。周りの環境に背を向けていない。

20：四季対応・気密断熱

人が衣替えをするのと同じように、建築も冬になると冬支度、春になればその準備を行う。年中行事の一つです。僕らは、子供の頃、露の初めに畳をはいで石灰を撒いたりした。そういう思い出はとても楽しいし、子供たちの成長の過程では大切だと思う。

■建築構法の「方法的考察」

さらに、木造架構の可能性について追及してみる。

架構形態というのは何によって抵抗するのかという、主体応力による形態分類がある。まず、曲げ抵抗、剪断抵抗、軸力抵抗、以上の三つの基本的な架構形態。さらに、これらを組み合わせたものが、三つできる。それは、曲げと軸力を組み合わせたもの、曲げと剪断を組み合わせたもの、剪断と軸力を組み合わせたもの。そして、三つともあるもの。以上、全部で7つの架構形態がある。つまり、架構形態はこれほど多様に考えられるのだ。

それから、それらを解析するためにどの様にモデル化するのかという問題がある。伝統の仕口、接ぎ合わせ等をもっと合理的に追求すると木構造はもっと自由になる。

木構造の柱梁の接合部を考えると、1,000のオーダーある。少ないもので500。ちょっと大規模なものになると、すぐ2,000を超える。だから、軸組全体を眺めていると、どこがどう頑張っているのかが解らない。しかし、ある単位（例えば梁と柱の周辺）で切断してみると何種類かのユニットに分けられる。架構をそのユニットの結合として捉えると、いちいち計算しなくてもユニット自身の剛性のデータをきちんとしておけば誰もがユニットの組合せで架構全体を考えることができる。

これならば、デザイナーの皆さんが初歩から力学を勉強してやる手間が省ける。

最後に剛性部材、たれ壁、腰壁、そういったものを構造部材としてみる。特に、剛性を建築全体からみる。それが現代には欠けている。これらの架構の存在が全く入ってこない。

■実験で証明する

構造の計算方法は100人の人がいれば100人答えが違ってくる。なぜなら計算というのは必ず仮定が入ってくるから。だからこそ、実験を大いにやるべきである。実験が一番説得力がある。

航空機構造設計では実験を何万回と繰り返してやる。そして、疲労破壊をしないという事を証明しないと飛ばさない。一方、建築は航空機の百分の一くらいしかお金をかけていない。ツーバイフォーは（あんな雑な構造はないと思っている）、一生懸命実験をする。そのデータを突きつけて丈夫だといっている。

阪神大震災後、吉田桂二先生に頼まれて試験用の小屋を造り、100人動員して綱をかけて引張ったことがある。同じことを建前が終わった後、設計耐力だけを確かめるといってお客さんの了解を得てやるべきなのだ。建て主の了解をとって、設計者がウンボかなんかを反力にして、張力計をつけて、変形を測り、設計耐力が十分にあるということ証明する。それを日本各地でやれば、在来軸組みしかできない状況を変えられると思う。

■活動の状況

現在、新伝統木構法セミナーを提案し、今年の正月から全国各地を回って、宣伝している。新伝統木構法とは、伝統をそのまま伝えるということではなくて、現代風に手を加えて提案したいという意図がある。

宣言をした当初、全国事業として取り上げるよう木造フォーラムに申し入れた。まだ、返事が返ってきていないが、働きかけ続けようと思う。一個人が幾ら全国を回って訴えても、非常に私的な動きでしかない。しかし、木造フォーラムが事業として取り上げることで、半ば公的な性格を持つ。だから、これを実現させるために主張を雑誌に載せたり、アンケートをしたり、色々やろうと思っている。

— 伝統の知恵に学び
現代の知見を加味し
創造的体系化を試みた —

新伝統木構法セミナー

講師 増田一真

四月開講 月一回 一年間

新伝統木構法セミナーの内容

丈夫で永持ちして美しく、環境に
風工にも適合した日本の誇るべき住
文化の伝統を私たちは継承しさらに
発展させなければなりません。
肝心なことは、歴代の匠たちの知
恵に学び、その上に現代の知見を加
味して創造的に体系づけ豊かにする必要
がある事を、今回主として留意し工夫し
た要を列記する。①次の通りです。
一 全ての応力を活用して形態と探る
二 柱の曲げ、壁の剪断の両れも復活する
三 部分壁を合成された構造部材とする
四 格子組や紋様壁を耐力要素とする
五 伝統の仕口・組手を重視する
六 集成材に頼らずムクの木材を使用する
七 筋違構法も含めて三次元の立体架構とする
八 合成材を含む格子梁組を完成させる
九 小屋組も三次元化を図り合理化する
十 性能を明らかにすると同時に資材と作成する
本セミナーは在来軸組の止揚も含めて、
伝統の知恵を活かした多様な新伝統構法
の格々一端のみ扱いたくありません。今後各地域で
さらにゆたかな展開がもたらされることを希冀す。

■増田一眞さんの伝統木構法の復権に参加して…………… 金田 正夫

改めて先人が育んできた構法の優れた面を知ることができました。長い歳月がいかに加減なものを淘汰しその結果生き残った技術に対して目を向けず全て否定してしまう行政や技術者の発想を残念に思います。かえって伝統構法技術の進歩の足を引っ張る結果に憤りさえ覚えます。

増田さんが講義の中で話されている様に実験によって行政に根拠を示していくことが今まで以上に求められていると思います。個々に努力している内容が横に交流され、その技術を共有し、確実な基礎データを一刻も早く確立して行政に認めさせていく運動の必要を感じました。

今回のお話の中で、最も端的に伝統構法の構造的優位性を表していたのが伝統木造と現代木造の比較でした。当日配られた資料の中からその見出し部分を改めて添えたいと思います。

一	総持構造	一	単一構造
二	立体架構	二	平面架構
三	忘力分散	三	忘力集中
四	忘力平等	四	軸力偏重
五	靱性志向	五	剛強志向
六	合成材化	六	単材主義
七	制震免震	七	最大入力
八	多層独立	八	一発勝負
九	各層独立	九	連層壁柱
十	捻抗関節	十	回転関節
十一	曲直自在	十一	直線平面
十二	継付接合	十二	金物接合
十三	構造表現	十三	構造隠蔽
十四	保存点検	十四	放置主義
十五	解体移築	十五	使い捨て
十六	耐久使用	十六	短期使用
十七	素材活用	十七	資源浪費
十八	適材適所	十八	乾式ボルト
十九	環境適合	十九	拒否反応
二十	四季対応	二十	気密断熱

対照表

第三回「語る会」案内 日時：2002年6月7日（金曜日）午後6時30分から
場所：谷中・市田邸（東京都台東区上野桜木1丁目6-2）

■語る人／吉田桂二

「私が何を考えて造っているか、近作を紹介しつつ語ります」

比較的小さい材を組んで大空間を造る

- 古河文学館
- 長浜鉄道文化館
- 大洲まちの駅
- 琴引浜鳴き砂文化館
- 内子町文化創造センター

モニュメントを造る

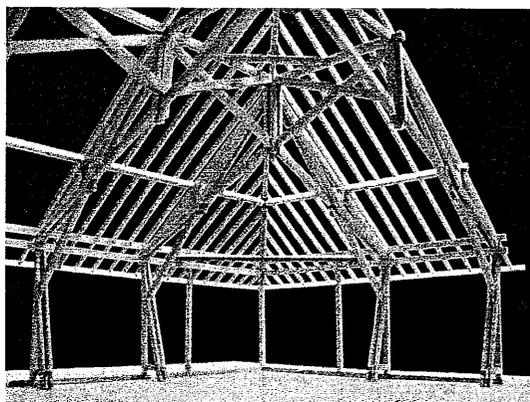
- 勝山市白山神社本殿鞘堂
- 大瀬成留屋の辻堂

木造+RC造で造る

- 松戸市本土寺
- 内村鑑三記念館



琴引浜鳴き砂文化館現場。



内子町文化創造センター：模型。

■2002 年第 3 回「語る会」のお知らせ

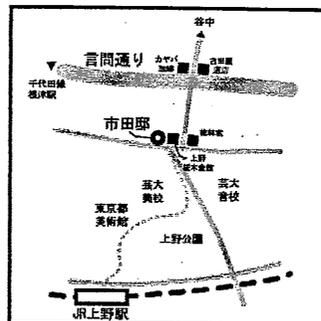
語る人 吉田桂二 (連合設計社)

第 3 回の「語る会」はこの生活文化同人の代表、吉田桂二先生に「私の近作」をテーマにお話を伺います。

日時 6月7日(金曜日) 午後6時30分から

場所 谷中・市田邸 東京都台東区上野桜木1丁目6-2

- ・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います。(酒代等は割り勘です。)
- ・参加希望者は6月5日までに下記までご連絡ください。発表希望者も下記までご連絡ください。



◆事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南 2-5-5-404

Tel : 048-432-8651. Fax : 048-432-8651.

E-Mail : nook@kjps.net

■次回世話人会のお知らせ

日時・場所：未定(会員の方には後日、事務局よりご連絡いたします)

- ・生活文化同人の活動方針や、定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」ですが、世話人以外の方も自由に参加できます。(ただし、酒代などは自腹です。)参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■大平建築塾の申し込みが始まります

詳しくは本誌 2 ページをご覧ください。

■事務局の FAX 番号と e-mail のアドレス変更のお知らせ

FAX : 048-432-8651、e-mail : nook@kjps.net に変わりました。ご注意ください。

■編集後記

- ・最近読んだ本で、リチャード・ワーマン著「理解の秘密」という本は面白かった。自分の行う説明が相手に理解されるにはたくさんの前提があるらしい。相手と自分は違うんだという素朴なところから始めて、色々な例を交えて理解の秘密が解き明かされる。ご一読あれ。(K.I)

■会報編集局より

- ・会報原稿を募集しております。「私の近作」「主張」「旅の報告」「スケッチ」など何でも OK です。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・同人会員の活動等、情報をお寄せください。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・会報を偶数月の初旬に発送する関係上、原稿締め切りは奇数月の 20 日です。

◆2002 年度事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南 2-5-5-404

Tel : 048-432-8651. Fax : 048-432-8651.

E-Mail : nook@kjps.net

◆2002 年度会報編集局 飯島克如 (まちづくりカンパニー・シーブネットワーク)

高松俊秀 (東京理科大学修士 1 年)

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-7YK 駿河台

Tel : 03-3233-2311 (代表) . Fax : 03-3233-1312.

E-Mail : kiijima@tama.or.jp

生活文化

seikatsubunka

目次

- P 2... 第9回「大平建築塾」へのお誘い
- P 6... 第三回語る会報告「私の近作から」
- P12... 「吉田桂二：私の近作から」
- P13... 吉田先生の近作を伺って
- P14... World Cup 2002 KOREA-JAPAN ～サッカー狂のひとりごと～

生活文化同人会報

2002年6月 No.55



写真 大平宿からまつや

第9回大平建築塾へのお誘い

テーマ 「自然環境保全と木材資源の活用」

基調講演 木原啓吉 『木の文化』

2002年7月20日(土)～7月22日(月)

■第9回「大平建築塾」へのお誘い

テーマ 「自然環境保全と木材資源の活用」

開催日時 2002年7月20(土)～2002年7月22日(月)

衣食住の全般にわたる化学物質による汚染は、住宅空間においては「シックハウス」症候群と呼ばれるなど、多くの人達の告発によって根絶に向かいつつあります。農作においては「有機農法」、建築においては「自然素材」が、時代を先取りしたものとして評価を高めています。これは良いことであるに違いありません。

しかし、評価を高めているということは、それを商えば「儲かる」ことを意味しているため、「この際これで一儲け」とか、「羊頭狗肉」の商法が混入しつつあることも事実です。これは「環境保全」という全人類的命題からの逸脱でしかありません。このため、生活文化同人では、『**今、何故、木にこだわるか**』

を、今年のテーマとし、例会を開いてきました。今回の「大平建築塾」は、このテーマについて、もっと多くの人達と共に語り合うことで、参加した人がそれぞれに、より本質的な理解に至ることを目標として開きます。基調講演をしてくださる木原啓吉さんは、大平宿の保存再生運動を、朝日新聞の1ページ大の大きさで最初にキャンペーンして下さった恩人です。それから30年の年月が経ちました。その年月は何を意味しているのでしょうか。大平宿にとっては記念すべき講演です。多くの方々のご参加を求めます。

吉田桂二

□日程

7月20日

現地到着次第受付

13:00～開塾式 会場：紙屋

15:00～大平宿探検散策

吉田桂二 特別講義

「木造建築の秘訣教えます(仮題)」

17:00～夕食

19:00～夜会公演

アフリカンパーカッション

わきたにじゅんじと「ニヤニング」

7月21日

9:00～基調講演

木原啓吉

『木の文化』

12:00～昼食

13:00～分科会

分科会Ⅰ「地域材活用型住宅」をつくる

講師：石川毅、聞き手：吉田桂二

分科会Ⅱなぜ、国産材にこだわるのか

講師：小川耕太郎

分科会Ⅲ 散策「天然林」

講師：田中淳司

分科会Ⅳ三重の林業事情と私の取組み

講師：堀内宏樹

17:00～夕食

19:00～懇親会 会場：紙屋

7月22日

9:00～各宿清掃・改修

11:00～閉塾式

12:00～解散

□特別講義・夜会公演紹介

特別講義：「木造建築の秘訣教えます（仮題）」

講師：吉田桂二

内容紹介

木造建築というと、誰もがその難しさを語ります。確かに、それを深めていく道程は一朝一夕にはできるものではありません。しかし、その道を歩くための道しるべとなるものは、きっとあるはずです。今回は、木造建築の第一人者であり、生活文化同人の代表を勤められている吉田桂二氏を講師に迎え、木造建築の秘訣を探ります。「木造建築をつくる世界に興味はあるが、その取っ掛かりが見つからない」「木造建築のデザインを深める道筋がわからない」そんな、人たちには沢山のヒントがこの講義で得られるはずです。ふるってのご参加をお待ちいたします。

夜会公演：わきたにじゅんじと「ニヤニング」

アフリカンパーカッションを中心としたエネルギッシュなユニット！

わきたに じゅんじ、関本満成のアフリカンパーカッションを縦糸に岡ちゃんギターとサンシンと歌を横糸に、つむぎ出される安らぎの響き！目指すのは「癒し」！

メンバー紹介

わきたに じゅんじ ☆本格的なアフリカンパーカッションユニットにとどまらず津軽三味線、ギター、尺八、サクソ、バイオリン、パンフルート、詩吟、詩の朗読等多方面に渡るライブ活動を展開中。

関本満成 アメリカにドラマーとして留学した経歴を持つ。アフリカを度々訪れアフリカパーカッションの音の広がりを目指している名手。彼の歌もまた、必聴！

岡ちゃん ロックギターから沖縄エイサー、サンシン（三線）、そして歌までこなす芸達者。幅広い経歴から生み出される癒しの歌！

□分科会紹介

分科会Ⅰ：「地域材活用型住宅」をつくる 講師：石川毅氏 聞き手：吉田桂二

内容紹介

国産材の活用を図るには、需要の確保が絶対的な前提となる。そのためには、誰にでも求められる低価格の住宅を、量的安定的に造ってゆく態勢が必要である。しかし同時に、山林資源のサイクルを回復することも重要となる。前者は「常陸樹の家」後者は「NPOやみぞの森」と、運動としてスタートした。

石川 毅…NPO「やみぞの森」理事。茨城県水戸市の工務店「棟匠」社長、石川林産社長の傍ら、家づくりに対する問題意識を共有する仲間と水戸市内を中心に勉強会を重ね、NPO設立への運動を積極的に推進した中心的人物。社長の座を息子に譲り、現在はNPO活動に専念している。「『やみぞの森』はボランティア団体でなく、一般市民を参加させた循環経済システムづくりの事業をやるところなのです」

吉田桂二…生活文化同人代表にして大平保存再生協議会理事。昭和51年に大平を訪れて以来、市民、行政、学者を巻き込んで大平宿の保存と再生に情熱を注ぐ。連合設計社市谷建築事務所代表取締役。全国町並み保存連盟顧問、日本ナショナルトラスト保存活用委員など。日本建築学会賞など受賞多数。住宅、町並みに関する著書多数。

分科会Ⅱ：なぜ、国産材にこだわるのか 講師：小川耕太郎氏

- 1・外材ではダメなのか。
- 2・国産材にこだわるのはなぜだ。
- 3・国産材をどう使うべきか。
- 4・山を守ろう。
- 5・今後の課題。
- 6・自由討論

小川耕太郎…1961生早稲田大学卒。不動産会社・旭化成ホームズ(株)を経て、1992年に家業の製材業を継ぐため尾鷲に戻る。1998年の製材業倒産をきっかけに地域の山林循環経済活動に対しどのような取り組みをしたらよいのか考えるようになる。1998年紀州の林産物「山のハチミツ」のからでる無駄巣(蜜ロウ)を利用して作ったワックス「未晒し蜜ロウワックス」開発着手する。1999年に自然の恵みを活かした商品の販売を始め、同年5月に未晒し蜜ロウワックス特許出願する。現在未晒し蜜ロウワックスの製造・販売を中心に自然食・炭の販売をしている。NPO エコリビング推進認証協議会 理事
尾鷲ひのきプレカット協同組合 理事
木材販売会社(株)おわせ木楽屋 アドバイザー

分科会Ⅲ：散策「天然林」 講師：田中淳司

当分科会は、木曾の天然林を田中淳司さんに案内してもらいます。

天然木にはいろいろな個性があります。山のプロにいろいろ聞いてみましょう。

子供達もどうぞ。

田中淳司…1951年、木曾郡南木曾町に生まれ。1969年、地元の蘇南高校卒業後、東京墨田区向島の材木店に就職する。1971年、木曾へ帰り、家業の田中木材店を手伝う。国有林、民有林の立ち木を買いつけ、伐採、搬出、素材販売及び造林業を行って現在に至る。田中淳司さんは、長野県林業士に認定され、2001年から長野県林業士会会長を務められています。また、日本林業技術協会認定の林業技士(森林評価、林業経営)の資格も取得し、前向きな仕事をしています。1977年には、地元の若者達と南木曾町林業研究クラブを立ち上げ、山づくり、町づくりを実践しています。ここ十年程は、木曾川の上下流交流を行っており、愛知県等の親子連れなど多くの人に木曾へ来ていただき、山仕事を体験してもらうなどの活動も行っています。また、1995年には「がんばれ神戸」で神戸の被災者の住宅環境の整備のための木材支援も行ったそうです。

分科会Ⅳ：三重の林業事情と私の取組み 講師：堀内広樹

我々にとっての林業というもの。これは『知っているようで意外と知らない』ものであるように思います。この分科会では20年間三重県の山中で林業経営にたずさわっていらっしゃる堀内さんに話していただきます。

- ・堀内さんの林業生活の紹介(スライド)
- ・林業の現状、そして今、林業の何が問題なのか
- ・地方行政と林業の間にあるもの
- ・戦後の植林政策は果たして失敗だったのか * これからの林業の可能性

堀内広樹…1959年 三重県の中央部、飯南郡飯高町に生れる。

1970年 11歳で上京、東京暮らしが始まる。

1977年 成蹊大学経済学部入学。

1982年 同大学中退。家業である林業を継ぐ為に帰郷。叶林業合名会社を経営しながら現在に至る

□第9回大平建築塾参加申込書

- この申込書に必要な事項を記入の上、事務局まで郵便またはFAXにて送付してください。
- また、参加費用は申込時に下記郵便講座に振込みをお願いいたします。申込された方にはパンフレットを郵送いたします。

☆ 申込書送付先・問い合わせ先

事務局 豊崎 洋子 (桂 設計工房)

〒333-0854 埼玉県川口市芝富士1-15-4

TEL: 048-261-3123. FAX: 048-261-3146. E-mail: kei@green.ocn.ne.jp

☆ 振込先

郵便貯金総合講座 10040-91126741

生活文化同人事務局 岸 未希亜

(上記の振込先・口座番号は大平建築塾用のものです。)

☆ お振込み後のキャンセルは原則としていたしかねますのでご了承ください。

1. 参加者(参加代表者)の氏名・連絡先・パンフレット送付先をご記入ください。

フリガナ 氏名: _____ 年齢: _____ 性別: _____

連絡先: ・勤務先 _____ ・自宅(該当する方に○をつけてください)

・住所 〒 _____

TEL _____ FAX _____ E-mail: _____

2. 同伴者がいる場合ご記入ください。

フリガナ 氏名・性別・年齢: _____ フリガナ 氏名・性別・年齢: _____

フリガナ 氏名・性別・年齢: _____ フリガナ 氏名・性別・年齢: _____

3. 参加日程に○をつけてください。

A日程(全日程参加)、 B日程(7月20日~7月21日)、 C日程(7月21日~7月22日)

4. 参加費用に○をご記入ください

A日程 大人: 15,000円 子供(小・中学生): 6,000円 合計: _____円

B・C日程 大人: 10,000円 子供(小・中学生): 4,000円 合計: _____円

5. 参加希望分科会に○をつけてください。(分科会の詳細は4、5ページをご覧ください。)

分科会Ⅰ: 「地域材活用型住宅」をつくる 分科会Ⅱ: なぜ、国産材にこだわるのか

分科会Ⅲ: 散策「天然林」 分科会Ⅳ: 三重の林業事情と私の取組み

6. 寝袋利用に○をつけてください。(レンタル利用の場合支払いは現地にて受け付けます)

レンタルします。(1泊: 2,000円、2泊: 2,000円)

持参します。

7. 利用する交通手段に○をつけてください。(飯田市役所からマイクロバスを手配いたします。)

自家用車で直接現地へ行きます

・席に余裕があるので誰かを便乗できます。 ・席に余裕がありません

現地まで自力で行きます。

飯田市役所からのマイクロバスを希望します。

『私の近作から』

講師：吉田桂二

最近公共建築を木造でつくることが多くなってきていますが、今年のテーマである『なぜ、木にこだわるのか』という視点から、その意味について考えてみます。

■はじめに

○なぜ公共建築を木造でつくするのか

これから紹介する建物の木材は、全て国産材を使用しています。日本の山には木が沢山余っているのですが、国産材はあまり使われていないのが現状です。国産材を安く使えるようにする為には、日本の山林の木が流通するような仕組みを作らなくてはならないのですが、公共建築は使う材が多いのでそれが可能です。(公共建築が日本の木材を使うようになることで流通の仕組みが成立し、住宅においても安く・簡単に木材を手に入れることが出来るようになると思われれます。)

○木材の寸法について

木材の寸法についてみると、ほとんどの住宅は2間を基本に構成されているので、市販されている木材の寸法も2間用を基本として作られています。つまり木材の大きさは住宅で決まっているのです。それに対し公共建築は大きな空間が必要であり、木材についても住宅の倍の大きさが必要になってきます。しかし、そのような大きな材は数も少なく、価格も高いため、現在の木造公共建築は木造と言えども集成材を使っている物が大半です。

しかし集成材はプラスチックのように固めてできた物であって、私は使いたいとは思いません。そこで私は市販されている安く短い木材を伝統構法でかみ合わせて繋ぐことで、公共建築に必要な大スパンを実現しようと考えました。

また、山に余っている木は60年製のものが多く、寸法的にはも四寸角が精一杯です。そのため、丸太を使い、材の直径が小さくても大きな断面をとれるようにしています。

○金物について

住宅ではコミ栓や車知を使うなど手間ヒマをかけてつくることができですが、大きな建築ではその様なことができないので、金物はボルトを使うことまでは許容しました。昔はボルトを使っても隠すようにしていましたが、現在は木材がしぼむことを考え、締め直せるように外に出すようにしています。

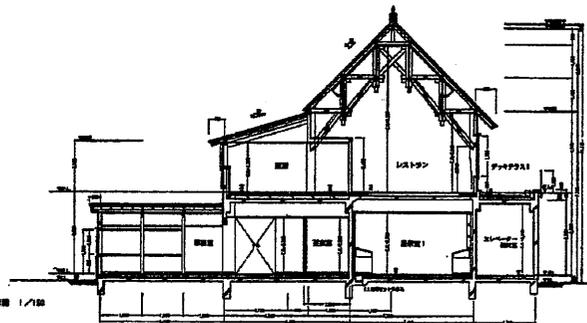
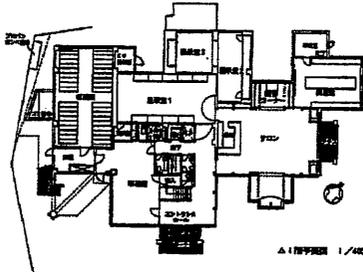
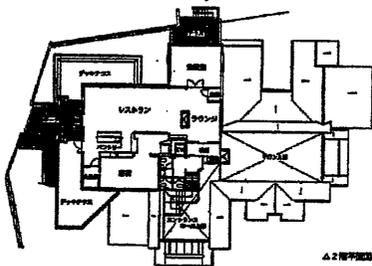
○構造計算について

短い材を組み合わせると曲げの部分をたくさんもつため、構造計算が難しいと思われ
ますが、そんなことはありません。重力のことはみんな生まれたときから体で感じてい
るのだから分かっているはず。構造計算は木組みをしてから行うべきもので、先に
構造計算してもらってはだめなんです。つまりそれは構造計算してからではないと
設計できないってことですから！

■作品介绍

○『古河文学館』

この建物は、古河歴史博物館の隣に設けられたもので、永井路子さんの蔵書を収蔵・展
示するスペースにレストランが併設されています。主構造は木造ですが、中にRCが隠さ
れていて、収蔵庫になっています。小屋組の特徴として頬杖が平面上でも斜めになっ
ていることがあげられ、そのため、接点が半分ずつずれています。また建物の四つの方
角には、北に玄武、東に青龍、南に朱雀、西に白虎と四神を型どったステンドグラスがあ
るんですよ。



○長浜の『鉄道文化館』

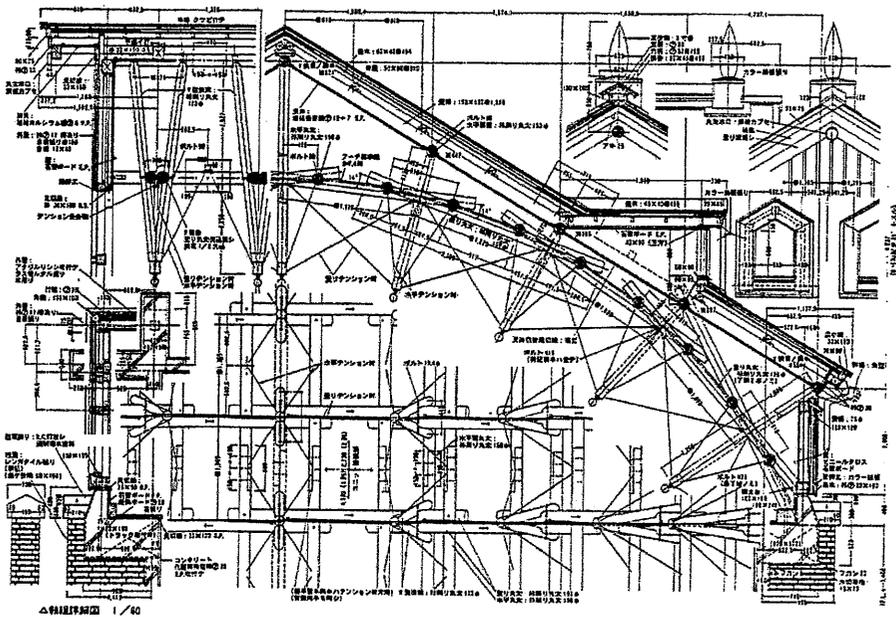
長浜はかつて敦賀から来る北陸線のターミナルになっていたところで、さらに琵琶湖
に面しているため、ここで船に乗り換え大津に向かい、大津から京都に行くための発着
点になっていました。この建物は日本最古の駅舎の横に、市で使っていた駐車場の一部
を利用してつくったもので、RC造の壁を四角に建ててその上に木造を載せた構造になっ
ています。

架構は五寸の丸太をアーチ状に組み、それに直交するように三尺間でも丸太をいれて
います。母屋は丸太をクロスさせて挟み込むことで競り持たせています。構造的にはそ
れだけでもちますが、丸い屋根だけではつまらないので、さらにV字型の材で挟み込み、

横揺れも防いでいます。

また、この建物の建て方は上部から行っていきました。このような単材で組んでいく構造は完成するときちりもつのですが、工事に時間がかかり屋根を葺くのに時間がかかるため、自然の丸太をそのまま使うのではなく削っています。削らないとひとつひとつの寸法が違いため、工事に時間がかかるんです。刻みは極めてラフなので、大工の腕というより、工事そのものの段取りが上手な工務店の方が仕事はしやすいんです。

室内を琵琶湖に見立て部屋の周りには模型の列車を走らせています。壁に琵琶湖の山と風景を描いたのですが、一泊二日で書き上げました。アーチの幅は7間半で、全体で大体60坪ぐらいあるのですが、この構造を考えたのは飲み屋にいる時で、割り箸を2本挟み込んでみたりして考えたんですよ。ぶら下がってきた柱の下に丸い電気を付けるのは・・・癖です！

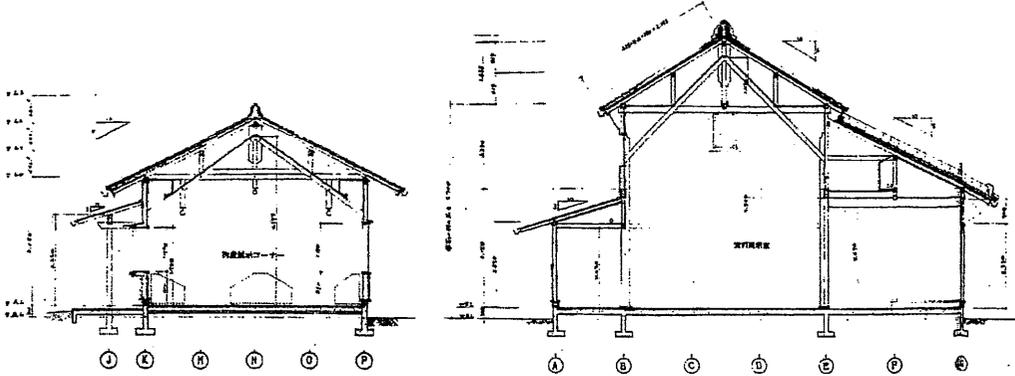


○熊川宿『道の駅』

熊川宿とは小浜から京都にいたる鯖街道のかつての宿場町で、伝建地区に指定され数年前から整備されています。“道の駅”とは聞いたことがあるとあると思いますが、国土交通省の補助金で行う事業で、国道沿いに休憩所と駐車場とトイレを設ける規定になっており、自治体がそれに付随させて何かをつくるような仕組みになっています。ここにはそれに展示館と食堂を主体としおみやげ物売り場を設けています。建物の配置は伝建地区ではなく、宿場町のちょうど入口に建っており、そこから保存している街道に入れる様になっています。建物のデザインは道路を走っている車の視線から魅力的に見えるようにつくっており、平屋の建物の群で構成されているので、全体的に町並みになるように考えてあります。

架構は和小屋なのですが、真ん中を頬杖で支えています。高さ関係にゆとりがないと、角度が緩くなってしまうので、頬杖を使うには天井が高くないといけません。さらに天

井が高ければ、天井の貼り方でいろんなことができ、間接照明や配管等を隠すなど色々なことができ便利です。丸太は杉の磨き丸太で、使ってる用材はほとんど杉です。

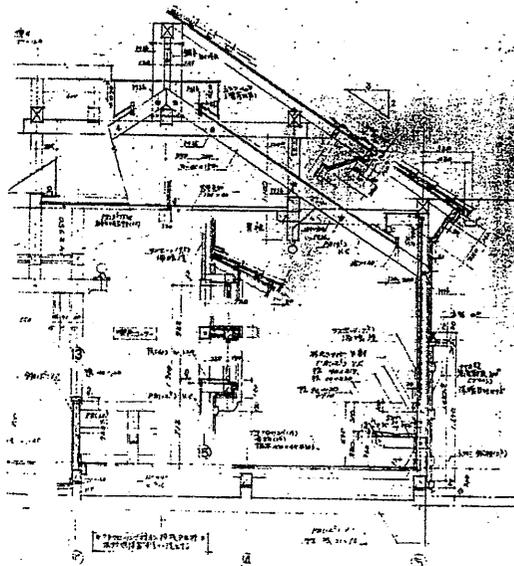


○大洲『町の駅』

この建物は、はじめ“道の駅”として計画していたのですが、「大洲は大きすぎて通過点ではなくターミナル的な都市なので」と、断られてしまいました。そこで、国産材を60%使うと補助金が出る制度があるのでそれを利用し、“道の駅”ならぬ“町の駅”をつくったのです。物産館、情報コーナー、相談所、人力車の発着所、公衆便所等があります。

昔は斜め材は使っていませんでしたが、今は使用しています。理由は、斜め材の魅力です！付け柱からも脱却しました。また、二階の床の構造はALC板を使い、根太はいつさい使っていません。一間間の梁の間に幅200厚さ100のALC板を載せていくことで、二階は土足でも構わないようになるんです。頬杖は真ん中にダブルにしよわせているが、こうすることにより材断が小さくてすむのです。そのためにも天井高が必要になります。壁は必要なく、柱が自立しているので、物産館の扉は全て開放して青空マーケット的な使い方ができるようになっています。

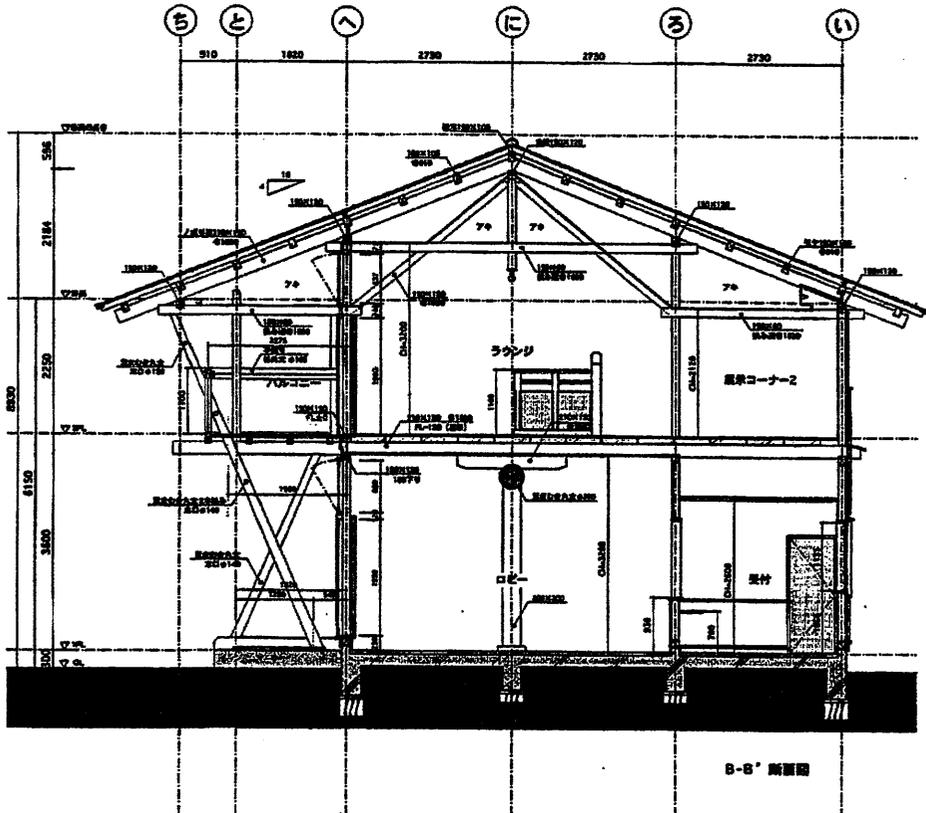
大体屋根は五寸勾配になっていて、土蔵の勾配は主屋と土蔵の母屋の間隔によって決まっています。誰にも分からないが、うまくいったな～と自分で密かに喜んでるんです。人力車を引くのは大洲の職員です。「街の人は市の人とは良くやってくれる」となり、良いことだと思えます。しかし大洲の市内だけでなく内子へ・・・というお客もいる。その時は、がっくしくるらしいです。天井や壁は全部和紙で、和紙で頑張っている今立に頼みました。ぶら下がってきた柱の下に丸い電気を付けるのは・・・習性です！



○琴引浜『鳴き砂文化館』

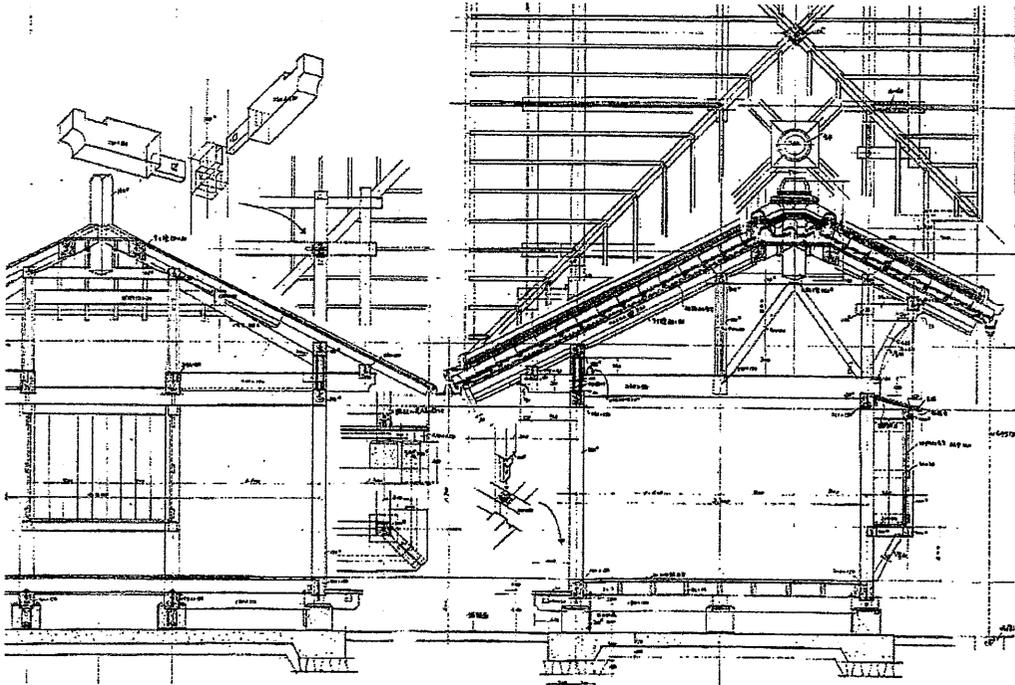
日本でも鳴き砂があるところはいくつかありますが、その中で最も琴引浜は中心的に残っているところで、そこに文化館を作りました。この建物はリゾートフルにしたいと思って作ったもので、ホールや展示室・ナショナルトラストの部屋があります。

市販の材料でつくると長さが限定されるので、建物の両側にあるX型のパットレスの片方はシングル、もう一方はダブルになっています。さらに梁を挟んで上へ行くとシングルになる。二本で一本を抱かせることで、長物を使わなくてすみ、それがデザインの要素にもなります。屋根はステンレス葺きで、風に飛ばされないことばかり気をつけていました。その経験があるもので・・・ここもALC板で根太がありません。横架材にアングルでとめている。この建物から木部を塗ることをやめました。木は塩害に強いんですよ、むしろ塗装の方が弱いかもしれないです。パットレスの部分はデッキで海がちらちらみえる。琴引浜のおみやげ屋さんなどは撤去するんです。浜が汚れるので・・・お金が余ったので、町の人がものを売ったりできる建物を作っています。ここにもやっぱり電気を付けてます！



○大瀬『成留屋の辻堂』

大瀬は内子の東部にあり、現在町並み環境整備がされ始めています。ポケットパークを三つ作ることにっていて、そのうちの中央に位置するものです。辻堂になっており、お遍路道に面していて、お遍路さんがここで休めるようになっています。壁が無く木組みだけでもたせています。そして、このポケットパークが街の中心になるように作りました。子供達もここで遊ぶのですがちゃんと靴をぬいでいます。お遍路さんがここで休んでいると前の家の人がお茶を持って来るんです。いい街なんですよ～。



他、現在計画中の白山神社本殿鞆堂、内子文化創造センター、本土寺、内村鑑三記念館、北陸線電化記念館についてのお話をさせていただきました。それらについては参加した方々だけの特権と言うことで・・・

最後に、公共建築のような大空間が必要な建築においては和小屋を脱却しなくてはなりません。市販されている木材を使い、小さな重ね梁にすることで、材料も少なくなりお金も安くすみます。建物の上部から腐ることは無いので架構は細くて良いのです。さらに、役所で条件を決めそれから入札するような制度ではいけなくて、街にボランティアとして関わっていき、長い付き合いの中で人や街との関係を構築し、街に必要なものを提案するようであればいけないと思います。

これからの目標は木架構で10間角で100坪の大空間をつくることです！！そして、私はまだまだ変わります！！

■「吉田桂二：私の近作から」……………佐々木 亨

今回の語る会では、「吉田桂二の近作」をスライドに説明を交え一通り見る事ができた。

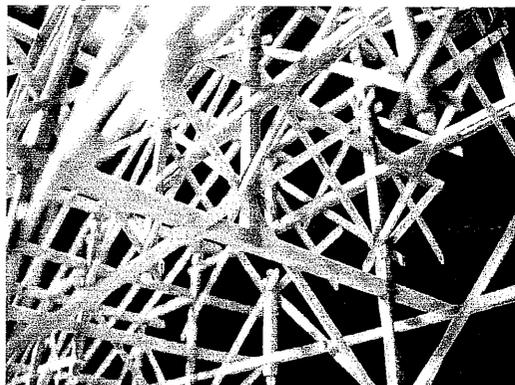
発表作品は2000年に竣工したもののから、まだ基本設計が終わったばかりの最新の作品も交え、住宅が省略され、公共建築が取り扱われた。

単に建築単体の設計の話だけではなく、これらの公共建築がたち上がるまでの経緯や吉田桂二の「まちづくり」にとって力点、建築家として、日本人として、まちを守り、育てるという心構えの講義であったように思う。

吉田桂二本人「この十年でずいぶんかわりました。」といわれていた。

重層的な間取りと屋根の運動性が一体となる、民家を支点にした家づくり。歴史的な文脈の再構築という課題が住宅というスケールである到達を迎え、1980年代の古河の街づくりを境に公共の分野での運動が開始した10年といえるのではないだろうか。

つまり「風土」に対する建築の存在の再確認と地域とのかかわり方の重要性が大きなテーマとなっているようにおもわれる。当然、住宅などの2、3間の架構と、公共建築に必要とされる4間以上の大きな架構とのデザインは変化している。



模型：内子町図書館情報センター

「小さな部材」の各接合部を介して縦横無尽に分散されて走る「力」の伝達の美しさは集成材や鉄筋には感じる事のできないものであるし、大きな架構でよりダイナミックに表現されている。また、大空間・大屋根の架構の中での空間・機能・形態のプログラムが「風土」をキーワードに再構築されている。

建築から風土までの構築。つまり「柱」1本、

「建具」一枚から「住宅・公共」の建築、そして「風土」、「地域」全体における諸要素と全体の構成が今の吉田桂二の運動であるとを感じる。

諸部分を集め、融合し、結合して一つの全体とするという、原理的に不可能な事意外に限界のない「構成」ということへの飽くなき挑戦の連続。

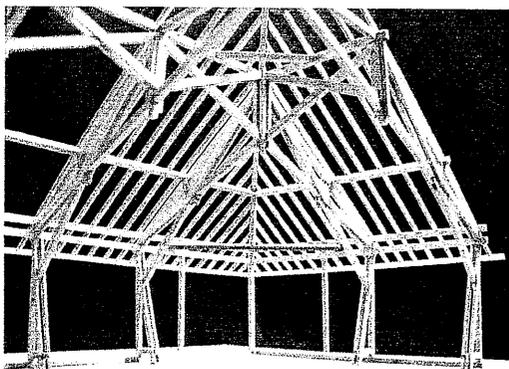
住宅にしる、大架構の空間にしる、まちづくりにしる、「構成」の手法や原理が明確になるためには、構成される諸要素が明確に「分節」されている必要がある。諸要素が判断できなければ構成はできない。要素の分節は、構成という概念全体にとって必要不可欠な大前提である。構造体、線と面、プログラム、ヒエラルキー、スケールといったものまで、どんな小さな要素もデザインしてきた人が出来る技であるし、建築を目指す誰もが目標とすることである。

アーキテクトの奥の深さを再確認してしまう「語る会」だった。

「目標は10間×10間の100坪空間だ！」と、これからも進化しつづける吉田桂二がたのしみであり、間近でそれを学べる「松下村塾です！」と吉田桂二がいう生活文化同人・連合設計社でしっかり修行していきたいと思う。

大平建築宿ではこの話の続きが聞けるのではないかと今から楽しみだ。

ちなみに今回の大平建築宿では「吉田桂二の木造建築の秘伝教えます」といった特別企画も先ほど生まれましたよ。



模型：内子町文化創造センター展示室

■吉田先生の近作を伺って 長谷川順持

かつて2001年初頭に建築家広瀬謙二と吉田桂二の対談が生活文化同人主催で行われました。それに先立つこの対談を告知する文章で、吉田先生はこのように語られました。

1. 歴史は生きざまによって継承される。
1. 伝統は創造によって蘇る。
1. 構造が造形の原点である。
1. 「美」の再生はありえるか.....

胸がすくような簡潔で深みあるテーゼ。しかも全く消費されていない新鮮なテーマ。

これらは「広瀬先生の建築から感じる対談のテーマを」、という私の依頼に吉田先生が答えたものです。

今思えば、これらは全て広瀬建築から感じる何かではなく、吉田建築のコンセプトそのものそのものであるといってもよく、吉田桂二氏自身の創作活動を支えるおのずからを「未来に走らせる」強い、強い「想い」に他ならなかった。

この語る会に参加した皆さん、それぞれ手許に配付された資料を手がかりに記憶を辿り、写し出された作品ひとつひとつを、上に掲げた四つの「視点」から考えてみるとよいです。「吉田先生はすごいなあ.....」という感想ではなくて、ここに参加した未来を担う人たちへのメッセージが、それは言葉ではなく、具体的な「空間としてのメッセージ」が聞こえてきますね。きっと。

■World Cup 2002 KOREA・JAPAN ～サッカー狂のひとりごと～ 岸 未希亜

日本の多くの人たちが注目し、仕事を休んでまでしてテレビで日本代表を応援するという光景がいたるところで見られるなど、「ワールドカップ 2002」が6月の1ヶ月間、日本と韓国で開催されました。これまでサッカーにあまり関心の無かった人までが「にわかサッカーファン」となって、連日繰り広げられる熱戦に見入ってしまったようです。

ぼくは幼い頃からサッカー（世界標準は「フットボール」）に親しんできて、初めてのワールドカップは6歳のときにテレビで見たアルゼンチン大会でした。その時の記憶はほとんどありませんが、次のスペイン大会そしてメキシコ大会と、ワールドカップはいつでも世界の一流選手が集う舞台上、当時の日本サッカーの実力を思えば、日本人にとっては全く別世界の出来事でした。ただただ、画面の向こうの一流選手が繰り広げるスーパープレーを鑑賞する場であったという思い出があります。

それから10年も経たない93年の秋、有名な「ドーハの悲劇」が起きました。深夜にも拘らず、日本人の多くがテレビで自国の代表チームを応援するという現象に、カルチャーショックを覚えつつ、「おいおい日本が出ちゃうのかよ？」と、喜びと戸惑いの感情が複雑に交錯していたその最後の最後に、日本は奈落の底に突き落とされたのです。ワールドカップは依然として、神々が一堂に会する彼岸の出来事に過ぎませんでした。

それから3年後、何を血迷ったのか、まだ一度も出場したことのないワールドカップの2002年開催に名乗りを挙げた日本は、結局、韓国との共催という形で本当にワールドカップの開催国になってしまいました。この時まだ、多くの日本人はそれが何であるかよく知らなかったようですが。

その年に予選の始まった1998年フランス大会への出場権獲得は至上命令でした。なぜなら、実力で一度も出場していない国が「開催国として初出場」という珍事（恥づかしい話）になってしまうからです。そして訪れた歓喜の瞬間。日本がワールドカップ初出場を決めたイラン戦でのVゴール勝ち、は、「ジョホールバルの歓喜」として知られるところです。しかし本大会では、1次リーグ3戦全敗、得点1という惨めな成績しか残せませんでした。ワールドカップの舞台に漸く足を踏み入れたものの、まだまだ険しい山の頂を拝むことができなかった、というところです。

World Cup 2002 KOREA/JAPANの観戦チケットが販売されたとき、取りあえずぼくも申し込みはしました。周りで申し込みをしている人は少ないし、自分もどうしても行きたいというほどではありませんでした。と言うのも、この日本で開催されるワールドカップが、今までテレビで見てきた「あのワールドカップ」とは別物のような気持ちがかかっていたからです。ところが、そんなぼくの元にチケットの当選通知が届きました。よりによってそれは競争率の高い日本戦でした。

日本がワールドカップに出場することを想像したこともない少年時代、ぼくが見てきたサッカー、また自分自身がプレーする上で影響を受けたサッカー、それはワールドカップを頂点とする海外の

サッカーでした。現在もサッカーを続けていることもあり、今でも日本代表の試合を見る時は、評論家のような厳しい視点になってしまいます。そんなぼくが日本で行われるワールドカップの日本戦を、スタジアムで見ることになるうとは・・・。

フランスがセネガルに敗れるという衝撃的な開幕戦。ワールドカップは確かに日韓両国で始まりました。日本は緒戦でベルギーに引き分け、第2戦ではロシアを相手に勝利を収めました。ベルギー、ロシア（旧ソ連）の両国は、過去の実績で明らかに日本より上位にありましたが、現在の力でも日本より上なのではないかと考えられていました。特に古くからサッカーに関わっている人ほど、心の中では日本代表を応援しつつも、日本の実力をなかなか肯定的に捉えることができなかつたと思います。とにもかくにも日本は、1勝1分という願ってもない成績で第3戦を迎えることになりました。

決勝トーナメント進出をかけたチュニジア戦。青一色に染まった大阪・長居陸上競技場のスタンドに、ぼくは立っていました。サッカー観戦といえば座って冷静に、というのがお決まりのスタイルだった男が、青いシャツを着て日本の勝利を願っていました。果たして日本代表は素晴らしい攻撃で2点を奪い、開催国の責務であるとはいえ、史上初めての予選リーグ突破を成し遂げました。自国の代表の勝利を信じて声援を送るという当たり前のことが、これまでのワールドカップ観戦には欠けていましたが、これからはブラジルやイタリアとまではいかないまでも、世界の国々と同じような楽しみ方ができそうです。

サッカーというスポーツが世界中で愛され、人々がこれほど熱狂するのはどうしてなのか？今回のワールドカップを通じて日本にもその波が広がれば嬉しい限りです。



日本の勝利に沸く大阪・長居陸上競技場 [2002. 6. 14]



チケットを手に記念撮影

■「大平建築塾の申し込み」お詫びと訂正

第二回会報での大平宿の日程の曜日と申し込み先のファックス番号が誤って、表記されておりました。会員各位には大変なご迷惑をおかけしました。お詫びすると共に下記の通り訂正いたします。

大平建築塾の日程

2002年7月20日(土)～2002年7月22日(月)

申し込み先

事務局 豊崎 洋子(桂 設計工房)

〒333-0854 埼玉県川口市芝富士1-15-4

TEL: 048-261-3123. FAX: 048-261-3146. E-mail: kei@green.ocn.ne.jp

今回の会報でも、ご案内しております。前回会報では申し込み期日が6月末日でしたが、まだ申し込みを受け付けております。皆様の御参加をよろしくお願ひいたします。

■次回世話人会のお知らせ

日時・場所：未定(会員の方には後日、事務局よりご連絡いたします)

- ・生活文化同人の活動方針や、定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」ですが、世話人以外の方も自由に参加できます。(ただし、酒代などは自腹です。)参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■事務局のFAX番号とe-mailのアドレス変更のお知らせ

FAX: 048-432-8651、e-mail: nook@kjps.net に変わりました。ご注意ください。

■編集後記

- ・先日、NHKの特集でヒートアイランドのドキュメンタリーをやっていました。東京周辺での局地的な集中豪雨の災害や深刻な光化学スモッグはこれが原因と考えられているようです。このヒートアイランドという現象は実はローマ時代から都市ではあったそうです。人の営みの業の深さを感じてしまいました。(K.I)

■会報編集局より

- ・会報原稿を募集しております。「私の近作」「主張」「旅の報告」「スケッチ」など何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・同人会員の活動等、情報をお寄せください。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・会報を偶数月の初旬に発送する関係上、原稿締め切りは奇数月の20日です。

◆2002年度事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南2-5-5-404

Tel: 048-432-8651. Fax: 048-432-8651.

E-Mail: nook@kjps.net

◆2002年度会報編集局 飯島克如 (まちづくりカンパニー・シーブネットワーク)

高松俊秀 (東京理科大学修士2年)

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-7YK 駿河台

Tel: 03-3233-2311 (代表). Fax: 03-3233-1312.

E-Mail: kijijima@tama.or.jp

生活文化

seikatsubunka

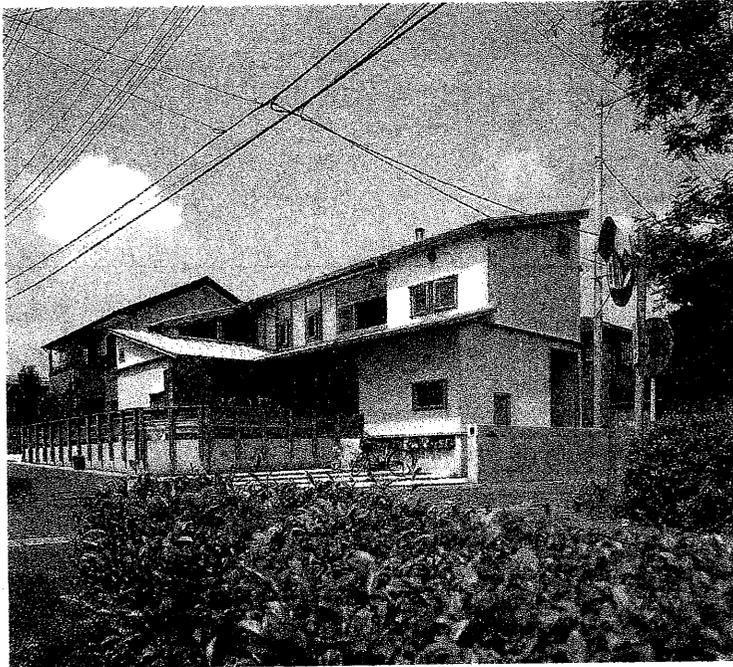
目次

語る会のお知らせ	・・・2
第9回「大平建築塾」の報告	
開塾式	・・・3
夜会公演	・・・4
基調講演	・・・5
分科会	・・・6～9
感想	・・・10～11

生活文化同人会報

2002年8月 No.56

2002年第4回「語る会」のお知らせ



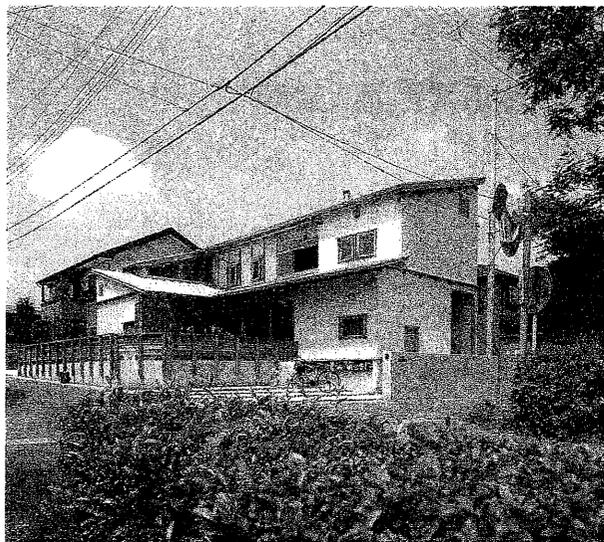
『安藤邦廣+設計工房禺の仕事』見学会
案内人 設計工房禺 對馬英治さん
日 程 10月26日(土)

2002年度「語る会」「なぜ、木にこだわるか」 シリーズ第4回目

「安藤邦廣＋設計工房禺の仕事」見学会

案内人 設計工房禺- 對馬英治さん

世話人 松本昌義



(チルチンぴと 22号より転載)

当日の見学予定

- ・つくば市鞍掛「棚部邸」
(板倉の家、左写真)
- ・つくば市 泉「稲葉邸」
(民家再生 コンフォルト 55号に掲載)
- ・予備的な候補として
土浦市永国台「中野邸」
(民家再生)

当日の連絡先

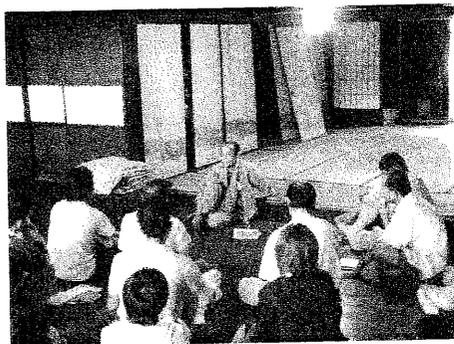
090-3108-8954 (松本携帯)

- ・日 程 10月26日(土)
- ・集合場所 JR土浦駅 東口
(改札を出て左に折れ、階段を降りて外へ出るとタクシー乗場があるので、その付近で。ここから用意していただいた車に乗ります)
- ・集合時間 午後1時15分
(電車) 上野発 12:30 特急フレッシュひたち 25号 → 13:13 土浦着
上野発 11:50 普通 → 13:01 土浦着
- ・注意事項
※参加希望者は事務局まで必ずご連絡ください。(締切 10月22日厳守)
※直接車で参加される方はご連絡ください。土浦駅よりも都合のよい落ち合い場所を連絡できるかもしれません。ただし、懇親会がある場合は(あってほしいと思っておりますが)飲めません。念のため。



第9回大平建築塾のあしあと
2002.7.20～22

7月20日(土)



木造建築の秘伝
教えます

吉田桂二氏により、開塾式の前行われました。はたして秘伝は受け継がれたのでしょうか？

開塾式

今年のテーマは「自然環境保全と木材資源の活用」です。今年の大平はでは、どのような“出会い”があるのでしょうか？





夜会公演

わきたにじゅんじ
と
「ニャニング」

夜会公演の報告 金田正夫

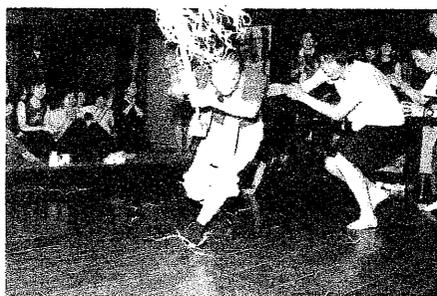
1日目の夜『紙屋』の会場で行われたアフリカ太鼓ライブの様子を演奏者の脇谷さんから寄せられた手記がとともリアルに綴っておりますので、その文をお借りして紹介に替えさせていただきます。

最初、積算と淳ちゃんてジンベ2本の掛け合いを2曲、早くも客席から声が掛かります。ますます気合いが入ります。ほとんど飛ばしすぎです。すごい勢いです。最初からこんな状態ではこの先どうなる事か・・・

3曲目からOKA-Pさんに入ってもらい、ギター、ジンベ、バラフォンでミディアムテンポの「かずさダンス」(去年、木更津でできました)。さらにOKA-Pさんの唄で「安黒屋ユンタ」。ここでメンバー紹介とこれまでの曲を紹介しました。

次にじゅんちゃんのテーブルドラムのソロのイントロの後、関本さんの唄で「カキランビ」、その後もう一回曲目の紹介とバラフォンの説明、そしてこれからの2曲の紹介です。

「スマイルフォーエバー」と「ルシータのある夜のステージ」(メロディーあり)です。ルシータの半ばを過ぎたところ、異変はこのあたりからでした。お客様が躍りて参加してくださいました。もちろん飛び入りです。



1人、また1人、今度は2人で絡みながらです。大いに受けています。そのうち、5人、6人と増えて行きました。アンコールの時なんか前院で踊っていただきました。100人のダンス! 強力です! 築ウン百年の家の床がまるでトランポリン状態です。演奏していて、いつか床が抜けるのではないかと冷や冷やしていました。

これが、倍の200人だったらどうなっていたか分かりません。ギネスに申請でしょうか? いや、100人トランポリンでもギネスものかも・・・

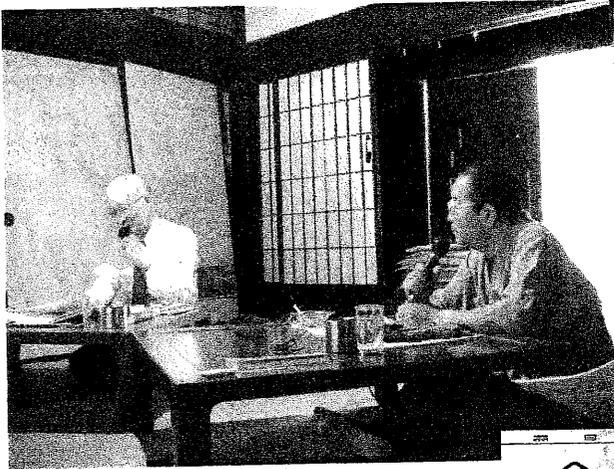
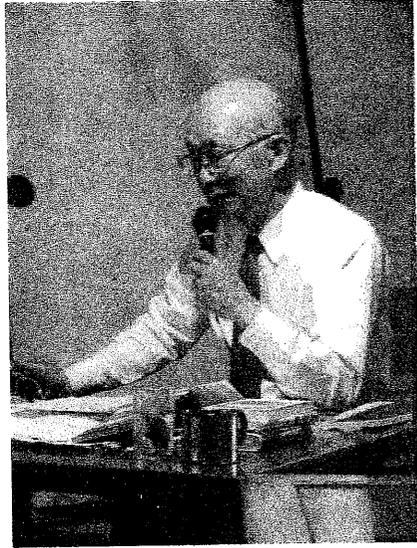
つづく・・・

メンバー: じゅんちゃん (脇谷順治) 太鼓、バラフォン
OKA-P (岡ちゃん) ギター、沖縄三味線、ボーカル
関本満成 太鼓、バラフォン

7月21日(日)

基調講演

木原啓吉
VS
吉田桂二



今回の基調講演は、大平宿の保存再生運動を朝日新聞の1ページ大の大きさで最初にキャンペーンをしてくださった木原啓吉さん。

歴史的環境の保存問題がどのような歴史的系譜の中で登場してきたか、明治以来の文化財保護の流れの中でその経緯を事細かに説明していただいた。さらに、イギリスにおけるアメニティーの思想や、大平の保存に尽力された当時の様子を熱心に語って頂きました。



分科会 I

石川毅
VS
吉田桂二



「地域材活用型住宅」をつくる

第一分科会ではNPO「やみぞの森」の活動を通し、地域材を活用した一般市民も参加させたネットワークの中でお仕事をされている棟匠の石川さんをお迎えして、吉田桂二さんとの対談形式で話をさせていただきました。

会の前半は、分からないことだらけの私たち学生に対して、木材のことから建築のことまで、懇切丁寧に教えていただきました。後半には一人一人に対して、学生生活とこれから社会に出て行くにあたって抱えている、様々な夢や迷い・悩みについて聞いていただき、心強くなるアドバイスまでいただきました。

さらに分科会終了後には吉田桂二さん自らに大平宿を隅々案内していただき、解説をしていただきました。

諸先輩方との出会いやお話を聞くことによって勇気をいただき、次世代を担い、次世代に生きるという自覚や希望が生まれ、いつのまにか不安や迷いが消えていました。そして、大平での出会いや経験を心に留め、自分たちの生きる道を見つけていきたいと思えます。ありがとうございました。





分科会Ⅱ・Ⅳ

小川耕太郎
&
堀内宏樹



第2・4分科会の報告 藤谷智史

第二分科会：小川耕太郎さん『なぜ、国産材にこだわるのか』

第四分科会：堀内宏樹さん『三重県の林業事情と私の取組み』

のジョイント分科会スタイルで行われました

まず前半は、堀内さんのお話から・・・

分科会のスタートは、昨年堀内さんが伐採した100年モノの樹木の年輪をたくさん床に置いて年輪が非常に正直に、台風や伐採などの周辺環境の変化を反映することを解説していただきました。さらに120枚のスライドを通して、堀内さんの林業経営の手方や、現在の林業の問題点、そしてこれからの可能性を話していただきました。

後半は小川さんにバトンタッチ。小川さんは『外材ではダメなのか』『国産材になぜこだわるのか』等の問題を投げかけながら、現在の木材の流通の低価格化がかかえる窮状を話していただきました。

その後、参加者の対話も交えながら、時間一杯までのやりとりが發展しました。小川さん、堀内さん共に仕事のベースが三重県であることも幸いして初対面とは思えない意思疎通をうかがわせながら意識の高いやりとりが行われたように思います。

分科会 III

散策「天然林」

田中淳司

第3分科会の報告 飛山龍一

★大平峠を越えてすぐ、木曾谷の天然林を田中さんの案内で2時間ほど散策しました。

Q：この太い木は何という木ですか。

A：サワラです。およそ300年の木です。木曾檜が尾根沿いに多いのに対し、サワラはこういう沢筋に多く生えています。昔、尾張藩は、木曾檜とサワラ、それにネズコ、ヒバ、コウヤマキを禁伐にして残しました。これらを総称して木曾五木と言います。

Q：檜とサワラ、樹皮が似ていますがどのように見分けるのですか。性質は違いますか。

A：上の方をご覧ください。枝が細いでしょ。それに、葉がすいているでしょ。これがサワラの特徴です。檜はもっと枝が太くて、葉が茂っています。サワラは檜のように強度がありませんが、水にめっぽう強くて、風呂桶やすし桶などに使われます。

Q：幹はどこが太るのですか。

A：樹皮と木部の間です。そこで毎年、新しい木部と（これが年輪になります）、新しい樹皮が作られます。ですから、表面の樹皮は何年も、何十年も昔にできたものなのです。



Q：枝は昔からあの位置にあったのですか。

A：枝の高度は何年経っても変わりません。下の方は枝がないでしょ。昔はあったはずですが、ずっと前に枯れ落ちて、幹が節跡を巻き込んでしまっています。

Q：根が張って、幹が浮いている木がたくさんありますが、どうしてですか。

A：倒れた幹や、根株に苔が生えているでしょ。そこに、小さな芽が出ているでしょ。この芽がやがて地中まで根を張ります。そのころには、元からあった幹や株が腐れてなくなってしまいます。昔の樵も、伐った木の株の上に実生の苗を植えました。

Q：この太い木はなんと言いますか。

A：トチです。もっと下った所に漆畑という集落があります。ここでは昔からトチを轆轤で挽き、木のお椀を作っていました。トチのお椀は白太部分を使います。建築と逆ですね。また、トチの実で、トチ餅を作ったりもします。

Q：北向きの方が良いと聞きますが、なぜですか。

A：あそこに見える木は、谷筋の方向ばかりに枝が張っているでしょ。木は光の当たる方に枝を張ります。南向きの木は四方に枝を張りますが、北向きの方は上からしか光が当たりません。だから、上に真っ直ぐ伸びて素直なんです。

Q：昔はどうやって木を伐り出したのですか。

A：沢までみんな運んで、沢を堰き止めダムにします。水が溜まり、木が浮いたところで堰を切って下に流します。また、木の滑り台、修羅と言いますが、そこを滑らせて降ろすこともありました。今は、架線ですり上げて降ろします。

Q：木に寿命はありますか。

A：そうですね。ブナやナラなら100年もしないうちに倒れてしまいます。このナラは、藁が巻き付いているでしょ。寿命ですね。下枝に元気がなくなってくると光が射し込み、藁が巻き付いてきます。一見、元気そうに見える木でも藁が巻き付いた木は何らかの欠点があります。

Q：建築に使う木はどこの木が良いですか。

A：やっぱり、その地域の気候、風土の中で育った木が良いでしょう。地元の木が良いですね。

散策「天然林」の記録 金田正夫

木曽国有林の中で田中さんが語られたお話の要所を以下に御紹介します。

■**檜**：木曽の檜は成長が遅い。四国だと木曽の倍は成長する。木曽檜の市場値段は元木で8～10万円2番玉で3万円位になる。

■**さわら**：針葉樹さわらは谷筋に多いのに対して檜はもっと高いところに育つ。樹齢300年位で70～80万円位。心の部分が無くなって空洞になっている物が多い。檜との見分けが難しい。さわらは枝が下に下がりがちで細く空が透けて見えがちなのが特徴。

■**自然林**：植林された林と違って広葉樹と針葉樹が混在しているので冬は広葉樹の葉が落ちて地面に陽があたる。植林された針葉樹林だと一年中陽があたらない事になる。広葉樹は針葉樹より寿命が短いので地面に笹が密生していて実生が出来ない所でも広葉樹が倒れると陽が当たり始め実生が可能となって山の再生が行われる。ぶなは100年位、なら・みずならば200年位、とちは300年位に対して針葉樹はこの何倍もの寿命がある。みずならば200年位経つと直径は1400mm位になるがそろそろ命を全うする時期にくる。地に笹がはびこると実生しなくなる。そんな時に倒木があるとその木に実生して新たな木の成長が始まる事がある。さわらの倒木に飛んできた種が根づいて息づいたりします。そのようにして育つと長い年月の後に倒木が腐ってなくなり空洞になる埠合がある。地面を履う笹は木の生育によくない。木の根を傷めるために木を製材したときに欠点が生まれる。しみ・割れ・水割れといわれるものはこの例になる。

■**風倒木**：台風のような強い風で倒れた木を言う。檜の場合で言えば時がたつに連れて周辺の白太は朽ちて無くなり中心の心材だけが残ることになる。

■**蔦（ツタ）の生えている木とそうでない木**

：概して蔦の生えている木は弱っている場合が多く幹の心の部分が空洞になっている。

■**ねじれている木**

：外的な要素でねじれたというより遺伝的な原因のほうが大きい。製材すると木目がと通らない。

■**空日が取れるところ**

：幹の根元の太い単純な円ではないところを製材したときに出てくる複雑な木目なので2番玉には表れない。

■**杉の黒味**：育ったところが比較的湿っている所に育った木とか葉がらししないで切った木に出やすい。

■**山の木の運搬**：丸太を斜面に並べて谷まで降ろす。河川は所々をせき止めて水面を上げ原木を浮かした上で堰をはずすと下流に流れ出る。木曽川まで流れ出て水量が増すと原木をいかだに組んでなかのりさんが操りながら下流の貯木場まで運ぶ。

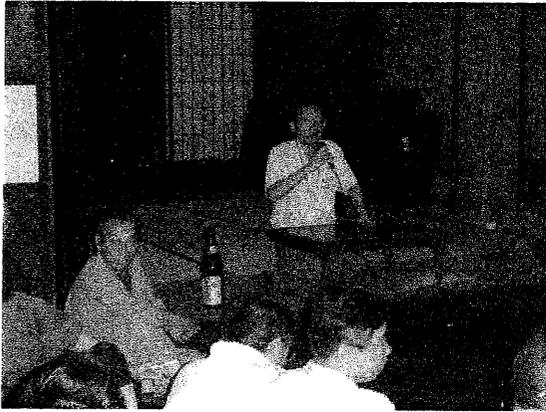
■**技**：枝は概して洞筋に多く山側は少ない。

■**北斜面と南斜面**

：北斜面の木は概して素直な木、素性の良い木が多い。従って値も高い。それに対して南の木は枝が多く素直でない木が多い。

■**木の板**：天然林のほうが下に深く入っていくので水持ちが良いので山の水量が一定になる。





懇親会

武蔵どの・・・

閉塾式

みなさんは今年の大平で何を感じ、どのような足跡を残して行かれたのでしょうか・・・



大平建築塾に参加して・・・



当時ここを往き来した人々は、どんな思いでこの建物群を見たのだろうか？どんな会話をし、ここに生活があった時の風景はどんな感じだったのだろうか？

心にゆとりを感じ、時間の大切さを再認識したような気がします。

月の明るさ・風の道・日の傾き・自然の中で生かされているありがたさ。

そんなにかげ離れた感じはしなかった。でも、ずっとは無理だと思った。

火のある生活、火を囲む生活がとても好き。

夜暗くなる・・・当たり前の事が不思議だった。

目に入ってくるものの中に近代的なものが無く、とても癒された。しかし、とまれ・お風呂に不便さを感じたので自然の中では生きていけないと思った。

親・祖父母の時代を感じ、自然を感じ、また、それ以上昔の生活を感じ過ごさせてもらいました。

食事が全て手作りで火を燃やす所からして、昔の生活は家族と一緒に食事を作り、食べる・・・と言う協力体制がないと生活ができないので家族の我が昔の方が強く、絆が今よりもあったのだと感じた。

日常生活では意識していなかった“当たり前”の事の大切さ。

なつかしさを思い出しました。今年は田舎に帰ってみようと思います。



外とのつながりが都市での生活には無かったのだと気付きました。人が家の外で仕事をする様子や、煙突から煙が出て炊事をしてしていることが分かるのが、暖かい感じがした。

この塾に参加されているみなさん「地域性」や「歴史性」というものと「現代」をどう捉えどう行動するかということに少なからず意見と葛藤を持っていらっしやって、大変興味深く、大変愉快でした。

たくさんの方が時の重なりのある大平で、その頃の暮らしに思いを馳せ、豊かな緑の中で心が癒されたようです、また、囲炉裏、かまどでの食事の支度、薪割り、火興しから始まる風呂炊きなどの体験を通し普段の生活の便利さ、ありがたさを再認識されたのでしょうか？
たくさんの方がここで出会い、共に生活することにより何らかの刺激を受けられて、帰路につかれたようです。



来年も『保存と創造を結ぶために』をテーマに、大平建築塾（最終回）を開催します。10年目の区切りとして、基調講演を吉田桂二氏が行う予定です。日程は8月2日（土）～4日（日）です。

■2002 年第 4 回「語る会」のお知らせ

案内人 設計工房 隅 對馬英治さん

第 4 回の「語る会」は安藤邦廣+設計工房 隅の仕事として、つくば市の「棚部邸」、
「稲葉邸」等を拝見します。

日時 10月26日(土曜日) 午後1時15分から

集合場所 JR土浦駅 東側

・参加希望者は10月22日までに下記まで**必ず**ご連絡ください。

◆事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南 2-5-5-404

Tel : 048-432-8651. Fax : 048-432-8651.

E-Mail : nook@kjps.net

■大平建築塾の次回事務局が決まりました。

無事、第 9 回大平建築塾も無事終わりましたが、次回の大平建築塾も早々と始動をはじめます。来年度で、建築塾は 10 回を迎えます。第 1 回から現在まで、町並み保存の運動の歩みと共にこの大平建築塾も行われてまいりましたが、大きな節目を迎えます。

この区切りの回の事務局を松本昌義氏が行うことになりました。

■次回世話人会のお知らせ

日時・場所：未定(会員の方には後日、事務局よりご連絡いたします)

生活文化同人の活動方針や、定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」ですが、世話人以外の方も自由に参加できます。

(ただし、酒代などは自腹です。) 参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■編集後記

- ・学校、仕事、就職活動、家族、恋愛…壁にぶつかる度に感じる言葉があります。“普通”という言葉です。辞書には、“いつどこにでもあるような、ありふれたもの”とあります。しかし、その“ありふれたもの”に対する考えに、今と昔でかなりの違いを感じます。“普通”とは何なのでしょう…？しかし、“ありふれたもの”では無いからこそ、人に感動を与えられる事があると信じています。(T.T)

■会報編集局より

- ・会報原稿を募集しております。「私の近作」「主張」「旅の報告」「スケッチ」など何でも OK です。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・同人会員の活動等、情報をお寄せください。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・会報を偶数月の初旬に発送する関係上、原稿締め切りは奇数月の 20 日です。

◆2002 年度事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南 2-5-5-404

Tel : 048-432-8651. Fax : 048-432-8651.

E-Mail : nook@kjps.net

◆2002 年度会報編集局 飯島克如 (まちづくりカンパニー・シーブネットワーク)

高松俊秀 (東京理科大学修士 2 年)

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-7YK 駿河台

Tel : 03-3233-2311 (代表). Fax : 03-3233-1312.

E-Mail : kijima@tama.or.jp

生活文化

seikatsubunka

目次

- P 2... 第四回語る会報告「設計工房 隅 作品見学会」
P10... 新刊紹介：『「住まいづくり」考』のご紹介
P11... 2003年会員登録更新のご案内

生活文化同人会報

2002年12月 No.57

2002年生活文化同人「総会・忘年会」 のお知らせ

日時：12月13日（金）18：30～
場所：市田邸 上野桜木
会費：3,500円（お酒の持込み歓迎です）



第4回語る会見学会



第23回吉田桂二個展

■「設計工房 禺 作品見学会」…………… 報告者：飯島克如

第四回の語る会は、土浦・つくばをホームグラウンドとして設計活動を行っている「設計工房 禺」の住宅を見学しました。この日の土浦、つくばの天候は曇り空ではありませんでしたが、14人余りの参加者、総勢18人で見学を行いました。見学した作品は、新築中の個人住宅1件、個人住宅1件、古民家改修の住宅1件でした。設計工房 禺の對馬英治氏に各住宅を案内していただきました。



この方が對馬英治氏です

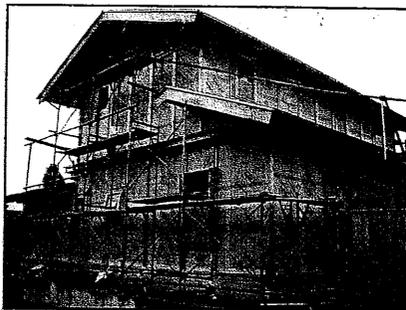
■新築中の現場見学

最初に見学を目指した住宅はつくば研究学園都市に程近い所にありました。

その日の現場では、内部の工事が行われていました。その中を歩き回りながらの見学となりました。

木造2階建てのこの住宅では、木材を坪当たり、2㎡使っています。原則的に筋交いなどは使っていません。そのため、いつも建築確認ではいつも苦労します。

基本的には、正面突破で確認申請に取り組むが、やはり上手くいかないことのほうが多いです。安藤邦廣氏は試験結果を当局に持っていくことによって、確認を通しています。現在、多くのハウスメーカーなどが木造住宅の構法で製品認定をとっていますが、貫構法も認定をとることが必要だと思えます。



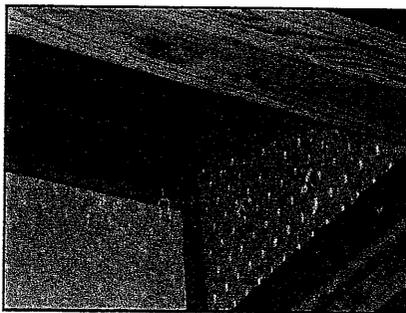
外観

○換気の考え方

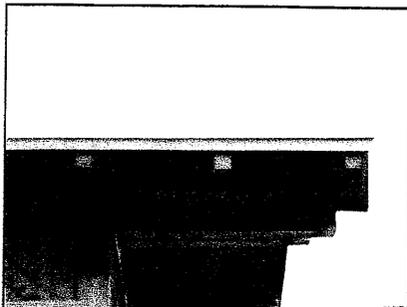
温度差による換気を期待した棟換気があるが、実際には、天井板をはずし、対面の窓を開けることによって充分換気が可能です。棟換気による温度差換気は実際には思っているほど効いてはいません。3階以上の高さのあるものや、屋根勾配が大きいものでないとその効果は大きく現れません。また、天井裏を造るのはもったいないという考えもあります。

○屋根の工夫

屋根は、屋内側は野地板あらわしにしています。その上に浮き上がりの空気層を作っています。室内側の野地板の上に防水シートを敷き、珪藻土、墨を混ぜたものを敷き詰め、空気層を作り屋根換気を行っています。かわらの裏がちょうど、空気層が出来ている事によって外気扱いとなり、屋根からの熱が内部に伝わらないし、結露を生じない。また、室内側上の面には珪藻土を混ぜた土を入れていることが多少なりとも調湿



壁のしきりに隙間を作っている



屋根外観

に貢献していることを期待しています。

○設備上の苦勞について

普段から、屋根裏などはあまり造らないので、何が大変かという設備配線にはいつも苦勞します。電気配線などどうしても方法が無いときなどは外系配線を採用しています。

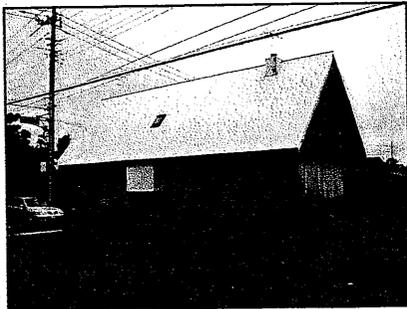
○壁と床について

壁については、真壁でやりたいと思っていますが、苦勞します。しゃくりをとるが、どうしてもヒビが出来てしまう。以前、台風が来るとしみてきたこともありました。今は、キズリをよせて、固まらないコーキングをして、対処しています。内側の壁板は1寸の栗の無垢板を使っています。板は、板は止めないで落とし込んでいます。どうしても、そうしないとすきが出来ます。栗は腐らないというが、そんな事はありません。梅雨時に腐ってしまう事が多い。対処方法として、塗装をかける方法があるが、あまり塗装を使いたくは無いので、ぬれてもよいように工夫をする必要があります。ここでは、40年から50年生の栗を使っています。

フローリングは5分の無垢板を使っています。床の根太は落葉松を使っていますが、大狂いするので何本かいつも変えています。

■個人住宅見学

次に向かったのは、竣工した個人住宅でした。勾配の効いた三角屋根が印象的な建築です。このご夫婦は、ご主人は化学の研究者でつくばの工業団地の研究所に勤めていて、奥さんはコンピュータプログラマーです。



外観

○計画の特徴

屋根の部分がそのまま、二階になっています。

北側も東側もここは車が通りますので、かなり防音を考えて、外側は立板はめ大壁になっていますが、その下には珪藻土系の我々が調合した壁材を入れていません。だから、防音性はいいと思います。我々が車で来て、ガラスにコンコンと叩かないと気がつかないくらいです。

○2階にて

棟持ち柱が真中に三本あります。両側から合掌のように支えています。

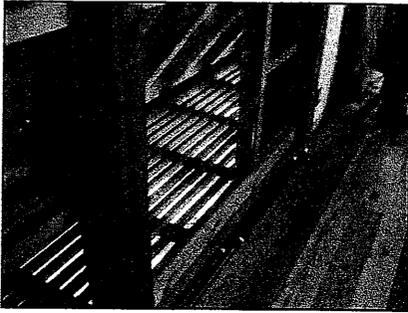
屋根を持ち出しまして軒裏を明り取りにしています。はじめ桧木は張っていませんでしたが、物が置けるし、子供も遊べるし、ここから光が入り、風が入る。で、今は子供達の遊び場になっているようです。

二階には、ご主人の寝室があり、収納がまとめられています。この家に入られたときは子供が一人いて、

今年の春に二番目の女の子が生まれました。もう少し増えるならば、そのときに子供部屋を作ってくださいということで、余裕を持たせています。また、この上にさらに遊びのためのロフトを作ること出来ない事ではないと考えています。



2階部分内観



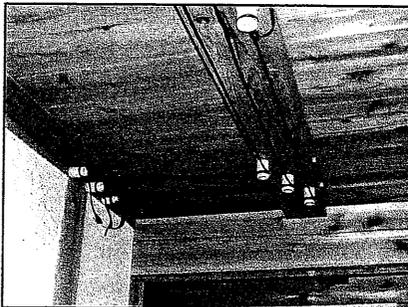
軒の棧木

部屋を仕切る壁は、エコクイーンという珪藻土の壁材です。いろいろ、鮫島さんなどの壁材を使ってみましたけれども、エコクイーンは割りにいいと思います。ただ、一つだけ疑問にありますが、粉末接着剤の内容を公表してくれないということ。ドイツの接着剤ということだが、その物性を知りたいと聞いても公表しない。一般にメーカーはそうです。そういう時、フノリを入れたりするとカビたりする。

○暖房について

暖房は、薪ストーブです。あったかいでしょ。そんなに炎見えないでしょ。ストーブというものは蠟燭のように燃すものです。ガンガンと燃やすと先ず鋳物は傷みます。トトロと燃やすとこのストーブでも置き火が七八時間は持ちます。夜寝る前に仕込んでおけば、朝マッチを擦らないで、薪を入れれば点きます。

2階は1寸の床板を使っているのですが、床から床暖房のような放熱があります。



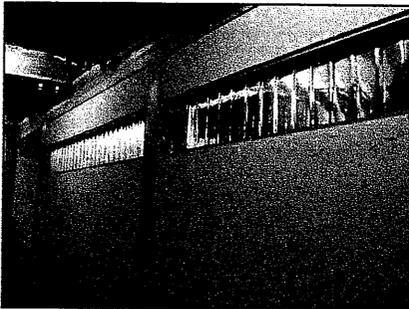
室内にめぐっている外系配線

○外系配線について

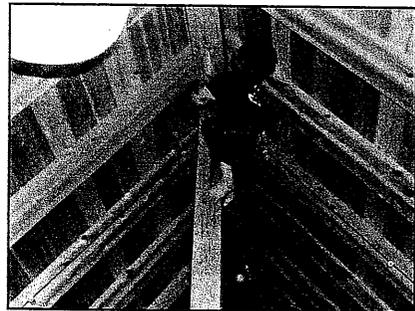
・外系配線は、言ってみれば、いちいち隠すのが面倒くさいからやってみました。ただ、一般に電気屋では外系配線の方が高いです。1本引けば良いのに2本かかりますし、外系のメーカーはそう一般的な材料ではないので…。

○お施主さんとの合作

お勝手のところにガラスの筒がいっぱいありましたが、あれも、どっかで使ってとって使ったものです。

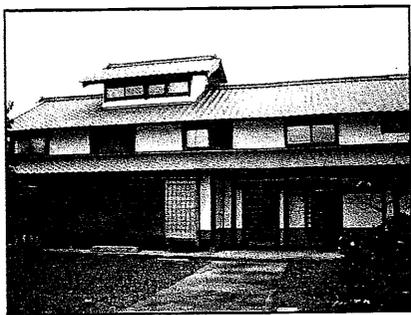


お施主さんが集めたガラス筒



棟木によじ登って遊ぶ

■個人住宅（稲葉邸）見学



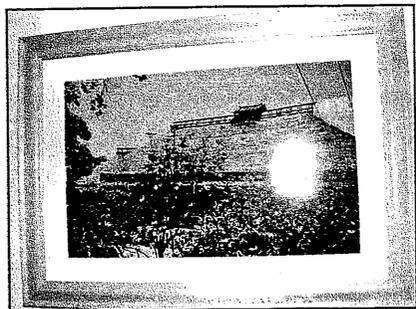
外観

最後に伺った住宅は、民家の再生でした。

僕の知人のイギリス人が、「おまえは、何年ぐらいの家に住んでいるんだ」と聞いたので、「7年半かな」と答えると、「そんな家とはいわないんだ。自分は110年経った家に住んでいる。100年以上経ってないものを家とはいわないんだ。」その彼に、手紙を書きました。「今度、日本にきたら240年の家を見せてやる」と。この事です。

○住宅のプロフィール

この稲葉家は、安永5年、アメリカが13州で独立をした年から220年ほど経っている民家です。中のリビングに改修前の時代の写真が飾ってありますが、元は平屋の茅葺屋根です。左側に書院といって、8畳2間床の間つきの部屋があり、廊下がL字にめぐっています。もとは、下屋の線から上に金勾配で茅葺屋根でした。



昔の姿が映された写真

ご相談がありましたとき、この家ははまだ茅葺屋根で、トタンをかぶっておりませんでした。つくば市内でもこういうケースは極めて珍しく、非常に一所懸命この家を守ってこられたと思いました。

この民家はこの辺の民家の中では変わっていて、真々6尺2寸5分でした。普通6尺2寸が多いのです。田中文男さんに連れて行ってもらった、千葉の民家では6尺2寸5分があるので、そのあたりの大工が来たのかもしれない。

○計画の特徴

文化財の保存の場合には予算もありますから、必ず解体をして、解体をする事によって得られる今は失われた知恵とか、問題点とかを調査できるわけです。しかし、ここを解体してやるには予算的には非常に高いものとなるだろうということで、このまま、基本的な骨組みを残しました。2001年の夏から準備的な事をして、その前に設計を四五ヶ月ぐらいかけてました。

こういう民家は何度も手を入れています。この家の場合にも、先代、先々代の手の入れた後も見られました。古いもので内部にあるものは大体風食を受けていました。たとえば、書院の周りの廊下は後付けだと思えます。部屋側の奥の柱が風食を受けていました。だから、後で生活の必要性から下屋を出して廊下をつけたのだらうと思えます。ただ、今度の改修では後付の廊下もそのまま受け継ぎましょうということにしました。



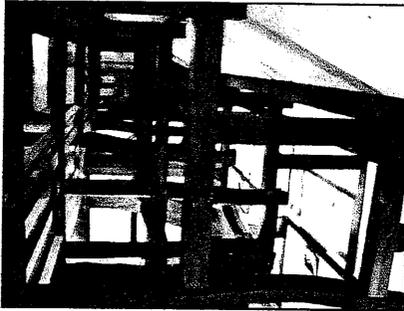
右側の木の塗りが違っています

また、調べてみると、この家の梁には割れが少ない。先ほど、我々がご案内した建築中の住宅も、パンパン

割れています。それは木が生だからです。ここの家は、おそらく家を建てようとしてから、5年から7年木を干しています。ただ、木材の場合、割れていても強度的には心配は要りませんし、もう一つは、割れる事によってホゾとホゾ穴の関係が緊張する。強度が出るということはある。

ですから、表面を虫が食っていても芯が大丈夫なものは使っています。

ただ、この家には3階の越屋根の部屋のあたりに、本当に不思議な梁がありました。松の木ですが変わった形の姿そのままに梁として使っていました。今回の改修では残念な事に取り外しました。空間の利用上、構造的に問題の少ないものについては、取り外したりも



2階から見える小部屋組み

しています。大引きなどは広葉樹の丸太がそのまま転がしてありました。しかし、利用できたのは数本です。新しく加えた材の扱いですが、部分的に染めております。昔の柱とそっくりに染めるといよりも、後から入れたものについて解るような染め方にしました。

建具なども、新しい材を入れたところは、色が違えて、わざと薄くしました。全部同じように染めるのは簡単ですけれども、やはり、補修しながら使っていくということは、建具についても、ここのご主人の奥さんの代にこれだけ修理をして、なお使いつづけているんだよというメッセージを持たせ、ある意味で将来に対して、とても挑戦的な要素もこめています。

家屋は、二階建て、その上の越屋根の部分に小部屋がついています。

○基礎の再生について

工事では、垂直も、当初敷き鴨居の長さが違うものがあつたり、あわせたり、だましもしなくちゃいけない。大工は非常に苦労したと思います。

たとえば、隣の敷地の平均地盤が少し上がったために、水がこっちに流れ込むようになって、裏側の壁・柱（北側）は比較的傷んでいました。そこは、布基礎を立ち上げて、土台をまわし、下の痛みが激しかったので、柱は全部入れ替えました。

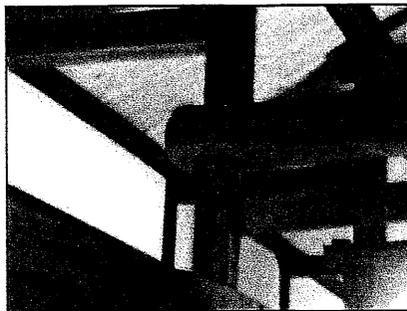
この家は解体をしなかったのも、バリを架って、20t ジャッキ4本で持ち上げておいて、基礎工事をしました。

大黒柱は、不同沈下によって7寸沈下してしていました。最初はGL（基準の水平線）をとって、プラスいくつマイナスいくつと調節しましたが、上手くいきませんでした。それで、高い位置にあわせて調整すると、7寸上がったわけです。

7寸のずれを1ヶ月ぐらいかけて元に戻しました。一度に上げると狂いを生むので、8回ぐらい分けてあげました。

7寸、つまり210mm沈下したというのと、そしてこの家は220年ぐらい経っていることを考えると、1年で1ミリ沈下したということです。最初の頃水は切れるが、雨が降っただけでも茅葺は重くなります。そして大黒柱には一番荷重がかかります。さらにこの下には桜川という川がある。この時代以前はおそらく、氾濫元だったと思います。だからここの地盤も桜川による粘性土だと思います。粘土は水分を含んでいますが、圧力がかかると水が出る。それで、沈下が進んだのでしょう。

ですから、この家の裏側は布基礎でアンカーをしています。しかし、あまりきつく締めていません。前の方（玄関側）は全部束ですから、締めた所で構造的にあまり意味がないと判断しました。



梁と柱の接合部

○屋根について

屋根については、この改修再生工事に当たって、茅葺きでやりなおしたとき、その後の修理での萱はどうか、茅葺職人が存続しているだろうか、ということが問題でした。そのことをご相談して、瓦にしました。屋根の構造は、垂木ではなくて、母屋構造で、それに直接1寸板を流れ方向に貼りました。このあたりの母屋はすべて後で入れ替えたものです。

改修再生工事に当たっては小さい柱を立てて、二階の壁を作って、小屋組みを新たに設計して作りました。屋根は寄せ棟でしたから、向こうの妻壁から、こちらの妻壁は新たに付け足して切り妻にしました。

○高さの処理について

昔の人は、やはり背が低かった。ここの家でも大体5尺8寸。鴨居の後があるでしょ。

ここはもう少し低かったんです。だから、民家を移築するに当たり、ご要望によっては2mといわれることがあります。このときは敷居を下げるしかないですね。コンクリートの基礎は無いですから、材が傷んで無ければ、下げて元の敷居の穴を埋めて行く事が出来ます。



内観の様子

○壁について

改修前の壁は昔の竹小舞になっていました。一般的に再利用は不可能でしたし、時期的にも竹の摘み時ではなかったので、杉小舞にしたり、あるいは貫構造の上に竹張りをした上にラスボードを貼ったものもあります。

○玄関、土間について

天井の玄関は元のままです。こういう古民家の場合、当初は、梁全部が見えて、茅葺屋根の裏側が見えたのだと思います。そのうち、そこに竹なり、細い足場丸太見たいなものを置いて、その上に今度は、葺き替えよりの薄を置いたりして、そのうち段々、空間を利用するためにつり天井を置いていったと思います。

この土間は、農家にとって土間は雨の日の仕事場です。農家というのは工場つき住宅のようなもので、雨が降ったときには、藁細工、縄を織うとか、したところ。ここは仕上材に珪藻土の土間材を敷きました。

○書院の改修について

書院は、現在主人の書斎兼応接室です。床組みを全部やり直し、小屋組みを新たに作り、天井を張り替えて、壁をやり直しました。そんなに大きく構造はいじっていません。この畳の下は一寸の板が入っています。

○天井について

1階の天井板は新しいものを入れたところと、もとの天井板を入れたところがあります。新しいものを入れてたところは、その上に直張りで1寸の板を入れています。それによって、踏み天井の強さを出しています。その上に2重垂木を入れて、空間をとって、珪素土や炭を練って入れますと水滴が落ちてしまうので、空練りで、生石灰を混ぜて、空気中の水分で硬化するのを期待しています。

もとの天井板を使ったところは、一回はずして洗いました。また、隙間が開いていたので、は重ねして詰めました。その上にも一寸板が貼られています。

このあたりの梁が少し、変わったようになっていすのは、この家の人で以前少し手を加えたからです。いずれにしても、書院のほうまで黒くなるということは、240年の間にけむりが行ったということです。蚊取り線香だつてくすぶるんだから。

○雨戸、廊下周りについて

内側の鴨居に溝が三本は入っているのは、ここまでが外だったんです。それで後から、つけていたわけです。外はケンドンの雨戸だったと思われます。

外側の雨戸も新しく作りました。

こういう大きい家に住むと雨戸の開けただけでも大仕事です。19枚か21枚あります。雨戸を造りましたところ、木が反ったりして、なじむまでご苦労をおかけしました。



薪ストーブ

○暖房について

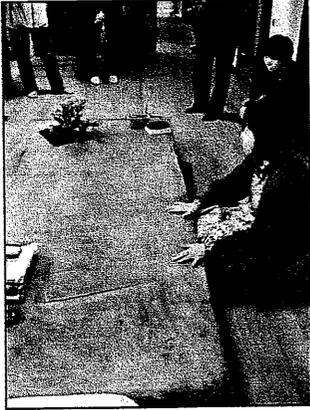
暖房には薪ストーブと、PS暖房機というものを使っています。

薪ストーブについては、バカのつ覚えのように思われますが、室内で石油の排気を出すのはあまり良くないと思いますし、電気代も高いですし、この前の台風で随分樫の木が倒れたので薪には困らない。ということで薪ストーブにしています。

PS暖房機は温水をまわす灯油ボイラーによる暖房機です。床暖房を排除するのは理由がありまして、一つは無垢の木でやりたいからです。そうすると、床暖房対応の無垢の木は極めて少ないのです。もう一つは、自動車のラジエターといっしょで、水とかオイルとかを回すパイプはいつかはパンクする。どこでパンクしたかわかりませんから、探さなくてはならない。この場合は配管だけですから、下におりています。だから、問題があった場合、床下にありますから、給水給湯と同じ扱いで対応できるということで、今のところ床暖房については否定的です。ボイラーでまわしています。

○屋敷内の木を使う

・階段広いでしょ。これは、20 数年から 30 年、屋敷内のケヤキの木を乾かしてあるのがありましたので、それを製材して使いました。



この大テーブルがそうです

○屋敷の木のテーブル

今の大テーブルの座ってこの家の婦人が説明してくれました。「この、机の板は、門の扉にいずれ使うようにということで、3 枚ほどセットで倉に入っていたんです。今のサイズのにもあれだったんで置いておいたんですけど、今回ね、テーブルを使うに当たって、設計された安藤先生が、これを以前見せた事があって『これが良いからこれをもってきな』ということで、高さもいじらずに、削りも何にもしないでそのまま使っています。台布巾で拭きだけで、結構きれいになっています。」

「食事をするときは、一寸低くて嫌だという人もあるのですが、ここで、食べるときは一人ずつお膳を持って、食べています。」(あと、このケヤキの板と同じものが 2 枚まだあるそうです。)

○お施主さんの感想

「もう、ブロックの塀が駄目ですよ。今年は、デモね、台風のとき家が静かで全然外の様子がわからないくらい。今年は良かったねといっていたら、次の日は大被害ですよ。大きな檜の木が 2 本ほど倒れました。」最近、来た台風で屋敷内の檜の木が倒れたそうです。

○改修を終えて

何より、私どもにとってありがたいのは、ここのご家族が、保存をやってよかったなどいってくれた事です。

実は、つくば市の教育委員会はまる 3 年かけて、民家調査をやって、報告書を出している。しかし、残念な事に、この家は載せていない。こういうのが他にもある。今をもって頑張っている家が他にも何十件もあるのです。その方々をご紹介して、見学会にきていただいている。悩んでいる方が多いです。でも、こんな風に直るのだったら、やるかなといってくれます。ただ、民家の移築再生の場合、荒っぽい試算で、構造材全部を再生して使うとして、新築の 30% ぐらい増しになります。新築より安くはならない。

しかし、新築の設計だけではなくて、このような、十分住む事のできる家を気短に壊すのではなくて、使っていきたいという思いはありますし、やむなく壊される家であっても、移築して使えないかと思えます。

■『「住まいづくり」考』のご紹介

萌文社より、住まいづくりの手引書、『「住まいづくり」考』（山本厚生 編著）が刊行されました。

同人の会員も何人か執筆されています。

萌文社の本 ●「住まいづくり」は生き方づくりです。そして家族づくりです。



好評発売中

◆主要内容◆

第1部 家族を育む住まいづくり
第1章 住まいづくりは家族づくり
第2章 家づくりの視点を整えよう

第II部 それぞれの住まいづくりのなかで
第3章 夫婦のコミュニケーション
第4章 子どもと自立と子育ての環境
第5章 高齢を生きる「ハンディ」を生きる
第6章 家族をつなげる「暮らし」文化
第7章 地域をつくる

住む人が家的事業的に判断することの不慣れさとともに宣伝や情報にも振り回されているなかで、いま本当の「住まいづくり」とは何が見えにくくなっている。家族像がゆらぐ不確かな時代にさまざまな事例を通して暮らしの核となる「家族と住まい」を讀者とともに考える格好の一冊。

◆A5判・並製208頁 定価(本体2000円+税)

家族像の不確かな時代に
住まいづくり考

設計者たちがその実践を通して新しい家族像を追究した話題作

家族と住まい研究会
山本厚生 (編著)

◆執筆者◆ 浅川淑子・新井英明・大沢匠・大竹司人・大平幸子・岡沢和子・金田正夫・木村真理子・佐々木裕子・佐藤絹子・中島みさを・永井幸・新見美枝子・細野良三・山本厚生(編著)

<p>すまいのカルテット 春夏秋冬 東由美子・栗山礼子・中島明子・近田玲子(著) A5判・並製 232頁 定価(本体1796円+税)</p>	<p>子どもとつくる遊び場とまち 遊び心がキーワード 加賀谷真由美(著) A5判・並製 248頁 定価(本体2000円+税)</p>
<p>人間らしい住まいとまちづくり A house is not a home 中島明子(著) 四六判・並製 224頁 定価(本体1600円+税)</p>	<p>子どもの夢 コミュニティづくりと身近な環境ケアへの発展のための理論と実践 ロジャー・ハート(著) / 木下豊・河中裕彦・萌文社(監訳) / PAR本支社(訳) A4変型判・並製 232頁 定価(本体3200円+税)</p>

萌文社 (ほうぶんしゃ) 〒102-0071 東京都千代田区富士見1-5-12 ●TEL 03-3221-9008 / FAX 03-3221-1038
Eメール: hobunsha@mdn.ne.jp ●URL http://www.hobunsha.com

きりとり線

注文書	●取り扱い	『住まいづくり』考	定価(本体2000円+税)	冊
				冊
				冊
	●氏名	●TEL		
●送り先 〒				
萌文社		〒102-0071 千代田区富士見1-5-12 TEL 03-3221-9008 FAX 03-3221-1038		

■2003 年会員登録更新のご案内

1. 年会員 (会費 8000 円/年)
 - ・語る会聴講 (5 回以上/年)、会報 (6 回発行/年)、機関誌に代わる『吉田桂二作品集』
 - ・すべての同人の活動情報を会報以外にも提供します。
2. 学生会員 (会費 5000 円/年)
 - ・語る会聴講 (5 回以上/年)、会報 (6 回発行/年)、機関誌に代わる『吉田桂二作品集』
3. 会報購読会員 (会費 3000 円/年)
 - ・会報 (6 回発行/年)
 - ・語る会に参加する際は、その都度、会場費等として参加費をお支払い下さい。
4. 語る会聴講 (参加費 一般 2000 円/回、学生 1000 円/回)
 - ・年会員、学生会員でない方は参加費を支払っていただきます。

☆ 年会員・学生会員、会報購読会員の会費は 1 月から 12 月まで 1 年分とし、中途入会の方も上記の会費にてお願い致します。

☆ 入会希望の方、会員の方は、下記用紙に必要事項を記入して FAX・郵送するか、下記書式に従いメールを送るか、いずれの方法でも構いませんので、必ず事務局まで届けて下さい。

☆ 会費納入は郵便局にて以下の口座にお振込みください (手数料は各自でご負担願います)。

総合口座 10010-54101181

生活文化同人 代表者 吉田桂二

☆ 不明な点、質問などは新事務局までお問い合わせ下さい。

生活文化同人事務局 新井 聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南 2-5-404

TEL: 048-432-8651. FAX: 048-432-8651. E-mail: nook@kjps.net

※生活文化同人はボランティアにて運営されている会です。滞りない会の運営のために、会費の納入は 1 月末までにお願いします。

生活文化同人事務局 新井聡 行

■2003 年生活文化同人登録書 (入会申込み・会員更新・変更届・退会届)

(会員数の把握、名簿整理のため 2002 年度会員の方もお送り下さい。ご協力お願いします)

1. 下記の該当する欄に○をつけて下さい。
新規会員の方 1. 年会員 2. 学生会員 3. 会報購読会員
既に会員の方 1. 継続 2. 年会員に変更 3. 会報購読会員に変更 4. 退会
2. 氏名、連絡先等をご記入下さい

フリガナ 氏名: _____

勤務先: _____

勤務先住所: 〒 _____

TEL _____ FAX _____

自宅住所: 〒 _____

TEL _____ FAX _____

E-mail: _____

3. 会報送り先を下記のどちらかに○をつけて指定して下さい。

1. 勤務先 2. 自宅

■2002 年生活文化同人「総会・忘年会」のお知らせ

今年も、早くも一年が経ちました。下記のとおり、「総会・忘年会」を開催いたします。会員の皆様の振るってのご参加をお待ちいたします。

日時 12月13日(金曜日) 午後6時30分から
場所 谷中・市田邸 東京都台東区上野桜木1丁目6-2
会費 3,500円 (お酒の持込み歓迎です)

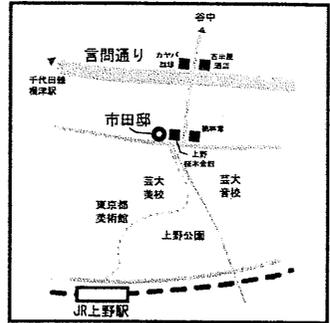
・参加希望者は12月11日までに下記までご連絡ください。発表希望者も下記までご連絡ください。

◆事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南2-5-5-404

Tel : 048-432-8651. Fax : 048-432-8651.

E-Mail : nook@k.jps.net



■2003 年会員登録のご案内。

来年の活動に向けて2003年の会員登録のご案内を行います。会員の皆様の継続登録、よろしく願いいたします。登録、会費納入いただいた方には、漏れなく、来春4月出版の吉田桂二先生の作品集を進呈いたします。登録内容の詳細は11ページを御覧下さい。

■機関紙の発行延期

年内の発行が待たれていた、機関紙の発行が延期となることになりました。楽しみにされていた会員の皆様にはご迷惑をおかけしますが、ご理解よろしく願いいたします。

■次回世話人会のお知らせ

日時・場所：未定(会員の方には後日、事務局よりご連絡いたします)

- ・生活文化同人の活動方針や、定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」ですが、世話人以外の方も自由に参加できます。(ただし、酒代などは自腹です。)参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■編集後記

- ・(飯島)先日『初恋のきた道』という中国映画を見ました。良い映画です。お勧めです。
- ・(高松)早いものでもう12月。時間が経てば経つほど、修論の締め切りが・・・

■会報編集局より

- ・会報原稿を募集しております。「私の近作」「主張」「旅の報告」「スケッチ」など何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・同人会員の活動等、情報をお寄せください。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。
- ・会報を偶数月の初旬に発送する関係上、原稿締め切りは奇数月の20日です。

◆2002 年度事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南2-5-5-404

Tel : 048-432-8651. Fax : 048-432-8651.

E-Mail : nook@k.jps.net

◆2002 年度会報編集局 飯島克如 (まちづくりカンパニー・シーブネットワーク)

高松俊秀 (東京理科大学修士2年)

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-7YK 駿河台

Tel : 03-3233-2311 (代表) . Fax : 03-3233-1312.

E-Mail : kiiijima@tama.or.jp

生活文化

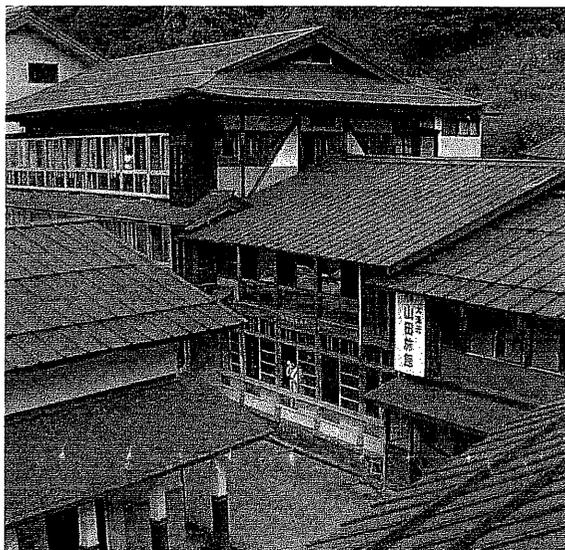
s e i k a t s u b u n k a

目次

- P 2... 2002年度総会報告
- P 3... 2002年会計報告
- P 5... 「伝統文化と住環境エコロジー」のお誘い
- P 7... 「羽田澄子監督のトークと映画の会」のお誘い
- P 9... 同人紹介 小野綾子さん
- P11... 2003年会員登録更新のご案内

生活文化同人会報

2003年1月 No.59



信州 小谷温泉山田旅館

2003年度第1回語る会のご案内

「自然素材を使う意味」

語り手：吉田桂二氏

日時：1月31日午後7時より

場所：上野 市田邸

■生活文化同人 2002 年度総会報告

2002 年 12 月 22 日、市田邸にて生活文化同人 2002 年度総会が行われました。

■2002 年度の活動報告

語る会

- 1 月 22 日 吉田清明氏 NPO「やみぞの森」
- 3 月 29 日 増田一眞氏 伝統木構法の復権
- 6 月 7 日 吉田桂二氏 私の近作から
- 10 月 26 日 對馬英治氏 設設計工房 作品見学会

第 9 回大平建築塾

- 日程 : 7 月 20 日～7 月 22 日
- テーマ : 自然環境保全と木材資源の活用
- 基調講演 : 木原啓吉氏 「木の文化」
- 事務局 : 豊崎洋子、五十幡智子 (桂設計工房)

会報

No.53 号～No.57 号まで 5 回発行

■2003 年度世話人選出

代表 : 吉田桂二

事務局 : 新井聡

会計 : 岸未希亜

会報 : 飯島克如、高松俊秀 (第 9 回大平建築塾報告)

語る会 : 中村文美、五十幡智子

世話人 : 松本昌義、長谷川順持、日影良孝、岡部知子、飛山龍一、金田正夫、豊崎洋子、伊藤秀夫、鈴木久子、吉塚幸雄、寺田一枝、斎藤彰、石引浩子、戎居連太

※世話人の自薦・他薦・申し出てください。

■第 10 回大平建築塾

日程 : 8 月 2 日 (土)、3 日 (日)、4 日 (月)

テーマ : 保存と創造を結ぶ

基調講演 : 吉田桂二氏

事務局 : 松本昌義 (松本設計)

夜会公演 : 津軽三味線 高橋竹勇氏

■2003 年度年間テーマ

「自然素材を使う意味」

■その他

第 1 回語る会 1 月 31 日 (金) 語り手 : 吉田桂二氏

「自然素材を使う意味」

■生活文化同人 2002 年会計報告

	摘要	収入金額	支払金額	単位支出計	差引残高
	2001年残高繰り越し				233,254
固定収入	年会員 (¥8000) : 44名	352,000			
	学生会員 (¥5000) : 3名	15,000			
	会報会員 (¥3000) : 19+1名	60,000			
臨時収入	語る会聴講費 : 計20名	33,000			
	2001年忘年会残金	6,410			
	世話人会等飲食残金	7,192			
	郵便貯金預金利子	61			
会報	会報53印刷製本		10,500		
	// 発送90×93		8,370		
	// 雑費、宅配便		1,191	20,061	
	会報54印刷製本		13,912		
	// 発送90×135		12,150		
	// 雑費、宅配便		2,079	28,141	
	会報55印刷製本		11,760		
	// 発送90×89		8,010		
	// 雑費、宅配便		1,118	20,888	
	会報56印刷製本		12,096		
	// 発送90×137		12,330		
	// 雑費、郵便代		2,648	27,074	
	会報57印刷製本		9,000		
	// 発送		7,520		
	// 雑費、宅配便		1,921	18,441	
	会報58印刷製本		-		
	// 発送		-		
// 雑費、宅配便		-	-		
	小計 (会報費用)		114,605	昨年比	33%減/5 回分
機関誌	機関誌 : 積年印刷費として (最終)		150,000		
	小計	473,663	264,605		

	摘要	収入金額	支払金額	単位支出計	差引残高
定例会	語る会〔1〕：市田邸				
	会場費		10,000		
	講師謝礼（吉田清明氏）		20,000	30,000	
	語る会〔2〕：市田邸				
	会場費		10,000		
	講師謝礼（増田一真氏）		20,000	30,000	
	語る会〔3〕：市田邸				
	会場費		10,000		
	講師謝礼（吉田桂二氏）		-	10,000	
	語る会〔4〕：土浦・つくば				
	会場費		-		
	講師謝礼（対馬英治氏）		20,000	20,000	
	小計（定例会費用）		90,000	昨年比	33%減
	備品（ハガキ、カセットテープなど）		8,544		
	通信費（振込み手数料、切手など）		4,160		
	大平建築塾収益より（2年分）	200,000			
	小計	200,000	102,704		
	単年度収支	673,663	367,309		306,354
	最終残額				539,608

※昨年の報告では、大平建築塾収益からの10万円を収入としていませんでしたが、昨年及び今年の収益から各10万円づつを今年の収入としました。

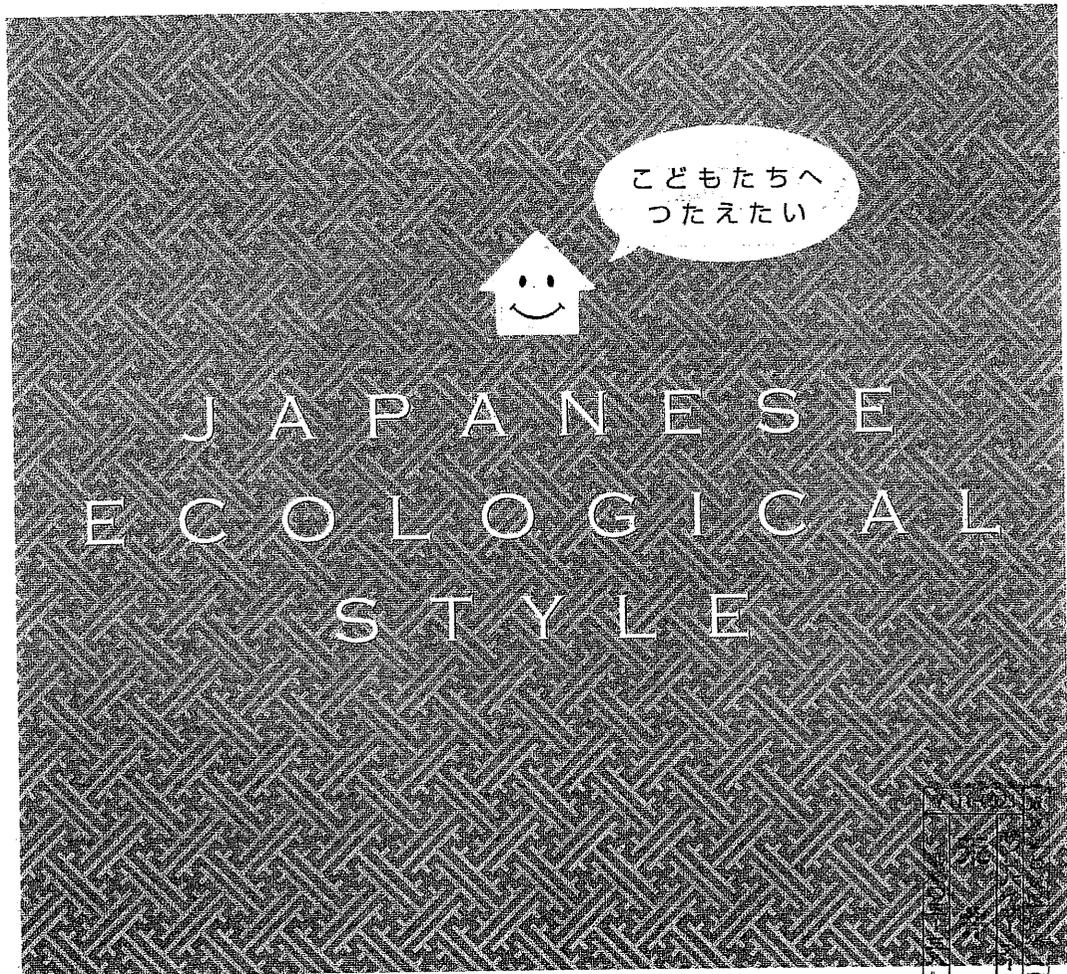
同人会計：岸

イベントのご案内

■「伝統文化と住環境エコロジー」のお誘い.....

伝統文化と住環境エコロジー

2003年1月25日(土)はまぎんホール ヴィアマール
横浜銀行本店ビル1F



1

ワークショップ——子供達やご家族に贈る職人によるワークショップ
11:00—12:30◎はまぎんホール ロビー◎無料

2

「伝統文化と住環境エコロジーについて考える」シンポジウム
職人の生きる環境先進国ドイツとグローバル社会日本は今(仮題) 財団法人 日独協会 常任理事 織田 正雄氏
森林破壊と地場産業(仮題) 建築家 長谷川 敬氏
明日の子供達へ伝えるものづくりの重要性和環境意識 住環境シンポジウム 代表 植田 昇氏
よさこいにつぼん inドイツ 國友須賀氏
13:00—16:30◎はまぎんホール◎参加費 2000円

3

交流会&情報交換会——オーガニックフードによる立食パーティー
17:30—19:30◎はまぎんホール ロビー◎参加費 3000円(要予約)



主催◎住環境シンポジウム 代表 植田 昇 Tel&Fax.045-304-3226 e-mail:ttm94@poppy.ocn.ne.jp
お問い合わせ・お申込◎事務局 鈴木直子 Tel.0467-39-3630 Fax.0467-39-3631 e-mail:n_suzuki@pa.airnet.ne.jp

子供達やご家族に贈る贈人による
ワークショップ

WorkShop
11:00-12:30
はまぎんホール ロビー◎無料

左官・畳・襦・和紙・炭・ヘンプなど
日本伝統の技術や素材に触れて下さい。
その他パネリ展示予定



こどもたちへつたえたい 伝統文化と住環境エコロジー

地球温暖化、リサイクル、環境問題、シックハウス、アレルギー疾患など様々な問題が伝えられる現在、日本古来より先人達に守られてきた古き良きものが廃れ、忘れられようとしています。その中の一つ1400年以上の歴史ある畳は、進化させつつ慣れ親しまれた素材です。その原料である国内いぐさが、おそらく後数年でなくなろうとしています。農家に後継者がいないことを意味しています。これは、いぐさ農家に限らず、ものつくりの人たち「職人・農家」も現在、伝統素材消滅、後継者不足、森林、農地荒廃など多くの問題に直面しております。

このままでは自分達の子孫に、日本文化を伝えることができないのです。未来の子供達へ、環境破壊を招かない明るい社会と伝統文化を残し、伝えられることが必要と考えられます。

住いた所を「衣食住」すべてにおいて身近な素材を上手に生かしなが、安心・健康・楽し、遊び音楽を通して伝統技術や日本文化を、国際交流の広げて参りたいと思っております。

「伝統文化と住環境エコロジーについて考える」シンポジウム

13:00-16:30
はまぎんホール◎参加費 2000円

Symposium

職人の生きる環境先進国ドイツとグローバル社会日本は今(仮題)

森林破壊と地場産業(仮題)

明日の子供達へ伝えるものつくりの重要性と環境意識

財団法人 日独協会 常任理事 織田 正雄氏

建築家 長谷川 敬介

住環境シンポジウム 代表 植田 昇氏

1934年1月9日 兵庫県生まれ
1956年 慶應義塾大学経済学部卒
1956-57年 アメリカStanford大学交換留学
1958年 東京銀行入行、60年ベルリン銀行研修
1959-60年 ドイツDAAD奨学生としてベルリン工科大学留学
1963-88年 ドイツNRW州経済振興公社コンサルタント
1988-90年 ベルリン日独センター事務次長
1991年 (有)日独フォーラム設立 代表取締役
1992-2001年 (株)NRW Japan 設立 代表取締役社長
1999年 (財)日独協会常務理事

1937年 東京都生まれ
1961年 筑波大学工学部建築学専攻卒業
1964年 工学部建築学専攻修士課程修了
1965年 パロディン工業所入社
1974年 建築事務所「長谷川敬介」を設立
1975年 建築事務所「長谷川敬介」を設立

1956年3月22日 神奈川県横浜生まれ
現在、東京・シックハウス・アレルギーに配慮した日本の伝統的である素材・住環境研究に取り組みることにより2002年5月3日住環境シンポジウムを設立。各地域シンポジウム開催やセミナーにて講師、ボランティア啓蒙活動を行い「伝統文化の発展」を目指す。

著書には
C.Buehnenbacher 著「スイス銀行の秘密」邦訳
「西ドイツビジネスガイド」(有斐閣) 共著
「ドイツビジネスガイド」(有斐閣) 共著
「ベルリンの壁が崩れたドイツ野放牧家」(芸林書房)がある。

仕事と生活の両立を目指して、住環境を改善する。そのために、自然の恵みを受け、水を守る。近頃の山の水を家を守る運動、「東京の水を家を守る会」の理想。近くの山の水を家を守る運動、NPO「緑のネットワーク」代表理事の一人。
著書には「消費する家」から「働く家」へ(共著)建築資料研究社がある。

海外活動でも積極的に活動し、14年9月4日アメリカシアトルウォードルスクール(ユタイナー学校)やインターナショナルスクール、市内小学校など「伝統文化・職人によるものつくりの重要性」「環境」について授業を行なう。

●よさこいにつばん in ドイツ●

よさこい in ドイツに向けて、まずは皆様にご紹介します。よさこいは、すべての人々のものであり、誰もが望む「いい世よこい」のよさこい(世よこい)です。

よさこいにつばん in 発起人・国友有清氏

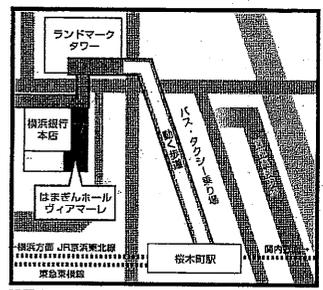
1953年3月22日生まれ、明治大学文学部国文学科卒業
劇団四季を経て、フリーに、各種ステージ・ショー・ミュージカル、舞台で活躍。兼業してSUBA JAZZ DANCE STUDIOを創立。ダンサー・ミュージカルディレクター・テレビラジオ・コンサート・講演・執筆活動など幅広くこなす。
よさこい踊り作りを興行経験上、マリスセタ功績は大きく、よさこい踊りを日本の発展に貢献させたカリスマ的存在。

2003年1月25日(土)
はまぎんホールヴィアマーレ

主催 住環境シンポジウム

後援(予定).....
経済産業省(予定)
農林水産省(予定)
各官庁(予定)

(財)日独協会
(財)日本環境財団
(財)横浜女性協会
(財)鎌倉福祉保存会
(社)日本シヨナルラスト協会
(株)トランツネットワーク新聞社
NPOのびのびの
NPOみどりの列島ネットワーク
NPO日本古民家再生リサイクル協会
日本NPOセンター
NPOウイン女性企画 名古屋本部
NPOグローバルスクール・プロジェクト
NPOえがねつなび
NPOへん製品協会
環境保全型農業技術研究会
自然育児友の会
Tea Party
ママチャイス
湘南ガイネットワーク
湘南藤沢地球村
ネットワーク地球村
アリスセンター
まちづくりネットワーク
J-NAOS 日本自然食ネットワーク



■電車
JR・東急東横線・市営地下鉄線 桜木町駅下車
動く歩道利用5分
※なお、駐車場のご用意がございませんので、ご来場の際は、公共の交通機関等をご利用くださるよう、お願い申し上げます。

住環境シンポジウム 代表 植田 昇

TEL 045-304-3226 FAX ttm94@poppy.ocn.ne.jp

前売券・無料託児のお申込・お問い合わせは
事務局 鈴木直子

TEL 0467-39-3630 FAX n_suzuki@pa.airnet.ne.jp

交流会 Organic Party

17:30-19:30
はまぎんホール ロビー◎参加費 3000円(要予約)

オーガニックな旬の野菜と 雑穀を使った新感覚な料理を味わいながらの立食スタイルの交流会です。
オーガニックなビール・ワイン・自然酒・ジュースや卵・乳製品・動物性食品を使わないデザートもご用意しています。是非お気軽にご参加下さい。

※参加には予約が必要です。お申し込み・キャンセルは下記まで。



「伝統文化の国際交流 in ドイツ」
2003年9月12日 ドイツ・日独センター
日本外務省協賛により決定され2003年9月12日ドイツ・日独センター(ドイツ大使館)にて開催される「伝統文化の国際交流 in ドイツ」に向けて、今後様々な企画を行っています。ご期待下さい。

このチラシは、環境負荷軽減のため「古紙配合率100%再生紙」「大豆油インキ」「水なし印刷」を使用しています。

イベントのご案内

■「羽田澄子監督のトークと映画の会」のお誘い……………

羽田澄子監督の トークと映画の会

映画「住民が選択した町の福祉」

2003年2月16日(日) 1:00~4:30(開場 12:30)

自由学園 明日館講堂(全300席) 豊島区西池袋2-31-3 Tel.03-3971-7535

羽田監督の母校自由学園の明日館は、F・Lライトの設計です。保存運動の結果、01年10月に修復が完了しました。
JR 目白駅より線路沿いに徒歩8分、JR 池袋駅メトロポリタン出口から徒歩5分

会費 前売り2000円 当日2500円 Fax(裏面)でお申し込み下さい

日本の高齢化率は2010年には世界一になると言われています。羽田澄子監督は80年代から日本の高齢社会を見据え、記録映画として「痴呆性老人の世界」をはじめとする4部作を制作し、日本の高齢社会に影響を与えてきました。今回は映画を観て、羽田監督と語り合う会です。

「住民が選択した町の福祉」(1997年)

人口2万2千の秋田県鷹巣町の岩川徹町長が、ワーキンググループを公募し日本一の高齢者福祉の町を作り上げる過程を描いています。当時、北欧レベルの福祉を実現できない自治体が多いなか、羽田監督はホームヘルパー24時間派遣を日本一早く実現した若い岩川町長に着目しました。理想を掲げた町長は、議会が2度も否決した老健施設「ケアタウンたかのす」を完成させ、ついに住民参加の高福祉の町を作り上げていきます。住民の熱意が政治や福祉を変える過程を描きながら、「本当の民主主義とは何か」と問いかけてくる映画です。

羽田澄子さんの高齢者福祉4部作

第1作「痴呆性老人の世界」(1986年) 第2作「安心して老いるために」(1990年)

第3作「住民が選択した町の福祉」(1997年) 第4作「問題はこれからです」(1999年)

第4作は「ケアタウンたかのす」が完成するまでの過程を描いています。財政問題も含め、今後の運営にこそ真の福祉があるという町民の意見でこの映画の題がつけました。鷹巣町は今も活発に福祉の町作りを進めており、全国から多くの見学者が訪れます。

最新作：これまでの作品

最新作「元始、女性は太陽だった 平塚らいてふの世界」が話題になっています。「薄墨の桜」、「早池峰の賦」(芸術選奨文部大臣賞 / エイボン女性年度賞・芸術賞)、「AKIKO あるダンサーの肖像」(芸術作品賞)、「歌舞伎役者片岡仁左衛門」(キネマ旬報映画作品賞、日本映画批評家賞・特別賞)など

ホスピタリティ・プラネット
★

ホスピタリティ★プラネット 第4回講演会

「ホスピタリティ」の語源は、見知らぬ旅人を自宅に招いて温かくもてなすこと。

私たちは人と人が温かく接することを願って、ホスピタリティについて学び、社会にその種を播いています。

~~TEL 03-3376-0392 Fax 03-3374-1102~~

TEL 03-3376-0392

FACSIMILE 03-3374-1102

03-3374-110Z

FAX 申し込み

~~03-3727-2372~~

フリガナ
お名前

フリガナ
ご住所

Tel & Fax

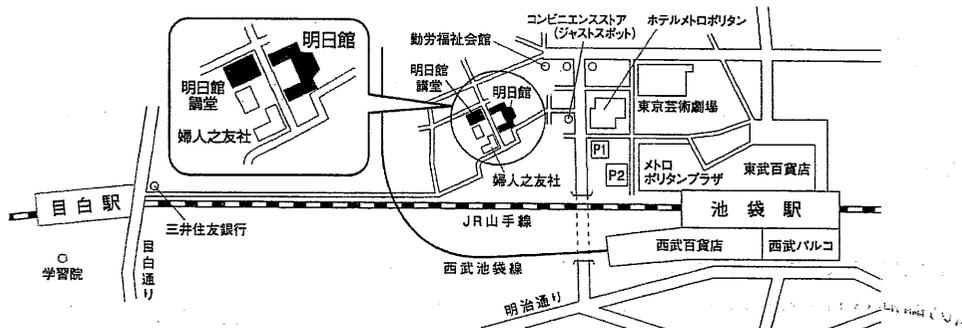
Eメール

参加費 人分 × 2000円 = 円 前売り2000円 当日2500円

郵便振替口座番号 00100-5-76064 ホスピタリティ・プラネット []

145-0066 東京都大田区南雪谷4-14-7 Tel.03-3729-7688

申し込みと同時に郵便振替をお願いします。入金確認後2週間で券を郵送いたします。



自由学園 明日館講堂 〒171-0021 東京都豊島区西池袋2丁目31-3 Tel.03-3971-7535

目白駅から線路沿いに徒歩8分、池袋駅メトロポリタン出口から徒歩5分

ホスピタリティ★プラネット

2001年10月、「温かな気持ちで人と人が接する社会」をめざしこの会は生まれました。医療や介護、福祉のみならず、芸術や建築などの世界でもホスピタリティ豊かな活動をしていらっしゃる方々を講師としてお招きして、講演会や勉強会を開いています。

第1回 2001年11月10日

「デンマークの女性の生活と社会福祉」デンマーク在住29年 丹下吟子さん

第2回 2002年 3月16日

「いのちを囲むもの」在宅ホスピス医 内藤いづみさん

第3回 2002年 6月15日

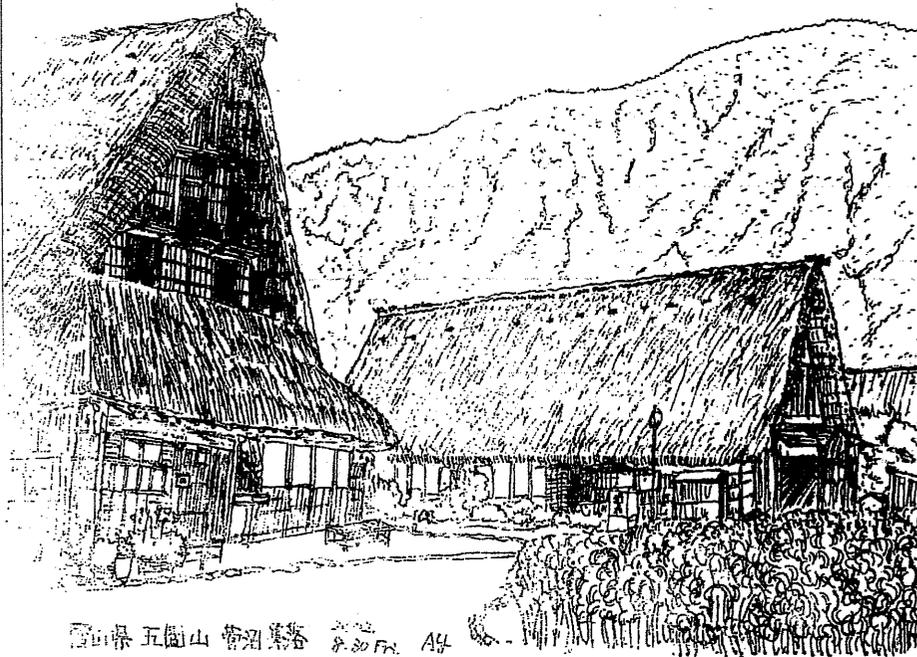
「テレビが次の世代にできること」NHK「未来への教室」ディレクター 田中瑞人さん

■ 同人紹介

小野綾子

昨年も
尾張の旅は
続きました。

奈良：今井町
：室生
大阪：富田林
京都：町田
広島：竹原
：御手洗(島)
岡山：備中高梁
：吹屋(島)
三重：松阪
：関宿
：伊賀上野
富山：五箇山
福井：熊川宿
滋賀：マキ/石川
岐阜：垂井宿
海外：アポロ、ルル
UK



富山県 五箇山 菅沼集落 ありの村 A4

初めまして、小野綾子と申します。この度同人に入会させて頂きました。どうぞ宜しくお願い致します。

ハウスメーカーに7年半勤め、設計事務所で2年過ごしました。木造が専門なのですが、伝統工法は素人です。まだまだ若輩者で皆さまにご指導いただきたく思います。

私の興味は「環境共生住宅」から始まり、健康住宅、循環型社会、そして古民家と繋がっています。古民家・・・一体これの何に惹かれるものがあるのか、まだ整理しきれていないのですが、架構の美しさもその魅力の一つです。木なりの架構には、温かみを感じます。また、使用されている自然素材については、覗けば何かが出てきそうで面白いと思っています。

最近のホームショーなど見学していると、今のエコ&循環型建材に多く使われ始めたものに炭や光触媒、EMなどの微生物、そしてマイナスイオンなどがあります。これらは昔の日本の暮らしの知恵として古民家等で使われていたモノが多いのではと思っています。

例えば消臭効果、遠赤外線効果、電磁波避けとも言われている炭は、燻された古材に、光触媒は多分漆喰壁に、微生物は土壁のバチルス菌（防カビ剤）としてありました。マイナスイオンは何処にあったのかな。でもきっと何処かに使われていたのだと思っています。

バウビオロジーの有名な言葉に「建築は第三の皮膚」というのが有りますね。建築空間が

人の健康や心にどのくらいの影響を与えるのでしょうか・・・素材やデザインがもたらすパワーはどのようなものがあるのかを学んで、自分なりに計画できたら面白いと思います。

話は変わって・・・環境汚染が問題となっている昨今ですが、水、空気、土の中で一番深刻なのは土壌汚染と言われています。これは、水や空気汚染の場合なら、ある程度浄化の方法が有るようですが、土壌汚染に対しては、回復が長期的でなかなか決定的な対処が今のところ無く難しい、と聞いています。

土壌汚染は私たちの生活廃棄物が大きく影響しているのですが、建築に出来ることとして、廃棄される建材が土に戻るものであればベストだと思います。循環型社会の調和を助けるものとして、土に戻る建材=自然素材だと思っています。

今年の同人のテーマが「自然素材を使う意味」ということで、人それぞれ意見があると思いますが、学んで行けることを楽しみにしています。

そして、学んだ事を自分の中で消化し、提案し、実践して、豊かな社会づくりに少しでも近づいて行きたい、と思います。

・・・楽しい勉強会を通して、実りある一年となりますように・・・

どうぞ、よろしく申し上げます。

■2003 年会員登録更新のご案内

1. 年会員 (会費 8000 円/年)
 - ・語る会聴講 (5 回以上/年)、機関誌 (1 回/年)、会報 (6 回発行/年)
 - ・すべての同人の活動情報を会報以外にも提供します。
2. 学生会員 (会費 5000 円/年) (本年より設定しました)
 - ・語る会聴講 (5 回以上/年)、機関誌 (1 回/年)、会報 (6 回発行/年)
3. 会報購読会員 (会費 3000 円/年)
 - ・会報 (6 回発行/年)
 - ・語る会に参加する際は、その都度、会場費等として参加費をお支払い下さい。
4. 語る会聴講 (参加費 一般 2000 円/回、学生 1000 円/回)
 - ・年会員、学生会員でない方は参加費を支払っていただきます。

☆ 年会員・学生会員、会報購読会員の会費は 1 月から 12 月まで 1 年分とし、中途入会の方も上記の会費にてお願い致します。

☆ 入会希望の方、会員の方は、下記用紙に必要事項を記入して FAX・郵送するか、下記書式に従いメールを送るか、いずれの方法でも構いませんので、必ず事務局まで届けて下さい。

☆ 会費納入は郵便局にて以下の口座にお振込みください (手数料は各自でご負担願います)。

総合口座 10010-54101181

生活文化同人 代表者 吉田桂二

☆ 不明な点、質問などは新事務局までお問い合わせ下さい (事務局が変わりました)。

生活文化同人事務局 新井 聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南 2-5-5-404

TEL: 048-432-8651. FAX: 048-432-8651. E-mail: nook@kjps.net

※生活文化同人はボランティアにて運営されている会です。滞りない会の運営のために、会費の納入は 2 月末までにお願いします。

生活文化同人事務局 新井聡 行

■2003 年生活文化同人登録書 (入会申込み・会員更新・変更届・退会届)

(会員数の把握、名簿整理のため 2002 年度会員の方もお送り下さい。ご協力をお願いします)

1. 下記の該当する欄に○をつけて下さい。

□新規会員の方 1. 年会員 2. 会報購読会員

□既に会員の方 1. 継続 2. 年会員に変更 3. 会報購読会員に変更 4. 退会

2. 氏名、連絡先等をご記入下さい

フリガナ 氏名: _____

勤務先: _____

勤務先住所: 〒 _____

TEL _____ - _____ . FAX _____ - _____ .

自宅住所: 〒 _____

TEL _____ - _____ . FAX _____ - _____ .

E-mail: _____

3. 会報送り先を下記のどちらかに○をつけて指定して下さい。

1. 勤務先 2. 自宅

■2003年 第1回「語る会」のお知らせ

語る人 吉田桂二氏

第1回の語る会のテーマは「自然素材を使う意味」です。

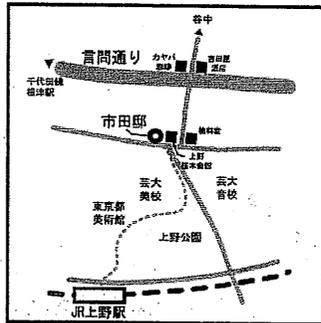
日時 1月31日(金曜日) 午後7時00分から

場所 谷中・市田邸 東京都台東区上野桜木1丁目6-2

・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います。(酒代等は割り勘です。)

・参加希望者は1月30日までに下記までご連絡ください。発表希望者も下記までご連絡ください。

◆事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)
〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南2-5-5-404
Tel : 048-432-8651. Fax : 048-432-8651.
E-Mail : nook@kjps.net



■イベントのご案内

会報内に詳しいご案内も掲載されていますが、下記のようなイベントがあります。

●「伝統文化と住環境エコロジー」(ワークショップ、シンポ、交流会) ● (詳しくは P5)

日時: 1月25日(土) 11:00~19:30

場所: はまぎんホール(桜木町)

会費: ワークショップ¥無料、シンポジウム¥2,000、交流会¥3,000(要予約)

●羽田澄子監督のトークと映画の会 ● (詳しくは P7)

日時: 2月26日 13:00~16:30(開場 12:30)

場所: 目白自由学園明日館講堂

会費: 前売り¥2,000、当日¥2,500

■次回世話人会のお知らせ

日時・場所: 未定(会員の方には後日、事務局よりご連絡いたします)

・生活文化同人の活動方針や、定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」ですが、世話人以外の方も自由に参加できます。(ただし、酒代などは自腹です。)参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■編集後記

・2003年は生活文化同人も10年目と大きな節目の年です。今年もよろしくお祈りします。(飯島)

■会報編集局より

- ・会報原稿を募集しております。「私の近作」「主張」「旅の報告」「スケッチ」など何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。

◆2002年度事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南2-5-5-404
Tel : 048-432-8651. Fax : 048-432-8651.
E-Mail : nook@kjps.net

◆2002年度会報編集局 飯島克如 (まちづくりカンパニー・シーブネットワーク)

高松俊秀 (東京理科大学修士2年)
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-7YK 駿河台
Tel : 03-3233-2311 (代表). Fax : 03-3233-1312.
E-Mail : kiiijima@tama.or.jp

生活 文化

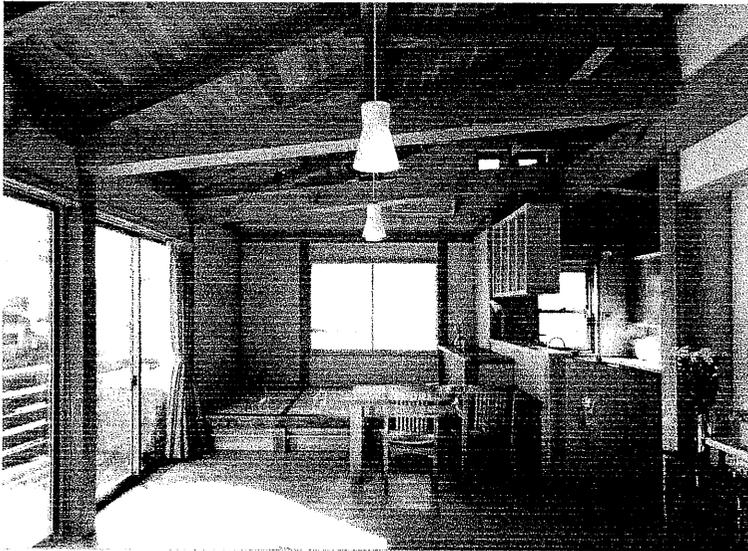
seikatsubunka

目次

- P 2… 第一回語る会報告「自然素材を使う意味」
- P10… 「木の家を造ると言うこと」
- P11… 吉田桂二先生レクチャー感想
- P12… 景観模型報告 その6

生活文化同人会報

2003年3月 No. 60



2003年第2回「語る会」のお知らせ
語り手：新井 聡（アトリエ・ヌック）
テーマ：デザイン&マネージメント
場 所：谷中・市田邸
日 時：2003年4月11日（金）18：30より

■「自然素材を使う意味」..... 飯島克如

第一回の「語る会」は、吉田桂二先生を語り手として 1 月 31 日谷中市田邸で行われました。

「自然素材を使う意味」という話だと木を使うという話だと思うのです。おそらくここでは住宅の設計をやる人が多いと思いますが、自然素材だからと言っても輸入材もあるわけです。輸入材も自然素材ですから。しかし、「自然素材」というときに「国産材を使おうじゃないか」と言うことが一番の主張ではないかと思うのです。

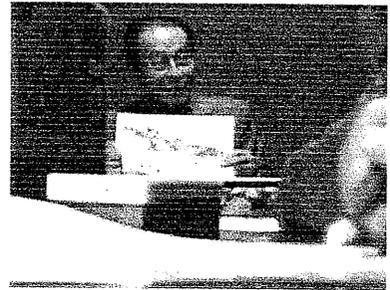
山の木が伐採されて製材されて、あとに苗木を植えることで、山のサイクルが昔からできている。それが山の管理の仕方です。そのことによって山の環境が守られてきたわけです。しかし、今は伐採されずに日本には木が余るほどある。これでは、山は荒れていくわけです。つまり、国産の木を使うと言うことは、日本の山の環境を保全するという事なのです。

さらに自然素材を使って、つまり木を使って家を作ると言うことは、化学物質で汚染された室内環境を作り出すような材料を駆逐しようとシックハウスを克服するためでもあるわけです。

それでは、その自然素材で健康的な家を作るためにはどうしたらよいのか。私は住む人の意識も変わらなくてはいけないと思うのです。

例えば高気密高断熱というものがあります。断熱性と気密性が高いことは悪いことではありません。しかし、高気密高断熱では必ず 24 時間換気をします。窓を締め切りにして冬は暖かく、夏は涼しく過ごします。実は、そこが問題になります。高気密高断熱の家でも「窓を開けて暮らしてくれ」「できるだけ空調を切ってください」と言わなくてはなりません。

つまり、健康住宅と言うのは自然素材で作るだけではなくて、どう暮らすかも重要なのです。中は自然素材だから確かに毒性のない空間だけれども、そこで高気密高断熱で 24 時間換気の中で暮らしたならば、家から一步出たらバタンと倒れるような人間ができるかもしれません。人間の耐力を自分で作らないと本当の健康を維持できないと思います。そう



すると過度の高気密高断熱は必要ありません。しかも、それは当然省エネルギーでエコロジーになります。今の子育て世代の奥さんたちはゴキブリが出てきただけで大騒ぎをしますが、ゴキブリの住むような環境よりも、窓を開けない環境の方がよっぽど危ないと思います。

現在、住む人の意識が「家を建てる」と言うより、「家を買う」と言う意識になっています。「家を建てる」と言う意識を持った人が非常に少ない。そこに非常に昔とは違う大きなギャップがあります。「家を買う」と言うことは、冷蔵庫やクーラーを買うことと同じ意味です。いろいろな家から自分の家を選別するという発想になっています。これでは電気製品と同じ使い捨ての商品になります。そのことが住宅の寿命を短くしています。

また、自然素材を使えば、例えば、自然素材の柱を使えば柱なんか割れます。夜中にバンバンと音が出ます。「家を買う」と言う発想だと、これがすべてクレームになるわけです。板材もどれだけ縮むのかは専門家でもわかりません。縮むものもあるし、縮まないものもあります。それを選別して使うことはほぼ不可能です。そういうものが全部クレームになります。性能保証と言うのがありますが、その場合自然素材を使うと言うことは不可能です。だからハウスメーカーはそれを最初から予防するために合板を使うわけです。

だから、家を「買う」から「建てる」へ戻す人の意識の改造が必要になります。そして、その意識を変えるために行動をしなくてはなりません。

意識の改造のためには、作っている人の顔が見えるか見えないかで大きな差があります。建てるんだったら、建てる人の顔が見えないといけません。建て主が現場へ行くとかね。そうすると、大工がいます。そこで大工の人といろいろと話をすることで信頼感をきちんと作れば、クレームは起こりません。作る人の側の考えを建てる人の側にきちんとわかってもらえるような対応しながら、顔を合わせて家を作っていくと言うことが必要だろうと思います。そして、そのことは、地域の工務店が手作りで作っていく家に戻ることだと思うのです。

豊かになって、人は一番自分の欲望が一番合ったものに敏感になってきています。家の作り方にもそういうものが現れています。少なくとも、最も、良心的な建築家は建て主のことを100%考える人だといわれています。それだからこそ昔に比べれば質のよい住宅が建ってきてはいます。しかし、昔に比べて質の良い家が建ってきているのになぜ町がつかまらないのでしょうか。何でいい町にならないのでしょうか。

また、今その住宅の寿命と言うのが非常に短くなってきています。長いほうでも20年余り、短いほうだと12年と言われています。昔の日本の家の寿命はもっと長いものでした。長寿命の家を作ると言うのはとても重要なことです。かつては木の生産のサイクルと建物のサイクルがあっていました。しかし、これでは木のサイクルが回復しません。

建て主は100年住みません。けれども、その子供たちが住むでしょう。そして、その子供たちの孫の世代も住むかもしれません。しかし、昔の家は、借家が非常に多く、9割ぐらい借家でした。普通の人は家を建てなかったのです。「借家」と言ったら誰でも住めなくてはなりません。誰でも住める家ということは長寿命の家には非常に重要な性格です。それは建て主の希望を今の100%かなえる家とは違うのではないかと思うのです。

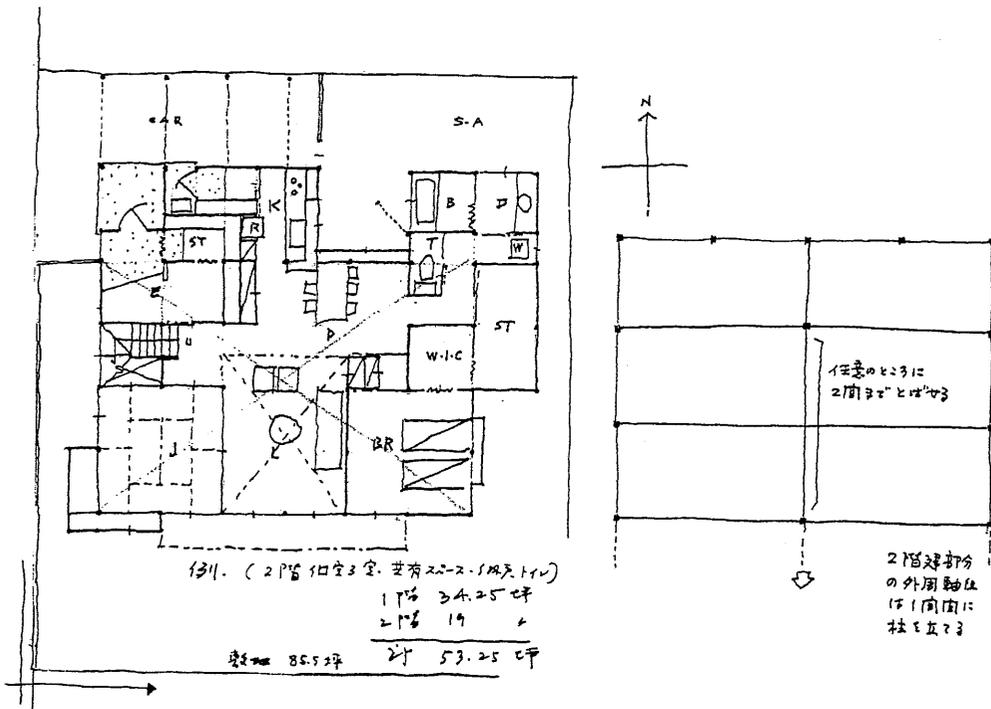
設計する立場で言うと、建て主に頼まれてきてきているわけです。しかし、建て主頼まれてきていると言う設計士の立場だけではだめで、もっと作る立場としての発言も必要だと思います。そのとき、「こういう作り方をするのが良いんだ」と言うことが必要なのです。

では長寿命の家を作るコンセプトは何でしょうか。ひとつは構造です。フレームをきちんと考えておいて、メインの柱を動かさないで、いくつもの間取りを作ることが可能であること。当然2バイ4の住宅ではなくて、日本の軸組み構造の家、民家の軸組み構造。そういうことができてきたのが日本の民家です。民家で言いますと間取りは変わってきているわけです。それが長寿命の原点だろうと。

そして、昔に比べて一番考えなくてはならないのは、設備の問題でしょう。設備の寿命がきて建物が壊されてしまいます。

プランニング 20 の基本的コンセプト。誰でも住める家です。

樟半架橋(梁間4間用)のプラン — 3間用を想定する。



間取りは、架構の形に従属させます。外部空間で、架構を決め、間取りは架構をかけて従属させます。これが長寿命の家を造る一般法則です。図では、左右4間、縦3間にしています。そうすることで製材が非常に楽になります。周りの壁にはこの柱さえ動かさなければそんなに太い材はいりません。非常に材が少なくて済みます。だから、お金をかけずに国産材を使って家を造ることができます。

梁は丸太です。丸太のまま使うとコストがかかりますが、このように上下を太鼓状に落とすと、手間はそんなにかからない。高さが決まってくるから墨付けが楽です。2間飛ばしているところは真ん中に天秤梁をかけます。そうすることで細い材で持たせる事が出来ます。真ん中の縦にのびる梁も2間とばす可能性があるから、9寸の太鼓落としの丸太を縦に使っています。2間までとばせればどこでもとばせます。小屋組は、登り梁を考えてみました。

プランニング 20 の基本的コンセプト

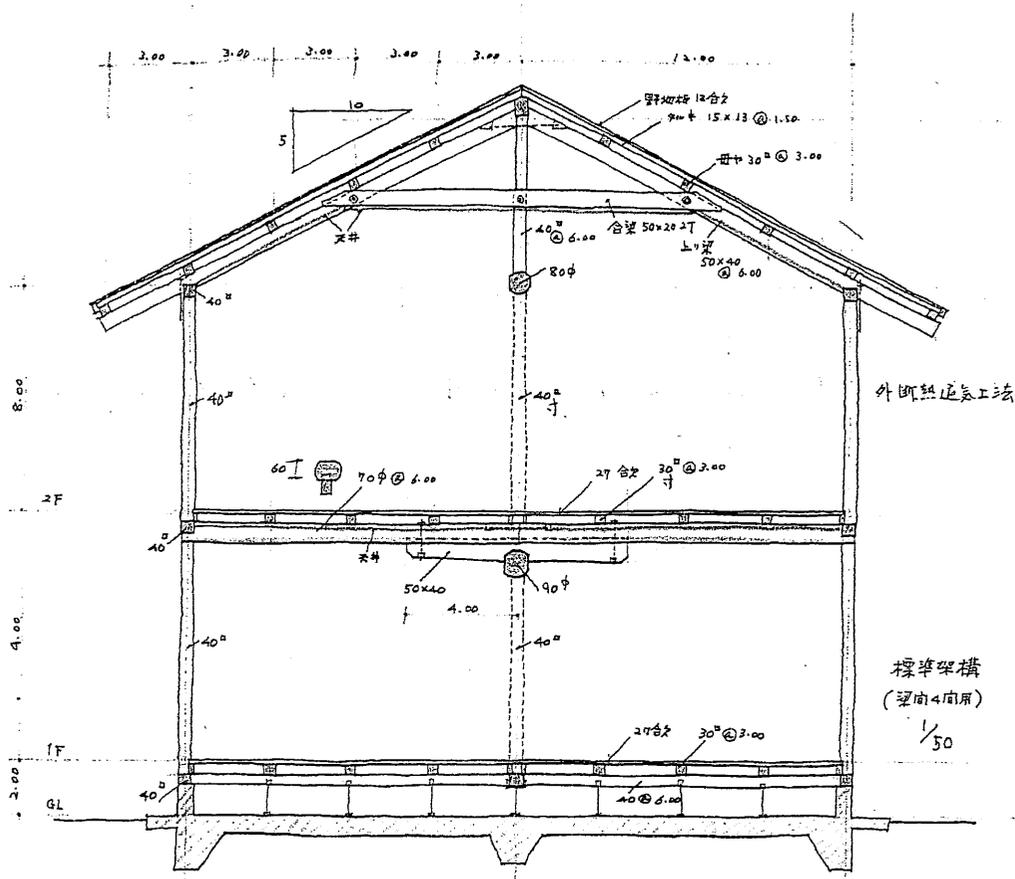
- ・プランのグリッドは1間角を基本とする→架構の標準化
- ・建坪・延坪は小さく、部屋数は少なくする→家は小さく・内部空間は広く
- ・間取りは架構の形に従属する
- ・内部空間に可変性を与える→長寿命の家にする

- ・2階建部分を整形にする→屋根を単純化・町並みへの視点
- ・1階下屋は庭を意図的に残す→敷地の有効利用

- ・家族空間の一体化→ふれあいの空間
- ・玄関を独立させる
- ・夫婦寝室以外の個室的空间は閉鎖性を求めない→転用性

- ・和室以外には押入・造り付け収納を儲けない→単純化・転用性
- ・玄関収納、勝手口収納、個室収納は小室としてとる
- 家具工事を廃する棚には扉を設けない
- ・納戸は1、2階ともにとる→物を置かない生活
- ・玄関戸、勝手口戸以外は引戸を多用→開放性、バリアフリー化
- ・吹抜をとる→1、2階空間の融合、通風、換気に利
- ・のれん、カーテンでよいところは建具を設けない→住んで便利
- ・木材を主体としてつくる
- ・主架構材は杉丸太、タイコおとし材にする
- ・大断面材をできるだけ使わない架構

- ・門を設けない→ポーチに干、アプローチ庭を区画
- ・カーポート上屋を設計に含める→既製品カーポートを排除



間取りがどうなるかという、2階建てにするときは1階が大きくて2階が小さい。1階の張り出し方を土地の要求に合わせて下屋をつけていくと、2階の形が必ず起点になります。横への張り出しがなくなります。

それで、屋根が単純化するので、町並みをつくる一つの大きな要素になるのではないかと思います。昔の町並みはみんなそうです。庄屋さんの家だけが入母屋です。後はみんな切り妻が多い。それが並んでいく訳だから町並みができるわけです。「昔の町家はピッタリくっついている」と言いながら、屋根と屋根がどうなっているかという、必ずどちらかが上がっています。それで、境界線を越えて、低い方の屋根は相手の壁にどんと当たっている。上の方は境界線を越えて出します。現代では無理だけれども、仮に、3尺ぐらい、少なくとも2尺五寸だと、これは完全に町並みをつくることができます。このコンセプトは町づくりと家造りを結ぶコンセプトになるだろうと思います。2階部分を整形にし、屋根を単純化して、町並みへの視点を持たせるのです。

内部空間の利用については、和室以外には押入を設けません。こども部屋に押入をつく

るとベッドが置いてあったりして、本当に使いづらい。また、住んでいる家へ行ってみると押入の中にある物をだして使ったことがないという家がほとんどです。

今は、作りつけの家具は、必ず合板を使います。無垢で昔の大工はつくったけれども、今の大工は作れません。今は既製品を使っています。これでは自然素材を使っている意味が薄れてしまいます。

玄関収納・勝手口収納・個室収納は小室としてとります。収納室の中はラフな杉板で、なるべく扉をつけない。その方が通気もよくて、ダニが出てきません。

納戸は1・2階にとります。1階につくらないと納戸の使用頻度は減ってしまいます。納戸は2階にとることが多いですが、2階にあるとモノを取りに行くのが面倒くさくなって、取りに行かなくなります。取りに行かないと物が置いてあることを忘れます。そうすると同じモノをまた買ってしまいます。これでは、非エコノミックです。

カーポート上屋を設計に含めます。家屋の設計に含めると非常にローコストで出来ます。

3間4間の12坪の家にしたとき、この屋根は南北棟の屋根になってしまうことがある。12坪に関しては今の状況では少し小さい。少なくとも、夫婦寝室、子ども室の二つぐらいは2階へあげたいと思う。だから、16坪は入ります。4間というのはあり得ます。ただ、4間で作るとするのは難しい。同じ大きさならば、3間5間の方がつくりやすい。だから、3間の架構を考えています。

自然素材を使おう、国産の材を使おうとしたときに、こういう結論で出来るだろうと思ったわけです。自分の作品という意味ではないですよ。むしろ日本の家はこういうコンセプトで造らなければならないと言いたいのです。これを実現させるには国産材の流通を考えなくてはなりません。「一所懸命建て主と相談して国産材の良い家を作りましたよ」だけでは国産材を使う道は開けないのです。国産材を使おうと思って、一人二人が山へ行って買ってきても、国産材のサイクルを変わらないのです。それは一人二人だけではできません。みんなでやらなくてはいけないものです。それで、今日はその、彼にもきてもらっています。匠の会のメンバーです。こういう人たちと設計をやる人間が一致連帯していく。そのことによって、国産材を使う需要を大きくしていくのです。

一方、山林所有者というのは非常に意識が低いです。自分の山を持っているけれどもその外側を知らない人がいっぱいいます。それに森林組合というのも非常に腐っています。補助金受取団体になってしまっています。そういう状況ですから、需要をきちんとつくって、需要をつくることで、山に計画的な植林あるいは伐採の体制をつくる必要があります。つかむモノがないと、山を切れと言っても切れないのです。需要をつくるためには一人二人の設計ではなくて、運動として、例えばそういう家を造る。こういうことを運動として手作りでやる人たちが引っ張る必要があるのです。

内子では、建築の設計をやっている者、つくっている者を集めて、勉強会をして、NPOがようやく立ち上がったんです。そこで、まず住宅相談室をつくりました。

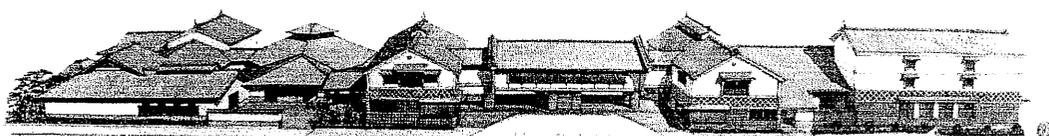
内子の行政は今、分譲地をつくっています。人口が少し増えてきているんです。これをハウスメーカーで建てようとしています。

「これではおまえら駄目だろ。内子には伝建があるだろ。あなた方が今これからつくった街が100年後に伝建になるんだぞ。それくらいのモノをつくれ。」

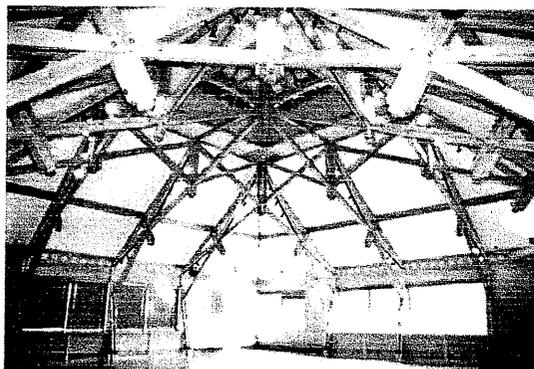
そう言ったら、彼らは燃えました。そして、NPOができました。

一人ずつの動きでは、行政は1業者としてしか扱えません。NPOという社会的資格を持つことです。そうして内子は動いています。そして、そこに建築協定を入れようとしています。今の建築協定は、外構ばかりの話ですが、家の作り方まで含めた建築協定をつくろうとしています。そして、そういう家が並んだらどうなるのかという絵を描いて、家を建てる人が「こういう町になるんだ」と理解できるようにしたんです。でも、いつ実現するか解らない。だから、相談所をつくって、そこに家を建てる人は必ず相談するような窓口をつくりました。

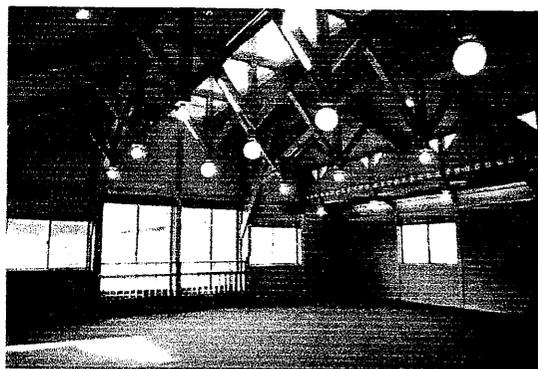
町にはいろいろな建築公共施設があるのですが、それぞれに企画があります。その企画に委員として全て参加しています。そうすると、いくらか手当が出ます。多少なりとも、NPOの運営資金になる。またそうすることで、町の施策に入っていけます。業者である内子は町の方でつくった規格でいくらでやりますと言う話にしかありません。自分たちで考え



内子自治センター外観



内子自治センター内部

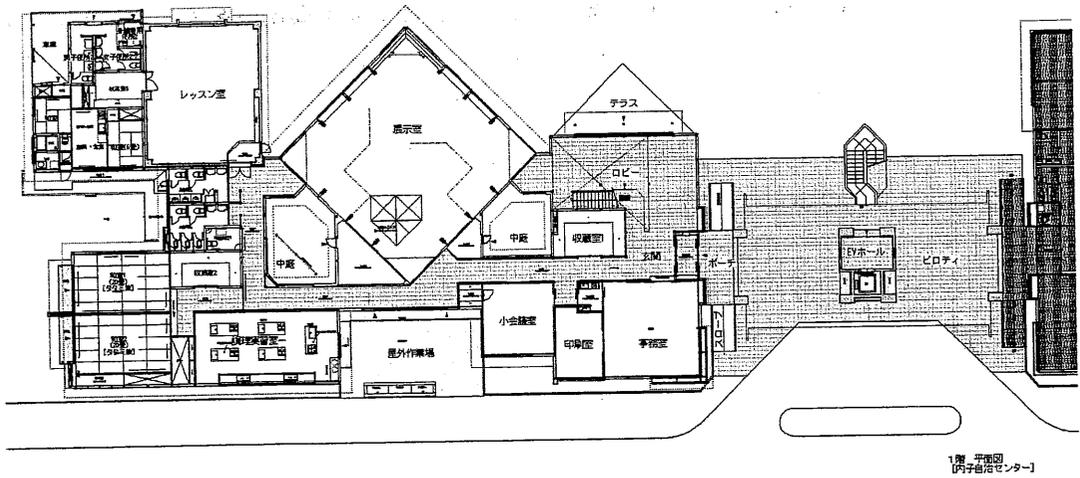


内子自治センター外観

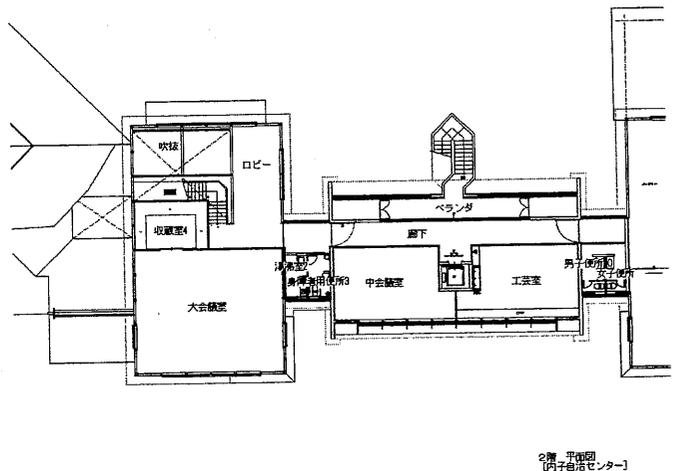
てつくるためには、業者ではない立場になることです。運動としてやっていくことによって、需要が喚起されます。

それから、町には公共空間というのがあります。公共空間というのは割合よく出来ますが、私的な空間がなかなか出来ない。そこで、公共空間の作り方を雛形にして、家を造ろうとしています。

内子の町では今町始まって以来の大プロジェクトを動かしています。市民センター的な施設、つまり、いろんな集会、会議、それから調理、工作室とかそういうモノが今出ています。



1階 平面図
[内子自治センター]



2階 平面図
[内子自治センター]

■「木の家を造ると言うこと」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 千葉弘幸

私は埼玉県越谷市で工務店を営んでいます。今回「語る会」に突然ですが出席することとなり（過去に2回ほど出席させてもらっていますが・・・）、「さらになぜか感想を書いて欲しいと言われ訳がわからぬうちに返事をしていました。すると2日後にメールが届き「あっ、本当に書くのだ～」と思った。受けたからにはさあ書かねばと思い、今私が考えている「木の家を造ると言うこと」をテーマに書いてみました。

吉田桂二先生曰く「買うから建てる、へ戻れ!」と言われた。これは数年前から私もユーザーに言ってきたことで、まさしく現在の住宅事情を表している言葉だと思う。時代がこのようになったのか、私たちがしたのか?そもそも家造りは「他人に任せないもの」ではないか?（某雑誌のタイトルにあったような・・・）今私たちがプロとして生活しているのは大勢の顧客のおかげですが、その顧客を育て、かつ暮らすことをもう一度昔にもどって考えた方がいい。今の時代は外が暑いから窓を閉める。本来は暑いから窓を開けたのではないのか?薪ストーブが子供にとって熱いから、さわって危ないから導入したはいいがさっぱりつけない。熱いのは大人も同じである。階段や吹き抜け等の手摺りがない、または低いので子供にとって危ない!などと言う。老人ならまだしも子供などには少し家の中で危険を冒させて方がいい。家の階段2段目や3段目で転ぶのと、公園のコンクリートの階段で転ぶのとどっちが危ないのか?家で学ばずにどこで学ぶと言うのか?家を造ると言うことは、その家庭の大事な課程（プロセス）を作り出すことでもある。「健康住宅を造ります」などと平気で言っているメーカー、工務店、設計者の気が知れない。本来はこの「健康住宅を造ります」は「健康になれる可能性のある家を造ります」の間違いではないか?そこに住み、暮らしていくのは施主である。「家を造る」というのはみんながお互いを理解し、かつ主張し造っていくものではないのか。ある設計事務所勤務の人と話をしたら、工務店は見積もりも出さずに仕事をして「それは予算に合わない」といい、大工は「合板で造るのがふつうだ」と言ってえげっている。これでは家を造っているのではなく家を組み上げて形にしているだけである。設計事務所でも良く聞くのが「これは僕の作品!」と語っている。「僕ではなく、僕たちのではないのか?」

最後に、生きていくために木を伐り、製材している人々がいる。それを加工して製品にしている人がある。さらに加工して家の形にしていく人がある。その形を住みよい形に提案していく人がある。現場を管理、監督している人がある。壁を塗っている人がある。畳を作る人がある。建具を作る・・・そして最後にそこに住む私たちがいるのです。

（株）千葉工務店 千葉弘幸

■吉田桂二先生レクチャー感想 荒井将佳

木＝国産材を見ると、日本の森林（山）の管理が上手く行っていない、昔からの仕方ではなく荒れている。環境保全する事が意味あるのだ。そして、化学物質汚染を駆逐し、室内環境を守ろう。木を健康的に使うには、住む人の意識を変える行動を起こさねば道は拓けないと思う。山へ木を買いに少人数で行っても、流通は変わらない。「家を建てる」より「家を買う」意識のギャップが有り、既製品を買うと言う気持ちで家を選別する意識にさせてしまった。ハウスメーカーは機械を止められないので、使い捨て型の商品にして行く為に、ユーザー意識が変わって来てしまった事の難しさも有る。

自然素材の目利きが難しいし、クレームを恐れて無垢より合板を使ってしまうのであり、人間の意識を最初から変えねばならない。職人の姿が見える工務店の建築は、施主の理解や共同の参加と責任意識が芽生えて来るので、クレームにならないから今後は建て方が変わっていくと思う。切り口から、いつになく鋭い厳しい口調で始まった先生のお話、上野の森の寒気が隙間から忍び込む。市田邸に座した会員の面に、緊張がみなぎった。プランニング二十の基本的コンセプトに標準架構の純粋な明確さに驚きつつも、スライドに映された作品の数々と、コンセプトに納得を覚え、計算し尽くされた感覚に裏付けられた構造のディテールには、神業の域に達せられたのではないかとつくづく感じ入った次第です。

偶々会誌に御掲載賜った一畳屋の発起で始めた「伝統文化と住環境エコロジー」の波起こしに象徴されるようなプレート震動が彼方此方で列島を揺るがしたように感じる事しきりです。吉田先生から最後に投げ掛けられた、大平宿や会の存続についての再考時と、行動を起こすべき時を迎えている筈とのお言葉に籠もる同人たちへの気持ちが痛く我が胸に響くと共に、森の中の木漏れ日を通して山に降りそそぐ、暖かな陽光を覚えました。

畳アドバイザー荒井将佳

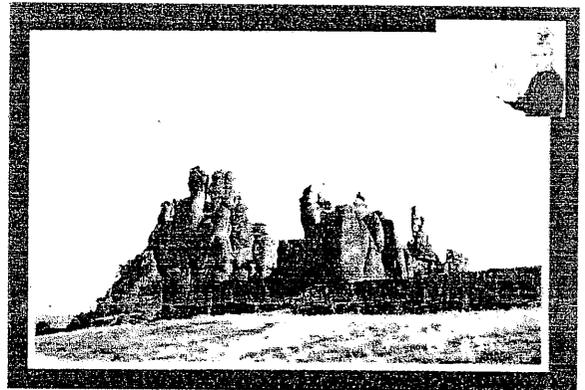
■景観模型報告 その6 盛口 尚子

当研修も、今回で7回目をむかえました。見知らぬ国の人々と会話(?)をしながら、一つのものをつくりあげていく時間は、指導する私たちにとっても、この上ない贈り物をしていただいている実感があり、喜びです。ご報告させていただきます。

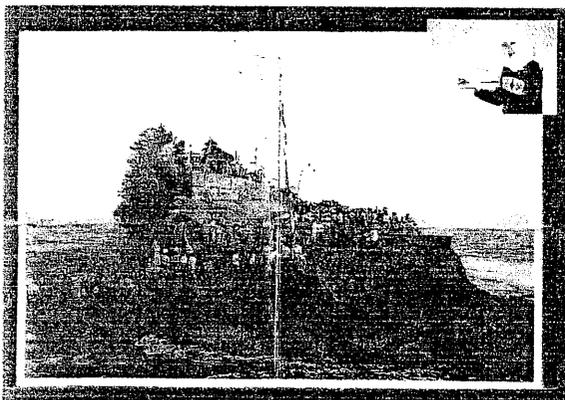
レゼネ 【エリトリア】	エリトリア国立博物館	製作テーマ:伝統的家屋と生活
カティア 【ブルガリア】	文化省芸術局	製作テーマ:要塞ベログラドチク
アリ 【インドネシア】	ジャカルタ博物館局	製作テーマ:バリ島タナロット寺院
シェリ 【サウジアラビア】	教育省博物館局	製作テーマ:アルナマス村の生活
マンダキニ 【ネパール】	パタン遺跡保存局	製作テーマ:仏塔スワヤンブーナート
リーム 【ヨルダン】	マダバ考古学博物館	製作テーマ:砂漠の宮殿クセイルアムラ



レゼネ (エリトリア・エリトリア国立博物館)
製作テーマ:伝統的家屋と生活



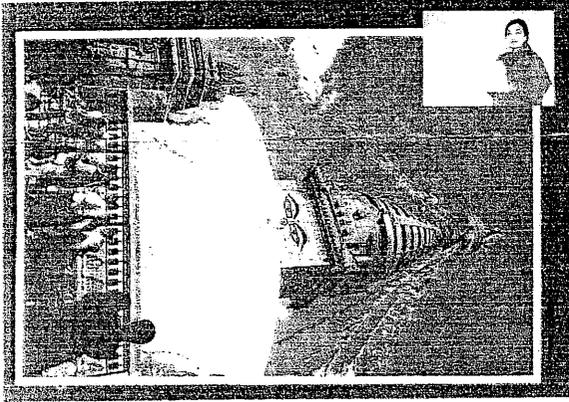
カティア (ブルガリア・文化省芸術局)
製作テーマ:要塞ベログラドチク



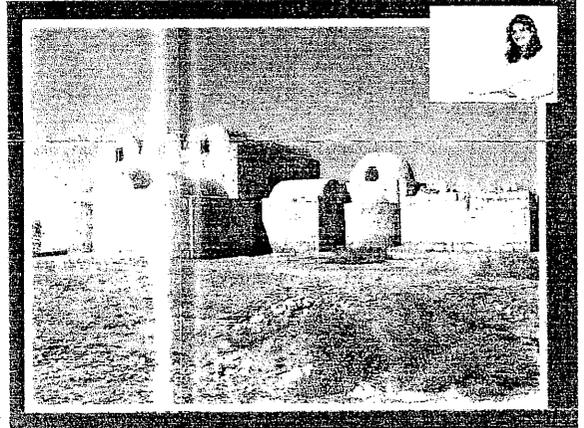
アリ (インドネシア・ジャカルタ博物館局)
製作テーマ:バリ島タナロット寺院



シェリ (サウジアラビア・教育省博物館局)
製作テーマ:アルナマス村の生活



マンダキニ（ネパール・パタン遺跡保存局）
製作テーマ：仏塔スワンプーナート



リーム（ヨルダン・マダバ考古学博物館）
製作テーマ：砂漠の宮殿クセイルアムラ

私はエリトリアのレゼネさんを担当し、彼のお父さんの生まれた村を作りました。

「エリトリアの伝統家屋と生活」 Eritrea Mr. Rezene Russom Tesfazion

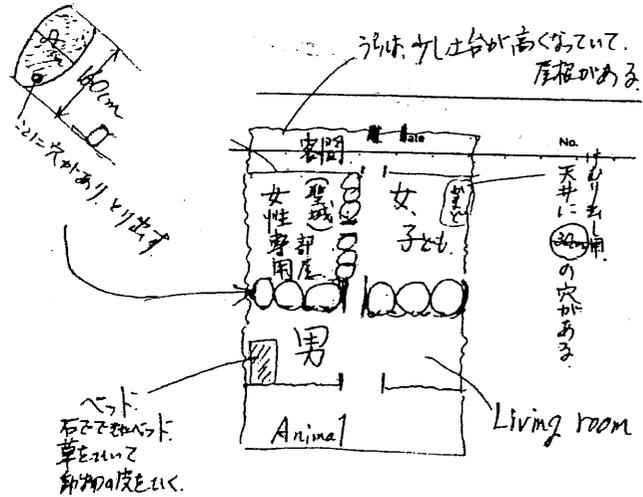
彼は都会育ちで小さい頃、お父さんと一緒におばあさんの住んでいるこの村に、クリスマスや家族のセレモニーの時に帰省しました。おばあさんの住む家はエリトリアのハイランド地区にありこの地域では伝統的な家屋でした。この家を中心にして彼は村の様子を製作することにしました。彼が初めに描いた風景は広範囲でした。この村の中にイスラム教のモスクとキリスト教の教会が近い距離にありました。彼は模型の中にどちらも入れたかったようでしたが、A4大という範囲の中にはどちらかしか入れることができず、残念そうでした。結局、彼が信仰しているギリシア正教会をいれました。

彼とこの村や伝統家屋、家族の話をしてるととてもものんびりとした平和で穏やかな人々の生活が想像できました。しかし、彼の国エリトリアは少し前まで、エチオピアとの戦争が絶えず、自由で平和な国ではありませんでした。彼から自分の国の歴史が語られ、その話を聞くと、みんな静かに平和な生活を営んでいるのに、なぜそれが破られてしまうのだろうかと思います。彼はアメリカのフロリダ大学にて「Ethnological Archaeological Study on Traditional House of Highland Village in Eritrea」という論文を書きました。儀式、結婚式、子供が生まれた時、人生の通過儀礼の時にその家の果たした役割。エリトリアのハイランド地区にどうしてこういう家を作ったのかという歴史的考察。経済的に果たした役割。など、民族学的考古学的にまとめた約150ページの論文だそうです。

私は模型製作を通して、次のような興味深い話を彼からたくさん教えてもらいました。

遺産分割の仕方は、「父親が亡くなった時は年上の子供は自活できるが、年下の子供は自活できないので家を相続する権利を持つ。嫁とりをするので女の子は家を相続する権利はない」そうです。

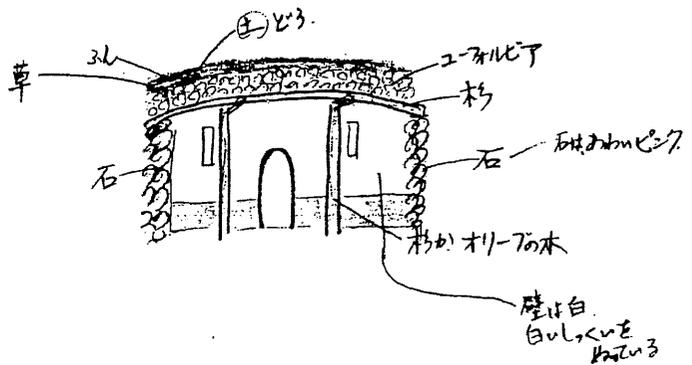
家の中の様子は、女性、男性、客用に分かれた部屋、貴重品の置かれた部屋、台所、その家の女性でしか絶対に入れない部屋があります。もしその決まりを破って男性がその女性専用の部屋に入ってしまったら村人達からたとえその家の主人であっても罰せられるそうです。これは男性の暴力から女性を守るためにあるそうです。部屋の仕切り壁は穀物貯蔵用の大甕（大きいもので高さ 160cm、直径 80cm）を並べたもので、非常に効率的にできています。土地はみんなの共通の持ち物で、土地の売買はないそうです。建物があれば、個人の持ち物です。社会主義的な考え方ですが、村人の協力や団結を感じます。



この家で住んでいる人は必ずこの家に戻ってお葬式をします。どこか遠くで亡くなった時はその亡骸をその家に戻します。そのためのお金を家族や身内は支払います。

この家で住んでいる人は必ずこの家に戻ってお葬式をします。どこか遠くで亡くなった時はその亡骸をその家に戻します。そのためのお金を家族や身内は支払います。

この家の壁は石を積み重ねて造ります。屋根は杉の木で骨組みを造りその上にユーフォルビアというアフリカ特有の木の枝を積み重ね、その上に草、動物の糞、土を重ねます。正面は2本の杉かオリーブの木で支えます。ユーフォルビアの木を私は初めて知りました。



彼のお父さんは末っ子だったので、家は彼のお父さんが相続しました。本当は7つ家が續いていたそうですが、スケールの加減で3つ並びでよいということになりました。この家にずっと住んでいた彼のおばあさんは5年前に75歳で亡くなりました。この模型の風景とよく似た写真を探しましたが、ありませんでした。家については正面から見た写真を2

枚、彼が持っていたので、なんとか作図できました。彼の話聞きながら風景のイメージをつかんでいきました。模型では、彼のお父さんの家の屋根をはずして、内部の様子を見れるようにしました。台所の煙出し用の穴から、夕餉の煙りが出ている様子を表現しました。一つだけ表現するつもりでしたが、彼はあちこちからいっせいに煙りがあがるというので、一軒だけでなくすべて表現することにしました。

彼はとても思慮深く、穏やかでやさしい方でした。家族は6歳の女の子と4歳の男の子がいます。「家族の写真を持ってきていないのが、今の自分の問題だ。」と残念がっていました。朝7時徒歩出勤（15分ぐらいのところにあるエリトリア博物館）、昼12時～2時に帰宅して昼食、夕方5時～6時に帰宅という生活だそうです。日本人はせかせかしていると感じるというのも、これを聞くとうなずけます。最後のパーティーではティグレ語でお礼の挨拶をしてくれました。日本人はとてもていねいで、あたたかく、日本が大好きだと話されました。エリトリアに戻ったら、村の写真を送ります。といわれたので、たのしみにしています。

有限会社景観模型工房 盛口 尚子

■2003 年第 2 回「語る会」のお知らせ

語る人：新井聡氏

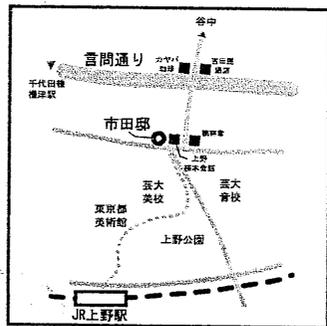
テーマ：「デザイン&マネージメント」

日時 4月11日(金曜日) 午後6時30分より

場所 谷中・市田邸 東京都台東区上野桜木1丁目6-2

- ・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います。
- ・参加希望者は4月9日までに下記までご連絡ください。発表希望者も下記までご連絡ください。

◆事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)
〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南2-5-5-404
Tel : 048-432-8651. Fax : 048-432-8651.
E-Mail : nook@kjps.net



■大平建築塾事務局からのお知らせ

日程・分科会・参加費等が以下の通りになりましたのでご報告いたします。

【開催日】2003年8月2日(土)~8月4日(月)

【日程】1日目PM: 大平宿見学、きこり体験

夜: 夜会公演

2日目AM: 10:00~分科会1

PM: 13:00~分科会2、15:30~17:00 基調講演

【メインテーマ】「保存と創造を結ぶ」

【分科会】(企画者は今も募集しております。)

長谷川順持: 日本の集落と西洋の集落

連合設計社: 吉田桂二分析

宮越喜彦: (仮) 伝統的な木造技術のこれからの課題と可能性

~実際の現場からの私家版のその後の展開・何を考え何を残そうとしているのか~

山本厚生: 「ひと断ち折紙」-実演、解説、やってみる、創作-

【参加費】A日程(2泊参加)15,000円 学生10,000円

B日程(1泊参加)12,000円 学生8,000円

■次回世話人会のお知らせ

日時・場所: 未定(会員の方には後日、事務局よりご連絡いたします)

- ・生活文化同人の活動方針や、定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」ですが、世話人以外の方も自由に参加できます。(ただし、酒代などは自腹です。)参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■編集後記

- ・今年も、桜は早いのでしょうか。(飯島)

■会報編集局より

- ・会報原稿を募集しております。「私の近作」「主張」「旅の報告」「スケッチ」など何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。

◆2002年度事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南2-5-5-404
Tel : 048-432-8651. Fax : 048-432-8651.
E-Mail : nook@kjps.net

◆2002年度会報編集局 飯島克如 (まちづくりカンパニー・シーブネットワーク)

高松俊秀 (東京理科大学修士2年)
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-7YK 駿河台
Tel : 03-3233-2311 (代表) . Fax : 03-3233-1312.
E-Mail : kijijima@tama.or.jp

生活文化

seikatsubunka

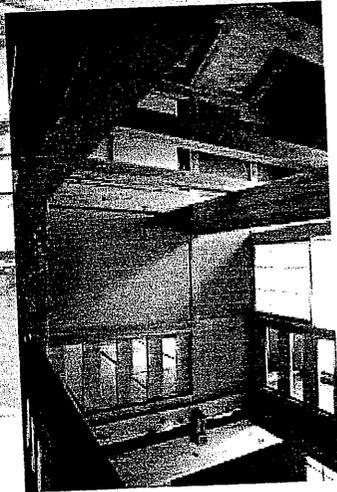
目次

- P 2... 「大平建築塾」へのお誘い
- P 4... 吉田桂二の木造建築学校生徒募集
- P 6... 第二回語る会報告「デザイン&マネージメント」
- P17... 贅沢な暮らしとは
- P18... 数奇屋コレクション

生活文化同人会報

2003年6月 No. 61

家のかたちを決めるもののひとつには、住み手の生活が当然のこととしてあります。同時に、素材から見えてくる家のかたちということも大切にしたいと考えています。今回は、それをテーマに設計した数件の木造住宅のスライドを見ていただきながら、伝統工法を規範とした架構上のささやかな試み、および建具デザインのバリエーションもご紹介したいと思います。



2003年第3回「語る会」のお知らせ

語り手：松本昌義

テーマ：木造住宅のささやかな試み
—素材そして架構・建具—

場所：谷中・市田邸

日時：2003年6月20日（金）18：30より

■「大平建築塾」へのお誘い

学生時代に学校で木造建築術について学んだ人がいるだろうか。

設計課題においても只の一回程度に過ぎないであろう。

これは今に始まったことではない。恐らくは明治に大学教育が始まって以来のことであろう。木造は大工に任せておけばよい。と教師達は言っていたはずである。

しかし今、機械で住宅を造ることが普遍化し、大工の熟練度に依存してきた伝統技術は殆ど滅亡寸前の危機的状況にある。

木造建築に依拠してきた者にとっては、この状況にどう立ち向かうべきか。伝統技術は従前のものを造ることで成立してきたが、それを、従前のままの建物を造ることのみに生かされるのであれば、それは博物館行きの技術になりはてるであろう。

ここに現在の「保存と創造を結ぶ」命題がある。このテーマをより広範に深めてゆくためのきっかけを、この「大平建築塾」に期待したい。

吉田 桂二

建築サマーキャンプ 「大平建築塾」 民家の生活が原体験できる大平宿

長野県飯田市から西に約20km、山道の大平街道を妻籠に向けて走ると、峠の宿場町「大平宿」があります。大平宿は、1970年の離村以降、無住の集落となっていますが、板葺き石置き屋根の民家が約20棟、群として残されている貴重な集落です。それらの民家に見られる「前土間・広間型」の間取りは、全国的にもめずらしい茶屋宿としての特徴を多く今も伝えるものとして、保存する価値が極めて高いと評価されています。

民家は使われ続けることによって初めて、本来の生命感と共に保存することができます。

「大平建築塾」は、大平宿の保存運動に関り続けるために、民家を積極的に活用しようという主旨により、生活文化同人の主催によって1994年から、年に1回開かれることになり、今年はその10回目です。毎回掲げられるメインテーマに基づいた基調講演や分科会が開かれますが、楽しい夜会講演や懇親会も用意されています。全国各地からの100人を超える参加者は数棟の民家に分宿し、食事はいろいろなどを使って自炊します。かつての民家の生活を原体験しながら、新しい出会いも期待できます。また、大平宿の民家は木造建築を学びたい人にとって、うってつけの教科書にもなるでしょう。

峠の集落「大平宿」の民家

建築塾への交通手段

- ・ 飯田駅までのアクセスは2種類
 1. 電車にて JR 飯田駅
 2. 高速バスにて 新宿から飯田駅まで飯田駅からはマイクロバスで送迎の準備があり。(詳しくは事務局までお問合せ下さい)
- 3. 宿場には広い駐車場もあり自家用車での参加もかまいません。

第10回大平建築塾の概要

1. 主催 生活文化同人
2. メインテーマ 「保存と創造を結ぶ」
3. スケジュール (予定)

期間 8月2日(土)～8月4日(月)

8月2日(土)	午後 12:00	受付
	1:30～2:00	開宿式
	2:00～3:00	大平塾の見学
	3:00～5:00	木こり体験 世界の景観模型展(予告編) (景観模型工房 盛口正昭さん)
	夜 6:30～8:00	夜会公演 (高橋竹勇さん「津軽三味線」)
	8:00～	全体懇親会
8月3日(日)	午前 9:30～11:30	分科会1・2
	午後 1:00～3:00	分科会3・4
	3:30～5:00	基調講演(吉田桂二さん)
	夜 8:00～	各棟懇親会
8月4日(月)	午前 9:30～11:30	障子張替え、後片付け
	11:30～12:00	開宿式、総括、解散

3. 参加費

A日程(3日間参加)

一般 15,000円 学生 10,000円

B日程(前半または後半のいずれか2日間の参加の場合)

一般 12,000円 学生 8,000円

4. 基調講演

講師 吉田桂二(建築家) 「保存と創造を結ぶ」

5. 分科会 内容(予定)

- ・ 講師 宮越喜彦(建築家) 伝統的木造技術の課題と可能性
- ・ 講師 山本厚生(建築家) ひとたち折り紙の創作、実演
- ・ 講師 若手建築家グループ 建築家 吉田桂二分析
- ・ 講師 長谷川順持(建築家) 集落のデザインエッセンスを今に生かす

6. お問い合わせ

第10回大平建築塾実行委員会事務局 松本建築設計室 松本昌義

〒273-0031 船橋市西船 4-26-3-6

TEL/FAX: 047-433-5074 E-mail: mmatumo@d1.dion.ne.jp

まで、FAXまたはメールにてお願いします。

募集

■吉田桂二の木造建築学校生徒募集

木造建築学校～設計技法の修得～開校にあたって

20 世紀を環境破壊の時代であったと総括するならば、21 世紀を環境保全の時代にするのは必然である。

「自然素材を使った健康な家づくり」は既にその時代を拓くキーワードになっている。「機械でつくる家から手仕事でつくる家に還れ」という言葉も聞かれる。大工が手仕事で築きあげてきた日本の木造建築は、比類のない高度の技術水準をもって優れた家を造ってきた。それをなしうる大工も消え去ったわけではない。

しかし、そうした技術はもはや普遍化することが困難な時代になっている。機械生産する家はローコスト化することによって、日本の家の総体を粗悪化した罪は絶大だが、誰もが家を持てる状況を現出させた功績はある。

これからの家づくりの目標は、粗悪化した家の現状を克服して、環境保全に結ぶ良質な家を、歴史的に蓄積されてきた伝統技法を継承しつつ、新しい時代の普遍的なものとしていかに創造するかにある。このことは木造建築に関わっている人間にとっては、職能上の責務といっても過言ではない。

今回開校される木造建築学校は、そうした使命感を持った方々にご参集いただきたい。本校の教育目標は、町づくりに結ぶ家づくりの実務的技法の修得におく。

吉田 桂二

「吉田桂二の木造建築学校 ―設計技法の修得―」募集要項

- ・講師 吉田桂二（建築家／連合設計社市谷建築事務所代表取締役）
- ・主催 連合設計社市谷建築事務所
- ・期間 平成15年7月～平成16年3月合計5回 午後13:00～17:00
- ・対象 建築の実務に携わっている方で、課題を履修し、全講座に参加する意志のある方
- ・目的 木造建築の設計技法を修得する。
- ・会場 連合設計社市谷建築事務所内会議室
- ・定員 30名（先着順）
- ・募集期間 平成15年5月20日～6月20日
- ・会費 入学金10,000円+受講料40,000円 計50,000円（一括前納）
- ・申込み 問い合わせ 連合設計社市谷建築事務所内事務局
担当 戎居連太（えびすい れんた）、岸未希亜（きし みきあ）
Tel. 03-3261-8286 FAX. 03-3261-8280
E-mail : rengou-sekkei@tokyo.email.ne.jp

【年間スケジュール】

第1回 平成15年7月19日 13:00～17:00

- ・ 開講式 ガイダンス 課題①の説明 『日本の家の真価をとりもどすために』

第2回 平成15年9月6日 13:00～17:00

- ・ 課題①の講評及び課題②の説明 『架構は間取りに優先する』

第3回 平成15年11月22日 13:00～17:00

- ・ 課題②の講評及び課題③の説明 『架構体をつくるシステム』

第4回 平成16年1月17日 13:00～17:00

- ・ 課題③の講評及び課題④の説明 『多目的生活空間』

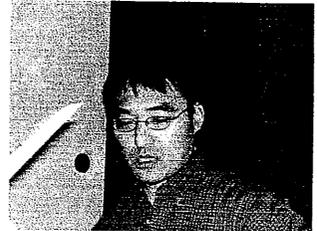
第5回 平成16年3月20日 13:00～17:00

- ・ 課題④の講評 『建築に風土を恢復する』

■ 『デザイン&マネージメント』 飯島克如

第二回の「語る会」は、アトリエヌックの新井聡さんを語り手として4月11日に行われました。

今日はデザイン&マネージメントと言うことでお話します。私は連合設計社に12年勤めまして、99年に退社して埼玉の戸田で、夫婦二人で設計事務所を開き、今、ちょうど五年目になります。連合設計社時代に高橋輝夫さんと言う方がいたんですが、私はその方に非常に良く教えていただきました。高橋さんは積算協会で有名な方で、設計の前段階の概算をととも研究していました。よく高橋さんは「コーヒー飲む間に概算はできちゃうよ」といって、簡単な数字を入れるだけで概算できる見積を作っていました。建築の床面積と、屋根の面積等の簡単な数字を入れるとあっという間に単価が出るものでした。これは普段使われている坪いくらと言うやり方よりは信頼性があると思います、私はこれをしばらく使っていました。



しかし、この見積は部分別見積です。屋根とか外構とか窓とか、建築の部分ごとの見積です。一般的に工務店が出す見積と言うのは工種別です。左官工事いくら、アルミ工事いくら、ガラス工事いくらとなっています。つまり、自分で出す概算と、実際の見積とリンクしないのです。単価的には全額出ますが、実際の見積と合わないのので、調整のしようがないのです。だからこれだけでは満足できなくて、もう少し、踏み込んで実際の見積に近いものを出したいと思ったわけです。

設計は見積を出すと予算をオーバーしていることが多いです。工務店に見積を出して、出てきたものが近ければ「当たった」、遠くなると「外れた」となります。でも、これでは設計の金銭的な裏づけがなく、その上、手戻りが多くなります。そして、設計変更、仕様変更します。それでも合わないときには、工務店の出精値引きをします。すると、例えば工事が始まってからキッチンのグレードを落としたのに、事前に出精値引きをすると前から引いているということでこれ以上は下げられないということが起こります。つまり、工務店から出てくる見積がブラックボックスとなってしまう、その理由を説明しきれなくなってしまうのです。

それだけではありません。現場で変更する時、職人とは収まりの変更はできますが、お金の話になると、職人さんは「現場監督に聞いてくれ」、現場監督は「社長に聞いてくれ」と言うことになります。そのために工事が停滞してしまう。

建て主はいくらお金が出て行くのか不安になる。私達も、建て主さんになかなか明快な説明ができない。それが、とてもストレスでした。だから、その調整をもっと初期段階からやりたいと思ったのです。

二年前にシティ環境の高橋さんに声をかけていただき、高橋さんの下で、施主直営方式の家作りを体験しました。物件は小舞を書いて土壁をやるという家でした。基本設計は、シティ環境が7割でアトリエヌックが3割。実施設計は100%アトリエヌックでやりました。監理は原則うちがやって、要所で高橋さんに見てもらいました。工事は高橋さんが使っていた業者にやってもらいました。

プロジェクトの最初、高橋さんに、今まで私がやっていたやり方での概算見積を見せました。けれど、「こんなじゃわからない。ぜんぜん信用性がない。」と、高橋さんは全部工種別に振り分けて見積を出したわけです。これを変更したらいくら、材料いくら、手間いくらと言う風に、優秀な現場監督さんと同じことを設計者の高橋さんがしたのです。僕らにとってこれは驚きでした。そして、これだと思ったのです。それから、施主直営方式によるコストマネジメントをするようになったわけです。

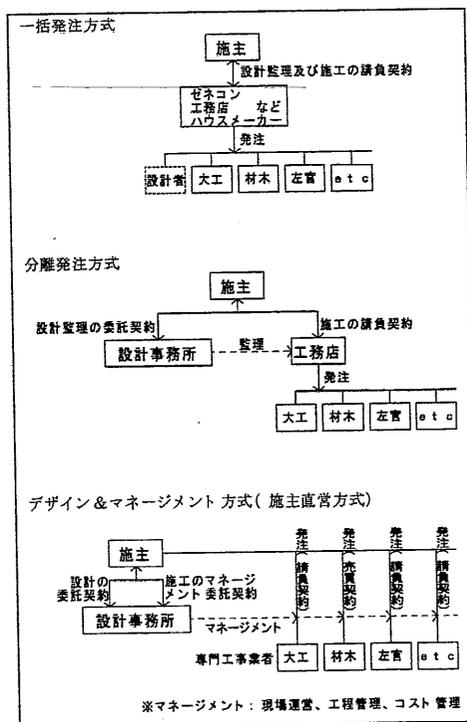
これが発注方式の概念図です。【図1】

よく建て主さんが頼む方式は、施主から、ゼネコンなり、工務店、ハウスメーカーなどに直接頼む一括発注方式です。工務店やゼネコンから大工とか左官とか各職人に発注します。建て主さんは、工務店等と一対一の付き合いで、設計施工の請負契約です。

私達が今までやってきたのは、分離発注方式です。設計事務所に設計を依頼し、図面を書いてもらって、工務店に工事をしてもらいます。工務店は先の表と同じに、各職人に工事を発注します。一般の設計事務所がやっているスタイルです。

そして、今、アトリエヌックがやっている施主直営方式（CM方式）です。施主が設計事務所に設計を依頼します。そして、設計事務所は設計のほかに工事をマネジメントします（実はマネー

ジメントは誰がやっても良いんです。アメリカでは独立したCMがいます）。工事の発注元はすべて建て主です。建て主さんが大工さん、左官屋さん、材木屋さん、それぞれ発注します。ただ、一般の建て主さんは、お金を払うことができて、工事をする事はできません。それを設計事務所が代行し、見積をチェックし、工事を管理します。



【図1】発注方式の概念図

施主直営方式では、建て主さんがいろいろな形の契約を各業者と直接結びます。設計等の委託契約、大工等の請負契約、材木等の売買契約、大体この三つの形があります。売買契約は買い手が品物を引き換えに、それと同等の金額を支払う契約です。ものとお金を直接交換するだけです。請負契約はこのようなものをいつまでに完成してくれたらいくら払うと言う契約。ものがないから完成を約束する契約です。委託契約は、引き受けたことについて、できるだけやってくれば、それに対して対価を支払う契約です。ものがないから、代行行為に対してお金を払います。具体的には、注文書と請け書と言うものを交わしています。これは、工務店と同じやり方です。

設計事務所は工程管理と、コスト管理をします。当然、工事の種類が増えれば増えるほど、この仕事量が増えます。今回紹介する住宅は非常にお金が厳しくて、工事種目を減らしました。ただ、それをやりすぎると、結果的に分離発注と同じになってしまいます。この時はお金がないために工種を減らして、さらに全体のグレードを落としたんですけども、それでも足りなくて設計料も落としました。つまり工種を調整することがマネージメントの重要な仕事の一つとなります。例えば、電気工事の中で今、照明器具を別にしていきます。最近では電気の安売りをやっています。まとめていくらと発注すれば現場まで持ってきてくれますので、電気工事は電気屋さんに取り付ける取り付け手間だけです。

支払いも直接建て主さんが行います。ただ、「工務店との付き合いが多いから直接では困る」「工務店のような支払方法でなくては困る」と言う間屋さんもあります。照明器具がそうでした。その時は、一回事務所を通していきます。建て主さんからアトリエヌックにいったんお金を入れて払う場合もありますし、建て主の名前で入金があったらそれは私からの入金なのでよろしくお願ひしますと頼んだこともあります。

質問：建て主さんからお金が払われるとしても施主直営方式と工務店とでは、価格を抑える力は、工務店の方がある。だから、施主直営方式では、価格は明らかになるが、トータルとして本当に安くなるのかと言うところがある。例えば、分離発注方式の時、設計事務所が 10%、工務店さんが 15%の利益、経費をみる。そうすると、経費の合計は 25%。一括発注方式では、ハウスメーカーは 30%、40%。分離発注方式の時でも、一括発注方式よりはるかに安く勝っている。分離発注方式に勝つということができなくては。労力を払う意味も出てこないのではないか。

例えば、3千万円の工事をした場合、20%として工務店の設計施工でもらった場合、600万です。アトリエヌックでは名目上設計とマネージメントで 15%にしています。そうすると、450万です。150万安い。もちろん各業者の経費をみんな見えています。しかし、これをやることがあくまでもローコストだけを狙っているのではないし、絶対安くなるかというと、絶対ではありません。ただ、同価格のものよりは、多少クオリティが高いものが手に入ります。例えば、ハウスメーカーに同じ坪 60万円で頼むよりも、いい物ができます。

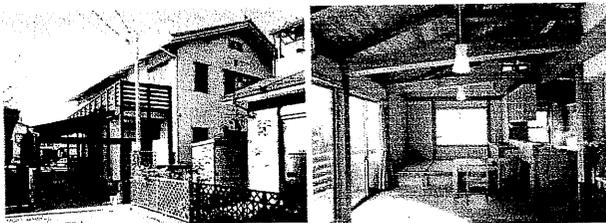
それから、工務店の場合は、今回は儲けさせてやる、今回は我慢してもらおうという駆け

引きがすごくあると思います。しかし、自分がやっているこれにはそれが一切ない。一発勝負です。ただ、その工事の間だけではなくて、建物にはメンテナンスもあるから、「そういうことを頼めるような人間関係を築きなさい」ということでやっています。

質問：建て主さんには、あなたにもリスクがあるんだよということは何を言うのですか。

当然いいです。どちらかというと施工直営方式はリスクの方が多いかもかもしれません。だから、無理強いはしないんです。

非常にレアな部分ですが、自分たちが施工直営方式の中でコストをどうやってマネージメントしているのかを狭山の家を事例に紹介します。



これは基本設計の段階で一発目の

【表1】建築費概算見積

木造2階建		延べ床面積50.23坪+ロフト3.5坪	消費税込み
共通仮設	仮設トイレ、養生、残材処分、電気水道		300,000円
基礎	高基礎		2,500,000円
足場			400,000円
大工工事	52坪×8人工		10,400,000円
木材			7,370,000円
建材	断熱材、ボード類等		1,000,000円
板金屋根			1,000,000円
左官	珪藻土材料、リシン掻落し		1,500,000円
木建	玄関ドア、内部建具		1,500,000円
ガラス	サッシ		1,500,000円
内装	クロス		400,000円
塗装	材料費のみ		200,000円
タイル			200,000円
畳	9帖		150,000円
キッチン	2セット		1,000,000円
家具			600,000円
運搬、レッカー			300,000円
電気			1,500,000円
給排水衛生			2,500,000円
ガス			200,000円
合計			34,520,000円
3452万円÷52坪			坪当 663,846円/坪
外構	カーポート屋根、土間、ポーチ階段、門		2,000,000円
合計			36,520,000円

見積です【表1】。一個一個、板金にいくら、左官工事にいくら、木建具いくらと工事費を出していきます。この基本設計と実施と最後の清算とをまったく同じ項目で出すわけです。

建築工事に付随して別途200万円ぐらいかかります【表2】。水道の引き込み工事とか、解体とか、ここでは、60万円で見積もって実際100万円ぐらいかかりました。そのほかに税金やローン手続き、引越し代、地鎮祭、近

【表2】総事業費計算書

1. 建築工事費		
1) 本体工事費(消費税含む)		34,520,000円
2) 別途工事(消費税含む)外構、植栽工事		2,000,000円
3) 建築確認申請料		17,000円
4) 水道引込工事及び負担金		0円
5) 敷地測量費		0円
6) 地盤調査費		0円
7) 設計料		3,000,000円
8) マネージメント料(現場運営・工事費管理)		1,000,000円
9) 既存建物解体費		600,000円
小計		41,137,000円
2. 税金・住宅ローン・登記手続費用		
1) 印紙税		20,000円
2) 登録免許税		
・ 新築建物保存登記		
・ 評価額(6.9万円/㎡×160㎡)×0.15%		
* H.11年度戸田認定価格		16,560円
・ 抵当権設定登記(公庫の場合は無料)		
・ 借入れ金(2000万円)×0.1%		20,000円
3) 不動産取得税		
・ (固定資産税評価額2000万円-1200万円)×3%		240,000円
4) 登記手数料(司法書士、土地家屋調査)		
・ 表示約9万円、保存4万円、抵当権約3万円、減失登記約4万円		200,000円
5) 融資手数料		50,000円
6) 特約火災保険料		30,000円
7) 団体信用保険特約料(毎年)		50,000円
8) 保証協会保証料		200,000円
小計		826,560円
3. その他		
・ つなぎ融資		0円
・ 引越費用		0円
・ 地鎮祭、上棟式費用		200,000円
・ 近隣挨拶、新築祝い費		100,000円
・ カーテン・家具等		1,000,000円
小計		1,300,000円
総費用合計		43,263,560円

隣挨拶に家具等もあります。それ等を合算して総予算を見積もります。そして、本当にここまで払えるのかと建て主さんに確認します。皆さんぎりぎりでお金を用意しているから、こういう風に税金やほかの費用がかかることを建て主さんに言ってあげないといけません。そして、このあとに、二回目、三回目と、基本設計と併せて金額をどんどん修正していきます。

質問：建築費と総事業費との差額が600万位あるけれど、絞れないのですか。

あまり絞れないですね。設計料を絞るとしても、マネージメントまでやると、半年近くぴったりくっついてやりますから、これくらいもらわないとできないと思います。後は、引越しとか、家具とで絞ります。例えば、家具は今あるやつでやってくれとか。

事務所のフィーは設計とマネージメントを別々に書いています。設計料としては10%欲しいですが、マネージメントをいれて、400から450ぐらいあれば何とか半年いけます。

それよりも、「工事の大きな金額を何とか出せ」と言います。ここで仕様が決まってきました。例えば、珪藻土の材料を使いたい材料代しか出ないとか、仕上げはリシン搔落としぐらいだとか、これを本当にプロに頼むのであればあと100万出して欲しいとか。

感想：うがった見方をする建て主だと、工務店さんに発注してそれよりも良いものになるのか悪いものになるのか、マネージメント料の100万円を出すことによって200万300万の価値があるものができるのか、そろばんをはじく。

はじくでしょう。その辺は建て主さんと設計者との信頼関係しかないです。ただ、自分は工務店に一括に頼むよりいいものを作ってやるという自信はあります。

基本設計で実際に見積をだして、設計と見積を何回も修正して、「これくらいの予算でスタートしましょうか」とはじめます。

そして、全部設計を終わって、建て主さんがやりたいという意味も含めて改めて工事費を見積もります【表3】。見積は、建て主さんの意向や要望を入れているので基本設計よりもオーバーしますが、最初

【表3】建築予算書(見積集計時)

工事区分	備考	見積額(初回)
1 共通仮設	仮設トイレ	55,650
	養生、残材処分	192,000
	清掃、美装	50,000
2 足場	足場シート含む	414,372
3 基礎	本体	2,463,000
	外構	592,042 ①
4 大工	本体	368人工
	外構	30人工
5 材木	本体	6,575,398
	外構	794,602 ③
6 建材	断熱材・ボード	962,766
	雜金物	117,234
7 瓦		1,031,000
8 板金	本体	525,651
	外構	473,046 ④
9 左官		2,900,000
10 ガラス・サッシ	ガラス・サッシ	外壁コーキング含む
	トップライト	取り付けは大工工事
11 サビシパネ		51,950
12 木製建具	本体	179,025
	外構	1,743,000
13 内装・経師	内装	壁紙
	経師	建具紙貼
14 塗装	材料のみ	185,000
15 タイル		138,600
16 タタミ		100,000
17 キッチン		腰・床タイル材工、浴槽・排水溝2箇所据付
		9帖
18 運送・レッカー		タカスタンダード取付け込
	構造材運送	
	造作・板材運送	
19 電気	レッカー	4日
	照明器具	
20 給排水		159,600
21 ガス		1,415,231
22 家具		取り付けは佐藤商会
		水道取出し含む
		246,330
		2,911,387
		148,680
		0
		合
		38,444,847
外構工事合計	上表に計上①+②+③+④+⑤	2,826,740

から工種別で細かく拾っているのが、最初の見積に近いものが出てきます。それで、一度建て主さんに会って、これはやめましょうか、これは追加しましょうかという話を、時間がかかりますが、一個一個話をします。

この見積では、アトリエヌックが業者に代わって拾うところもあります。大工の見積や材木がそうです。大工手間は大体坪いくらで拾っています【表4】。構造躯体と造作とで7人工ぐらいで344人工。その他に家具やバルコニーの手すり等で、54人工になります。それをプラスし、トータルで、398人工で「いかがでしょうか」と、大工さんに確認します。1人工は職人さん

に一人当たりの一日の仕事量を示します。1坪7人工かかるということは、大工さんが、床、壁、天井、屋根を作って一坪の空間を一日で作るのに大体、7人かかりますと言うことです。前は8人でした。7人にしたのは、材積を減らしたからです。材積が多いと当然、削る手間やきる手間が多くなりますが、それを減らしたから、7人にしたわけです。トータルの398人工を坪数で割ると大体8人工ぐらいです。これを持って大工さんと交渉するわけです。最終的には、これに1日当たりの手間賃(大工手間は地域や職人さんによって変わります)と経費と消費税をかけて支払います。

この仕事は非常にお金がない中でやったので、見積をみて、この中でできるものは建て主さんにやってもらいました。例えば、サッシの防水テープ貼り等はガムテープを貼るだけですから、これぐらいは建て主さんにもできる。そういうのを、チョコチョコと日曜日にできる範囲で手伝ってもらいます。

その他にアトリエヌックでやらなくてはいけないのは材木の見積です。構造材で、何寸角が何本なのか、バルコニーでいくらなのか、材料を全部拾います。造作材についても全部拾います。構造材はあまり見積に狂いはありませんが、造作材は狂いが出てきます。だから、ゆとりをみないといけないのですが、それが難しいところです。大工さんが木を見

【表4】大工手間明細

延床面積(矩体)	49.12坪×7人工	344 人工
2F ロフト+洗面天井		2
2F 洗面台		3
2F 食器棚		4
2F たたみコーナー・地袋		4
2F デスクコーナー・飾り棚		2
2F はしご		1
1F 食器棚		4
1F 玄関のこ台・階段手摺		2
外 バルコニー(2.77坪)・テラス(2.25坪)・階		16
外 カボット屋根・門扉		14
外 面格子		1
2F 吊戸棚		1
小計		54 人工
合計		398 人工

【表5】建築予算書(着工時)

工事区分	備考	見積額
1 共通仮設	仮設トイレ	55,650
	養生、残材処分	192,000
	清掃、美装	50,000
2 足場	雑ごみ処分費含む	414,372
	足場シート含む	
3 基礎	本体	2,463,000
	外構	428,242
4 大工	本体	368人工
	外構	30人工②
5 材木	本体	6,575,398
	外構	794,602
6 建材	断熱材・ボード	962,766
	雑金物	195,984
7 瓦		1,031,000
8 板金	本体	333,501
	外構	473,046
9 左官		3,050,000
10 ガラス・サッシ	ガラス・サッシ	外壁コーキング含
	トップライト	取り付けは大工
11 木製建具	本体	1,757,700
	外構	204,750
12 内装・経師	内装	壁紙
	経師	建具紙貼
13 塗装		材料のみ
14 タイル		腰・床タイル材工、浴槽・排水溝2箇所
15 タタミ		9帖
16 キッチン1F		タカラスタンダード取り付け込み
	キッチン2F	タカラスタンダード取り付け込み
	洗面化粧台	タカラスタンダード
17 運送・レッカー	構造材運送	183,750
	造作・板材運送	73,500
	レッカー	4日
18 電気		1,298,923
	照明器具	取り付けは佐藤商
19 給排水		水道取だし含む
20 ガス		LPG敷地内・屋内
	合計	37,607,156
外構工事合計	上表に既に計上済	2,662,940
	①+②+③+④+	

てはじくこともありますから、余裕を多くみたいですが、トータルの金額もあります。この辺は経験豊かにならないと難しいです。なかなか合いません。

この家では造作、板材、構造材も含めて1坪0.54㎡で木の量を抑えています。ただ、坪数が減るほど木の量は多くなりますし、使う人は1㎡使う人もいます。「今回は少なくしたから人工の見積を少なくしてよ」と、前のデータを見せながら大工さんと交渉をします。

そして、プラスマイナスしたものを全部出して、建て主さんの承認を得て、工事をスタートします。この時はトータル3,760万円でスタートしました【表5】。

そして、これを一番上にもってきて、そのあとに各工事から出した見積書を全部ひとつのファイルにして、それを図面とファイルをもって現場へ行って、何か変更があった場合、それが書いてあるのかないのかを全部チェックするわけです。

そして、工程表を作って、建て主さんと支払いと、作業の確認します【表6】。

【表6】工程・支払計画表

	2001年		2002年									
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
設計監理 マネージメント	基本設計終了 実施設計	見積 マネージメント	図説		工事監理 マネージメント							竣工
申請登記	公庫申込	確認申請 確認				金融公庫 中間検査						表示登記 保存登記
施工			既存建物解体 撤去、加工 補強、造り方 材木劣化確認工事 仮設電気 仮設水道		正月休み 上棟式	瓦葺屋根 サッシ 板金 設備配管 電気配線 ガス配管	造作工事			パネロー・カーポート工事		竣工 建具硝子 左官仕上塗 クロス 外構基礎 設備器具取付
契約 支払	設計契約		工事契約(大工、材木) 第1回目支払 大工手間 253万 材木代 737万 基礎工事代 250万 金物、塗料 10万 運送 18万		中間支払 大工手間 253万 瓦工事 103万 サッシ代 161万 水道取付 40万 ガス工事 15万 トグライト 6万		大工手間 253万					精算支払 大工手間1253万 電気、水道16万 左官 305万 ガラス 34万 外構基礎 40万 板金 81万 その他 533万 1662万
	工事代金		890万	278万		578万		253万				
	設計料 90万	確認申請料、4万	解体費用 105万 設計料 150万 マネージメント料 60万		上棟費用50万	中間検査料、5万						設計監理料 60万 マネージメント料 40万 登記費用 20万
備考			仮住まい開始	構造材稀薄塗装			公庫中間金受取			パネロー・カーポート構造材塗装		床板ワックス 引越し

普通、工務店に頼んだ場合では、契約時、上棟時、中間、竣工、大体4回ぐらい分けて払いますが、施主直営方式では各専門業者ごとの分離発注なので、支払いは、それぞれ工事が終わるごとにお金が発生します。だから、「この場合2月に578万ほどかかりますが、大丈夫ですね」と工程表を使って、建て主さんに確認します。この物件は、まだ少ない方です。今やっている物件ではもっと細かく支払いが発生しています。

それと、構造材の柿渋塗り等、建て主さんにやってもらう作業の確認に工程表を使います。それに図面をつけて、「工事がこんな風に進むので、お金と建て主さんの仕事が発生します」と建て主さんと確認します。これで着工になります。

工事が全部終わると、最終時の見積書と請求書を元に、増額がいくらで、そのオーバーした理由は何だという内容を一つの表にして、建て主さんに説明する事をマネージメントの最後の仕事にします【表7】。この時は、合計で14万上乘せになりました。追加工事が少ないのは、途中で、これはやるのかやらないのかということ工事前に厳密に決めているからです。大体追加工事もグレードがアップするという内容が多いです。その金額も最初に出ているわけです。だから、スムーズに職人さんとお金のお話も当然できるし、現場での収まりの話もできるので同時にすべて解決します。

ここまでできればコストプランニングが非常に明快なので、現場での金銭的なストレスはないわけです。ただ、建て主さんに説明しなくてはならない。これは手間ですが、ちょっと変更して追加工事が出ても必ず説明します。

【表7】 建築予算/決算書(竣工時)

工事区分		着工時見積額	請求額	増額	要因
1 共通仮設	養生、残材処分	192,000	183,876	-8,124	
	清掃、美装	50,000	50,000	0	
2 足場		414,372	414,372	0	
3 基礎	本体	2,463,000	2,970,000	78,758	土間コン拡大、通用門扉(雑金物より移行)
	外構 ①	428,242			
4 大工	本体	9,350,880	10,163,580	50,400	面格子追加、エアコン下地大工手間
	外構 ②	762,300			
5 材木	本体	6,575,398	7,507,444	63,944	柱材・床材不足+137444、松梁サービス▲55600、運賃サービス▲73500
	外構 ③	794,602			
	造作・板材運送	73,500			
6 建材	断熱材・ボード	962,766	1,056,258	93,492	補足材・パイン集成材不足分
	雑金物	195,984	120,630	-75,354	
7 瓦		1,031,000	1,030,000	-1,000	
8 板金	本体	333,501	778,365	-28,182	貫上板金取止め、雪止め追加
	外構 ④	473,046			
9 左官		3,050,000	3,050,000	0	基礎立上りモルタル揃引き・勝手口床コテ仕上げ及び半土土はサービス
10 ガラス・サッシ	ガラス・サッシ	1,951,771	2,057,040	105,269	
	トップライト	51,950	51,950	0	
11 木製建具	本体	1,757,700	1,962,450	0	
	外構 ⑤	204,750			
12 内装・経師	内装	130,726	241,290	-28,036	トイレ壁紙取止め、襖紙支給
	経師	138,600			
13 塗装		100,000	111,673	11,673	
14 タイル		210,000	231,000	21,000	石貼手間
15 タタミ		141,750	141,750	0	
16 キッチン1F		442,575	1,136,220	78,136	キッチングレードアップ
	キッチン2F	533,216			
	洗面化粧台	82,293			
17 運送・レッカー	構造物運送	183,750	204,750	21,000	2回増
	レッカー	159,600	159,600	0	
18 電気		1,298,923	1,350,000	51,077	部材・工費+109,550、イナ-和機 具施主支給▲46,200、値引▲
	照明器具	246,330	256,200	9,870	照明変更
19 給排水・衛生		2,618,301	2,390,750	-283,201	水道取出し不要、器具減額
	仮設トイレ	55,650			
20 ガス		148,680	135,450	-13,230	
		37,607,156	37,754,648	147,492	
外構工事 合計 ①+②+③+④+⑤		2,662,940			

質問：業者さんの反応はどうか。

業者さんは慣れてはいないですが、もらう金額さえちゃんとしてもらえれば、そんなに苦情もないです。かえってその方がやりやすいという方もいます。

感想：例えば、遠い所でやることになった場合、業者が難しい。実際問題どうやって探すのという話になる。

今、青梅でもやっているのですが、ちょっとつらいです。あまり遠くまで行くと業者選択も難しい。埼玉在住なので千葉ぐらいならば何とか行きますけれども、秋田とかでやってくれといわれるとこの方式では無理です。ただ、私がやっているやり方はこれだけではないし、施主直営方式はリスクがあるからできないという方にはお奨めしません。分離発注方式もやはり良いところはあります。

最後にメリット、デメリットの話をします。

建て主さんのメリットは、コストが透明になるということです。それと、同じ金を出しても、少し品質の良いものができる。逆にいうと少しローコストでできる。

それから、建て主さんが建築に積極的に参加して運営できるということです。自分で左官の壁を塗ったり、職人さんをチョイスできるわけです。

しかし、デメリットもたくさんあります。まず、最終的な責任は、全部建て主さんが負わなくてはいけないということです。建築中の盗難、火災、専門業者の倒産、例えば左官屋さんが倒産した時の被害が建て主さんに及ぶことがあります。原則的には、工事の時に事故が発生して、誰かが何かを壊した場合、例えば、障子を設備屋さんが工事の最中に破いた場合、設備屋さんが払いますが、誰が壊したか不明というような状況になった場合、建て主さんが支払います。一括発注方式や分離発注方式の場合、工務店さんが経費の中から出して直しますが、それが建て主さんのリスクになります。その対策として、建設工事保険に入ってもらっています。建設工事保険というのは工務店が良く入るもので、建築工事ひとつの物件に入るものです。ちょっと普通の保険よりも高く、トータルの工事金額によって保険の金額が決まります。大体3千万円以上の工事で大体6万円くらい、一年間くらい有効です。ただし、いくら以上の損害なら払うという免責事項があります。大体10万円です。10万円以下の災害とか、盗難とか、事故には払ってくれません。問題は、10万円以下の事故や損害が発生するかどうかというのが読めないことです。

この物件ではガラスが割れる事故がありました。その時は、建て主さんに原因を説明して建て主さんが払いました。ガラスですから、当然10万にはならないわけです。

しかし、工事保険を使うことを薦めるのではなく、そういう風にならないことを伝えなくてはならないと思っています。ガラスが割れた時にも、「直営工事の場合は建て主さんにお金が発生してしまうから、みんな気をつけてくれよ」と各業者に言いました。これからは文書に書いて説明しようかとも思っています。

■竣工後のアフターサービスが発生するような場合はどうするのですか。

今、品確法でも瑕疵は10年といわれています。注文書請け書の時に、「1年間に限っては、具合の悪いところを直しに来るように」としています。ただ、部分保証の域は出ていません。建築瑕疵というのは部分的なものは少なく、例えば、照明器具が切れたけれども、その原因が、照明器具なのか配線なのかそれが判らない時もあります。だから、あまり分解するとコストは安くなるのですが、責任問題が非常に煩雑になります。今分解しているのは照明器具だけで、設備工事に関しては全部一式ですが、何処まで分解してもいいのかということは課題になっています。

感想：完成してからの保証の問題がすごく難しいと思う。1年くらいは職人に直してくれという話で済むのかもしれないけれど、5年先、10年先に問題が起こった時、誰が責任を取るのか、あなたの責任だということとを誰が判断するのか、それは難しいね。

建て主さんが積極的に施工に加わっているので、建て主さん自身がメンテナンスに詳しくなることはあります。例えば、塗装を建て主さんに全部やってもらうと、建て主さんが自分で最初からやっているからメンテナンスも自分でできるというのはあります。

支払いもその都度建て主さんに全部払ってもらいます。請求書を全部チェックして、建て主さんに送って、全部払ってもらいます。そういう手間がかかるわけです。

資金の調達の間でもデメリットがあります。今年の2月に国土交通省から融資にあたり、検査済書を活用しろという通達が出ました。施主直営方式では、こういう検査済書がない間でも各工事が終わる度にお金が発生するので、ある程度の資金がないと難しいです。つなぎ融資みたいなものはありますが、この辺のお金は持ち金でやるしかありません。かなり初期段階でもお金を使いますから、融資だけでやるとなるとなかなかできません。

感想：工務店が倒れたらみんな倒れるという方式ではないので、それをきちんと説明すれば、これはリスクが分散されているから、融資のする側からは何の問題もないと、頭の良い銀行員はわかると思うけどね。

でも、今のやり方では、最初に、工事契約書の提示というのがあります。施主直営方式の場合、そういうものは出せない。ですから、注文書請け書という形を作りました。それは、工務店がやる方式ですが、それを集めて、契約に嘘はないとしたわけです。注文書請け書で1500万円の書類を作って、公庫に提出しました。ただ、「それでいいよ」といってくるところもあるし、「だめ」というところもあり、担当官次第です。だから、原則的に最初に自己資金を持っていないとこれはできません。この場合は、二世帯住宅で、親がある程度お金を持っていたので、途中までは、親世帯の貯金で払いました。ここで、中間検査と書いてありますが、ここで公庫から借りました。公庫の検査が終わると、中間のお金が出ます。そこからは、子世帯のお金で最後の清算まで払ってもらいました。これらが建て主にとってのメリットデメリットです。

CM側からみると、初期段階から、コストコントロールを工務店任せにするわけではないから、自分の中で左官にお金をかけたい場合はかけられるし、かけないのだったら、か

けないような設計を最初からできる。コストコントロールができるからこそ、実施設計の時に手戻りが少ない。仕様も全部決まっているので。それに向かってやっている。その他に専門業者の選択ができます。

感想：建て主を見抜く目もとても必要だと思います。建築なんて文句をつけようと思えばいくらでも文句をつけることができます。そのあたりがすごく気になるところです。

建て主の中にはお金を払う時になるととたんに豹変する人もいます。だから、CM側もガードしなくてはならない。それは契約だと思います。契約でCMはどのような仕事をするのかをちゃんと明記すること。そうしないと、全ての責任を負わされる立場になると思います。コミュニケーションが一番大切ですが、同時に自分をガードする方法をきちんと構築していかないとはいけません。

質問：もう工務店は要らないですか。

そんなことはないです。施主直営方式は、建て主さんが事業主になってもらわなくてはならないわけですから、このやり方は建て主さんが賛同してくれないとできません。これを主にやっていきたいとは思いますが無理強いはできません。それに建築はとてもローカルで国それぞれで違うから、日本の場合はゼネコン等の一括発注のやり方が根強いと思います。分離発注方式も明治入ってからです。

これを始めたのは、今まで、設計をしても見積でオーバーしたから工事をやめたという物件が何件かあって、それがむなしくて、建て主に頼まれたプロジェクトを何とか最後まで完成させたいと思ったからです。

そして、働いてくれた職人さんには正当なお金を払っていきたい。

直営でやることによって、建て主さんが見えてくると思います。ハウスメーカーや工務店も「建て主さんのために仕事をしろ」という教育をしています。ですが人間そんなに簡単じゃありません。「誰がお金を出しているのか」ということでは、やはり、ハウスメーカーや工務店の社長からもらっているんです。だから、社長のために仕事をしている。施主直営方式では建て主のためにやらないとお金をもらえないので、つくり手も、誰のためにやっているのかがはっきり見えてくると思います。だから、建て主さんの側からも、専門業者の側からも、本当に良い家作りができるんじゃないかと思っています。

■贅沢な暮らしとは・・ 中村文美

札幌の実家から東京にでてきて、今年で8年目になります。そこでこの度は、私自身の上京後の心境変化を、話題にさせていただこうと思います。

上京して3年間、私には常に自分のルーツが薄れてしまうような寂しがありました。自分は「どさんこ・雪ん子」。日常生活、設計課題、常に頭の中には北海道サイズの風景・風土がありました。そして、自分の住む町に雪が積もらないことで、四季を感じる事ができず、1年がまわっている気がしませんでした。フヌケの冬、乾いたお正月・・・

しかし最近、市田邸という明治後期に建築された木造家屋での共同生活から、日々思うことがあります。——贅沢な暮らしとはなんだろう。

市田邸の冬—皆で4畳半の掘りごたつの部屋に集まりおしゃべりをし、食事、勉強、テレビ、アイロン、読書…各自気ままな時間を過ごす。熱いお風呂に入り自分の部屋でさっと寝る。温くなる季節、春—白蟻の心配をする。夢にも白蟻と鼠がでてくる。夏—暑くて眠れぬ夏の夜を越し、早朝庭に水を撒く。必死に錠を回して家中の窓を開け、風を通す。障子を外し、暖簾をかける。秋—久しぶりに出した炬燵に、皆ではしゃぐ。

RC造マンションの一人暮らしでは、味わうことのできない最高の贅沢でした。

北海道とは異文化の風土の中、こんな1年のサイクルもいいかたと、やっと思い始めたこの頃です。夏と冬の暮らし方が大きく変わる日本家屋での生活が、東京での日々の生活にはりあいをもたせ、私自身、四季の味わい方を身につけたのかもしれない。

そしてもう一つ、市田邸に住み始めてからみつけた「楽しみ」のなかに「もてなす気持ち」があります。とりつぎの間で、膝をつきお客様を迎え、お座敷のご案内する。そんなふるまいをしたことがない私でも、自然に体が動くのは、家の造りと雰囲気のおかげでしょう。もてなしは、ふるまいだけではなく、語る会でご存知、お料理です。普段は静まりかえった座敷ですが、集まった人々の色々な表情が溢れる会合、八百屋巡り、大皿料理づくりは、毎回の楽しみなのです。

…というわけで、次回も語る会でおまちしております。



昨年の大平建築塾では... 救急車騒動で、皆様大変ご心配をおかけしてしまいました。

大変遅くなりましたが、この場をお借りして全快の報告と、皆様への御礼をさせていただきます。

その日も私は、自分の健康を過信し「なんだろうこの不思議な腹痛は」と思っていただけでした。しかしそのうちに激痛となり、2日目の夕方に山を下ることとなりました。飯田市立病院へと運ばれ「腸閉塞」と診断されました。前日の夜、太鼓に合わせて皆さんと踊り狂っていた自分を思い出し、少し複雑な気持ちでした。手術が必要という医師の迅速な判断の結果、3週間ほどで退院することができました。飯田市立病院の病室からは飯田の山並みを眺めることが出来、看護師さんの「あれえ、〜だに?」という飯田弁会話が癒され、美味しい果物を同室の方々からおすそわけいただき、思いがけない贅沢な休養でした。入院中、お気遣いいただいた皆様、本当にありがとうございました。

* 東京芸術大学大学院美術研究科 文化財保存学専攻保存修復建造物研究室 非常勤助手
たいとう歴史都市研究会 事務局<この夏、特定非営利活動法人(NPO)申請へむけて活動中>

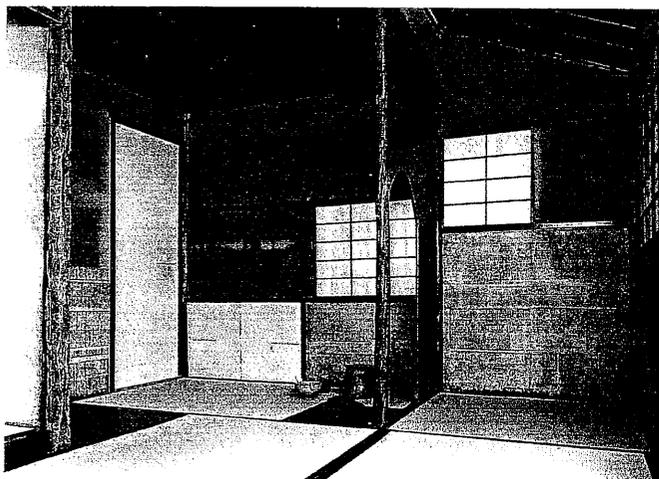
■数寄屋コレクション 岸 未希亜

私は名席と呼ばれる茶室を見ることが好きで、ここ一年ほどの間にも幾つか見る機会を得ました。どれも非公開のためなかなか見ることの出来ないものばかりですが、それゆえに見学できた快感というのもまた大きなものがあります。

茶室で国宝のものは3席あります。京都大山崎の妙喜庵にある2畳の極小空間「待庵」、京都大徳寺塔頭の龍光院にある「密庵」、そして今回見学してきた「如庵」もその一つに数えられます。

如庵は現在、愛知県犬山市の有楽苑（名鉄所有の庭園）内にありますが、もともとは京都建仁寺の正伝院にありました。しかし維持が困難となり、明治時代末に三井家に引取られて東京に移築され、さらに別邸のある神奈川県大磯に移築されました。こうして戦火を免れた如庵は今から約30年前に名鉄の所有となって現在の地に移築されています。茶室の移築は珍しいことではありませんが、これだけの遠距離を3度も移転するというのはきわめて珍しく、「旅」の終着が作者織田有楽の生まれた尾張であることも因縁めいています。

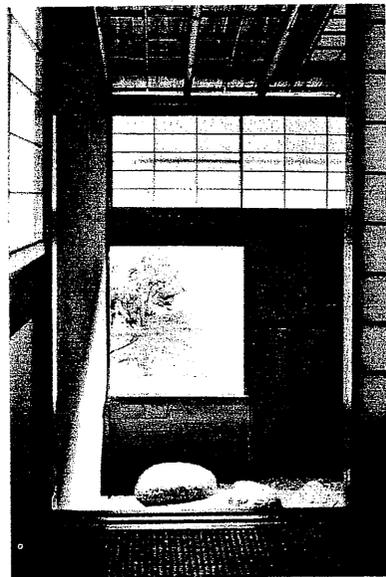
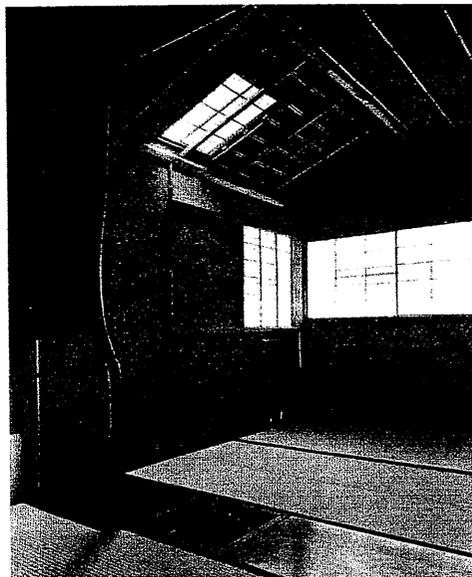
如庵は3月と11月に数日公開されるだけという原則非公開の茶室なので、これまで見学する機会に恵まれませんでした。今回上手くタイミングが合い、またすぐ隣にある犬山城（姫路城、松本城、彦根城と並んで4基ある国宝の一つ）も一度見ておきたかったため実現しました。



有楽は信長の弟で、武将として信長、秀吉に仕える一方、利休や秀吉が一目おくほど実力をもつ茶人で、慣習にとらわれず、独創的な作意をみせた人でした。この如庵にはそうした創意工夫が多く見てとれます。中でも有名なのは鱗板（うろこいた）とも呼ばれる三角形の板畳と、その背面に立つ斜めの壁です。平面的にも空間的にも直行する線だけで構成される日本伝統の建築空間にあっ

て、この斜めの壁は異彩を放っています。通常、茶道口とは別に給仕口が必要とされる構成であるところを、あえて設けなくて板畳を入れているのですが、この板を三角形にしたところが有楽の着想の面白さです。確かに斜めに歩くうえで入隅は無用ですが、そうした機能面の合理化を思いきった造形に表すことで、空間的な躍動感を生み出しているのです。斜めの壁と三角形の板があたかも人の動きを導く標識のようにも見えました。他にもふつう台目構えを形成する中柱を立てながら炉は向切りで、その先に火灯形に削り抜かれた薄い袖板があるのも先例がありません。古暦を腰張りに用いていることも有名で、これを生で見られたことには感動しました。

大徳寺玉林院には南明庵という牌堂を挟んで2つの名席が残っており、どちらも表千家七世の如心斎好みと伝えられています。一方は典型的な草庵茶室である「養庵」で、3畳中板上げ台目切りという面白い構えをしています。中板というのは点前座と客座の間に入れる板畳のことで、ちょうど炉が切れる幅になっており、この僅か1尺4寸の幅が亭主と客との間をゆとりあるものにしてしているのです。3畳台目よりも少しだけコンパクトな広さが絶妙で、中板という素材の変化が空間を引き締めているように思いました。また土壁に塗り込まれたすさが「養」をイメージさせることから名付けられたという養庵の壁は、本当にすさがびっしりと入っていて、利休以来の侘数寄の思想への忠実さが感じられました。もう一方は書院風茶室の「霞床の席」で、4畳半本勝手の席に取り付いた床の間がよく知られています。1間の床の間いっぱいには設けられた違い棚と背面の壁との間に隙間があり、ここに富士山の掛物を掛けると、違い棚が富士にたなびく霞のように見えることから名付けられたという何とも風流な茶室です。見学の際にも富士山の絵が掛けられており、霞のたなびく様を心ゆくまで堪能することができました。



最後は大徳寺真珠庵にある「庭玉軒」です。京都では秋と冬に社寺の特別公開を実施しているのですが、私は重要文化財茶室の公開を毎年チェックしており、真珠庵と前述の玉林院茶室はその機会を利用して見ることができました。

この庭玉軒の面白さは、外から見える躡口を入ると3畳弱の土間があり、二枚障子の貴人口から茶室に入るといふ珍しい構成にあります。この土間空間は内坪と呼ばれて飛び石が配され、蹲踞や刀掛を備えた内露地の形式をとっており、草庵茶室が一般化する以前の古式を復活させたと言われています。しかしまた、作者と伝えられる金森宗和が飛騨国の出身であることから、蹲踞が囲いの中にあるのは冬の寒さが厳しい土地の経験から生まれた、との説もあって興味深いです。写真集などを見ると、2畳台目という狭い茶室でありながら意外と広い空間に感じられたのですが、その中に身を置いてみると（スタッフが離れたときに少しだけ室内に入って腰を下ろしました）実は非常に狭いことに気がきました。その訳は、茶道口と給仕口を兼ねた引違い障子のせいが4尺5分しかないため、その上の小壁が大きくなって点前座の天井高が高く見えるという目の錯角でした。写真ではそのからくりにもままと騙されましたが、実見してみると図面や写真では解らないことが見えてくるということで、とても嬉しい気持ちになってしまいました。

また機会をみつけてコレクションを増やしたいと思います。

■2003年第3回「語る会」のお知らせ

語る人：松本昌義氏

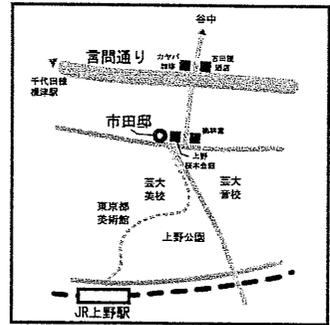
テーマ：「木造住宅のささやかな試み—素材そして架構・建具—」

日時 6月20日（金曜日） 午後6時30分より

場所 谷中・市田邸 東京都台東区上野桜木1丁目6-2

- ・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います。
- ・参加希望者は6月18日までに下記までご連絡ください。発表希望者も下記までご連絡ください。

◆事務局 新井聡（アトリエ・ヌック）
〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南2-5-5-404
Tel：048-432-8651. Fax：048-432-8651.
E-Mail：nook@k.jps.net



■大平建築塾事務局からのお知らせ

大平建築塾の申し込み受付を開始します。申し込み用紙を同封しております。内容の詳細については『「大平建築塾」へのお誘い』（本誌P2）をご覧ください。

【申込締切】2003年6月30日

【開催日】2003年8月2日（土）～8月4日（月）

【テーマ】「保存と創造を結ぶ」

【参加費】 A日程（2泊参加）15,000円 学生10,000円
B・C日程（1泊参加）12,000円 学生8,000円

■吉田桂二の木造建築学校生徒募集

2003年7月に、建築実務に携わっている方を対象に、吉田桂二先生を講師に木造建築学校が開校します。詳細は『吉田桂二の木造建築学校生徒募集』（本誌P4）をご覧ください。

【募集期間】2003年5月20日～6月20日

【会費】入学金10,000円、受講料40,000円（一括前納）

■次回世話人会のお知らせ

日時・場所：未定（会員の方には後日、事務局よりご連絡いたします）

- ・生活文化同人の活動方針や、定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」ですが、世話人以外の方も自由に参加できます。（ただし、酒代などは自腹です。）参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■編集後記

- ・六本木ヒルズへいきました。毛利庭園と周りとの差が大きすぎて、残したといっても…。（飯島）

■会報編集局より

- ・会報原稿を募集しております。「私の近作」「主張」「旅の報告」「スケッチ」など何でもOKです。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。

◆2003年度事務局 新井聡（アトリエ・ヌック）

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南2-5-5-404
Tel：048-432-8651. Fax：048-432-8651.
E-Mail：nook@k.jps.net

◆2003年度会報編集局 飯島克如（まちづくりカンパニー・シーブネットワーク）

高松俊秀（東京理科大学修士2年）
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-7YK 駿河台
Tel：03-3233-2311（代表）. Fax：03-3233-1312.
E-Mail：kijijima@tama.or.jp

生活文化

seikatsubunka

大平建築塾紹介特集号

目次

- P 2… 「大平建築塾」概要
- P 3… 分科会紹介
- P 7… その他のイベント等紹介

生活文化同人会報

2003年7月 No. 62

「大平建築塾」へのお誘い

学生時代に学校で木造建築術について学んだ人がいるだろうか。設計課題においても只の一回程度に過ぎないであろう。

これは今に始まったことではない。恐らくは明治に大学教育が始まって以来のことであろう。木造は大工に任せておけばよい。と教師達は言っていたはずである。

しかし今、機械で住宅を造ることが普遍化し、大工の熟練度に依存してきた伝統技術は殆ど滅亡寸前の危機的状況にある。

木造建築に依拠してきた者にとっては、この状況にどう立ち向かうべきか。伝統技術は従前のものを造ることと成立してきたが、それを、従前のままの建物を造ることのみに生かされるのであれば、それは博物館行きの技術になりはてるであろう。

ここに現在の「保存と創造を結ぶ」命題がある。このテーマをより広範に深めてゆくためのきっかけを、この「大平建築塾」に期待したい。

吉田 桂二

■「大平建築塾」概要

建築塾への交通手段

- ・ 飯田駅までのアクセスは2種類
 1. 電車にて JR 飯田駅
 2. 高速バスにて 新宿から飯田駅まで
飯田駅からはマイクロバスで送迎の準備があり。(詳しくは事務局までお問合せ下さい)
 3. 宿場には広い駐車場もあり自家用車での参加もかまいません。

第10回大平建築塾の概要

1. 主催 生活文化同人
2. メインテーマ 「保存と創造を結ぶ」
3. スケジュール (予定)

期間 8月2日(土)～8月4日(月)

8月2日(土)	午後 12:00	受付
	1:30～2:00	開宿式
	2:00～3:00	大平塾の見学
	3:00～5:00	木こり体験 世界の景観模型展(予告編) (景観模型工房 盛口正昭さん)
	夜 6:30～8:00	夜会公演 (山本竹勇さん「津軽三味線」)
	8:00～	全体懇親会
8月3日(日)	午前 9:30～11:30	分科会1・2
	午後 1:00～3:00	分科会3・4
	3:30～5:00	基調講演(吉田桂二さん)
	夜 8:00～	各棟懇親会
8月4日(月)	午前 9:30～11:30	障子張替え、後片付け
	11:30～12:00	開宿式、総括、解散

3. 参加費

A日程(3日間参加)

一般 15,000円 学生 10,000円

B日程(前半または後半のいずれか2日間の参加の場合)

一般 12,000円 学生 8,000円

4. 基調講演

講師 吉田桂二(建築家) 「保存と創造を結ぶ」

5. 分科会 内容

- ・ 分科会1 講師 長谷川順持(建築家) 集落のデザインエッセンスを今に生かす
- ・ 分科会2 講師 山本厚生(建築家) ひとたち折り紙の創作、実演
- ・ 分科会3 講師 若手建築家グループ 建築家 吉田桂二分析
- ・ 分科会4 講師 宮越喜彦(建築家) 伝統的木造技術の課題と可能性

6. お問い合わせ

第10回大平建築塾実行委員会事務局 松本建築設計室 松本昌義
〒273-0031 船橋市西船 4-26-3-6

TEL/FAX: 047-433-5074 E-mail: mmatumo@d1.dion.ne.jp

まで、FAXまたはメールにてお願いします。

分科会紹介

■第1分科会 集落のデザインエッセンスを今に生かす ……

レポーター：長谷川順持

「私の住んでいる街、あるいは町」という言い方があります。でも、「私の住んでいる集落」と表現されるひとは、御年配の方以外そう多くはないでしょう。それはなぜでしょうか。一方、私の住んでいる家、あるいは住宅、または住まいという言い方に対して、「私の住んでいる民家」とも言いませんね。それもなぜでしょう。民家というと、ある一定の風雪や年月をくぐり抜けてきた住宅を指すことが多いですし、集落も同様に新しい町には適用しないことばのようです。このあたりを、まず考えてみましょう。集落に絞って言えば、その「存在性」に係わる重要な何かが浮かび上がるはずですよ。

この分科会ではヨーロッパではイタリア、ポルトガルの集落をサンプルに、日本のいくつかの集落も参考にしながら、そこに存在する「姿」を味わいつつ、直観的に（直感ではなく）、かつ少し分析的にながめて見ましょう。それらを明日からの自身のデザインに生かしていく「視点」を、大胆に、恐れずに考察します。

現代建築家のなかでも単体建築を「集落的」に発想、創作している（と勝手に私が思っているのですが）幾人かの仕事も共に直観しましょう。

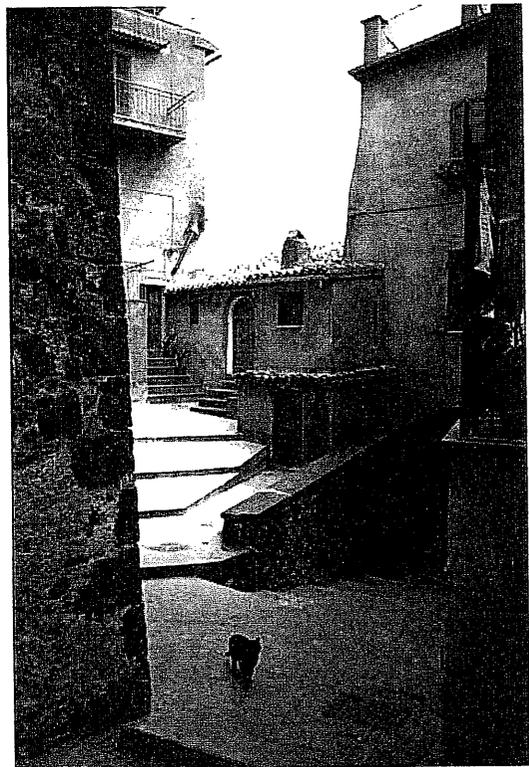
レポーター プロフィール

長谷川順持

<http://www.interactive-concept.co.jp>

1962年横浜生。武蔵工業大学卒業。大学では建築家広瀬鎌二氏に師事し伝統的建築物や歴史環境の研究に係わる。卒業後、建築家吉田桂二氏率いる連合設計社で9年ほど年季を積む。現在 長谷川順持建築デザインオフィス代表。武蔵工業大学非常勤講師。

太陽や風といった一番身近な「自然」と呼応する発想法や、建築を求めるクライアント、あるいは建築に暮らし、使うひとたちがそれぞれに纏（まとって）いる「世界」というものをいかに建築的「世界」と結ぶかが現在の思索の中心的テーマ。「集落」の「姿」、その存在性に直観される「世界」にそのテーマへ近づくヒントの片鱗を見る。



■第2分科会 一截ち折り紙

レポーター：山本厚生

折り重ねた紙をある一直線で切って、開くと何かの形が出来ている。
この方法で、好きな形を作る遊びです。

思い通りの形を作るために、折り方を覚えたり、工夫して新しい形を
創造したりして、遊びます。

これは、まだ、誰も本格的にやった人はいなかったようです。私は10年
ほど、漢字やカタカナ、アルファベットのA～Z、数字の0～9、ハート
や星やさくらんぼや紅葉の形などを作って、楽しんできました。これから
広まり、発展していく可能性のある遊びだと思っています。

当日、参加者は鋏（ハサミ）を御用意ください。

まず、私が実演するのを見ていただきます。

それから、簡単な形を皆で作ってみます。

次に、折り方と形の関係や折る時のコツなどを説明します。

そして、思い思いに、折り方を覚えたり、テーマを決めて形を作ったり、
自由に創作をしたりして、最後にそれぞれの作品を展示します。

レポーター プロフィール

山本厚生

芸大卒 住宅設計 40年

著書 「家族と住まい」

「住まいづくり考」

「ひと裁ち折り紙」10月出版予定

■第3分科会 「吉田桂二」分析 ～屋根の形、架構の変遷を通して～

レポーター：岸未希亜、戎居連太（連合設計社市谷建築事務所）

建築家・吉田桂二のつくり出す建築に魅せられる人は多い。吉田のつくる建築は理屈抜きに美しい。そして同時に設計の思想、形を生み出すプロセスなどの論理性も私たちを惹き付けて止まない。

吉田は間取りの重要性を説き、民家の架構や風土性に学び、町並み保存や町づくりに奔走してきた。それらの活動の総体が今日の吉田の設計手法に反映され、多くの建築を生み出してきたことは周知のことである。限られた時間にその広範な活動をレポートすることは不可能なので、ここでは「屋根」とそれを形づくる「小屋組」に焦点を当て、吉田建築の手法及びその変遷を追いかける。

吉田は著作の中で「建築は外形から考えるべき」ということを述べている。これは建築の外部は公的な領域であるので、環境の一要素として周囲に対する責任が発生するということを指す。また常々「建築は理屈でつくるのではない。美しいと思う感性でつくるのだ。」とも言っている。これは「外形から考える」ことの他方からの真理である。吉田の住宅設計を例にとると、住み手の希望や敷地の条件など様々な要素から最適な間取りが導き出される。その時には美しい屋根が破綻なく掛けられているのだが、屋根形を整えるために間取りを変えることもざらである。吉田の屋根造形の美しさに感心させられる人は多いと思うが、ともに仕事をしているからこそ、その巧みな「屋根さばき」に息を呑むことがある。

伝統的な木造架構で住宅を設計するとき、吉田はその架構が見せる構造的な緊張感を表現することを重要視してきた。そこにも「木造建築をいかに造形的に、感性的に造るか」という吉田の意思が貫かれている。その過程で吉田は、日本の伝統的な木造住宅（民家）のスタイルを踏襲しながらも幾つかの試みを行い、架構の露出度を増した今日の建築を獲得している。これが正に「保存と創造をむすぶ」行為そのものに他ならず、大平の地でその設計手法について改めて検証したい。

レポーター プロフィール

岸未希亜 1971年神奈川県横浜市生まれ。早稲田大学大学院修了後、連合設計社市谷建築事務所に入社。吉田桂二の下で住宅、公共建築等の設計に従事。ツッコミ担当。

戎居連太 1971年東京都杉並区生まれ。筑波大学卒業後、連合設計社市谷建築事務所に入社。吉田桂二の下で住宅、公共建築等の設計に従事。ボケ担当。

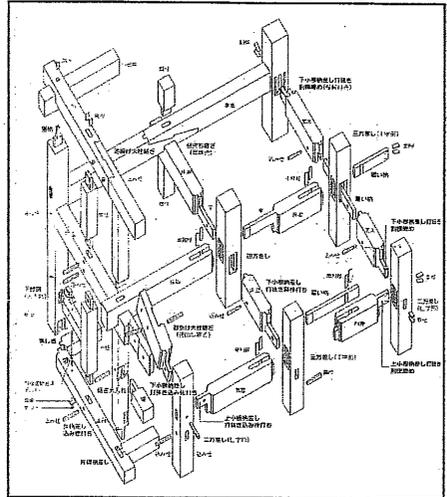
分科会紹介

■第4分科会 伝統的木造技術のこれからの課題と可能性

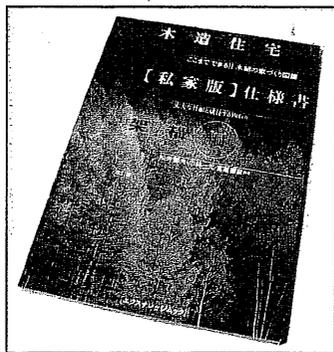
実際の現場における「私家版」のその後の展開）我々は何を考え何を残そうとしているのか

宮越喜彦（木住研） vs 小林一元（小林一元建築設計室）

1995年建築知識3月号から木造住宅[私家版]仕様書の連載を松井、小林、宮越の三人で開始した。木造住宅についての思いは三人三様であったが、受け継がれてきた職人の技術と技能によって造り出される木造を現代にも活かしていくべき、というテーマは共通していた。最初原稿校了直後に阪神大震災が発生したこともあり、連載の内容はもっぱら構法や構造の視点からのアプローチとなった。しかし、現在にあつて冷静に考えてみてもやはり伝統的な木造の技術を語る場合には同様な切り口であったように思われる。もちろん、生活論や文化論の切り口はあつたであろうが、丈夫な架構の下にそれらが展開するとするならば技術論からのアプローチが三人の興味の対象であることに今も変わりはない。



震災後、軸組構法にとっては大きな法規制の変化もあり、「伝統的な木造」にとっては非常に窮屈な状況に追いやられたという実感があつた。しかし、最近の動向としてはむしろ逆であり、伝統に学ぶことから木造を捉えるという方向転換の期待がある。背景としては、持続可能な社会の仕組みづくりが求められている今、近代の価値観だけでは対応できず、むしろ伝統的な仕組みにそのヒントが見出されるからではないだろうか。技術のレベルに落としてみてもそれがいえるであろう。我々技術者としては、それらの課題やその先にある可能性を探ることをこれからのテーマとしていきたい。



議論は様々な展開するものと思われる。多くの皆さんにご参加いただきたい。

※分科会までにあらかじめ参加いただける皆さんから木造に関するそれぞれの関心事などのメモを寄せていただければ分科会の時間（今年は短い）が有効に使えるでしょう。

※木造住宅[私家版]仕様書（ムック版 エクスナレッジ）にあらかじめ目を通していただくと話が分かりやすいでしょう。

レポーター プロフィール

宮越喜彦 昭和33年生まれ

小林一元 昭和28年生まれ

そのほかイベント等紹介

■夜会公演 山本竹勇 津軽三味線公演

津軽三味線とは青森県津軽地方に伝わる三味線音楽です。

津軽三味線の魅力は強い即興性と、ダイナミックでリズムカ
ルに富んだ奏法にあります。ジャズやロックにも共通した、弾
き手の人格をも表現する、まさに人間の感情を持った音楽です。

そんな、津軽三味線の魅力を今回の夜会公演では津軽三味線
奏者、山本竹勇さんをお招きして、堪能していただきます。



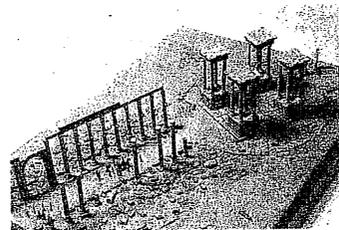
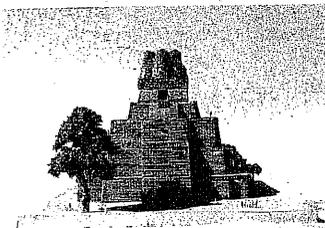
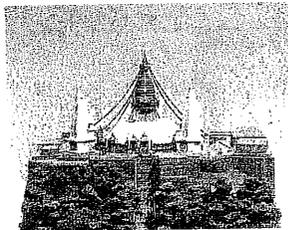
山本竹勇 プロフィール

埼玉県大宮市（現さいたま市）生まれ。

学生の頃、初代・高橋竹山のレコードを聴いて感性を刺激され、独習を始める。その後東京にて高
弟の高橋栄山と故成田雲竹の愛弟子である須藤雲栄に手ほどきを受けて開眼、竹勇の名を許され、竹
山流津軽三味線と津軽民謡・国風雲竹流の師範となる。「津軽三味線と津軽方言詩の世界」や「祭り
組曲」等を創作し、竹山ジョイント公演のプロデュース、ステージディレクターなど、全国公演やラ
イブハウス他、海外でも高い評価を得ている。

■景観模型展

会報にも「景観模型報告」で記事を寄せていただいている。景観模型工房の盛口さんによ
る景観模型のミニ展示会を大平建築塾で開きます。



■写真コンテスト

今年もやります写真コンテスト。オトボケ、決定的瞬間、オ
スマシ、アート何でも OK。これらと思う、自慢のワンショッ
トを大募集します。

優秀？！な作品には懇親会で豪華商品が…。



■図書の販売

大平建築塾では本の販売もできます。大平建築塾で本の販売を希望される方は、担当の島
田真弓（棟建築工房：045-373-7890 E-mail：kunugi@gw7.gateway.ne.jp）まで御一報
ください。当日の本の販売については、各自の責任にてお願いします。

■お詫びと訂正

前回の会報にて、以下の2点について誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

3 ページ 「大平建築塾」へのお誘い

夜会公演の津軽三味線の演奏者は山本竹勇さんです。

会報では高橋竹勇となっていました。

12 ページ 3 行目 第二回語る会報告 『デザイン&マネージメント』

「一坪 0.54 m²」は「一坪 0.854 m²」の誤りです。

■大平建築塾事務局からのお知らせ

大平建築塾の申し込み受付をしています。申し込み用紙を同封しております。ふるって御参加ください。内容の詳細については本誌をご覧ください。

【申込締切】 2003 年 7 月 20 日

【開催日】 2003 年 8 月 2 日(土)～8 月 4 日(月)

【テーマ】 「保存と創造を結ぶ」

【参加費】 A 日程 (2 泊参加) 15,000 円 学生 10,000 円

B・C 日程 (1 泊参加) 12,000 円 学生 8,000 円

■次回世話人会のお知らせ

日時・場所：未定(会員の方には後日、事務局よりご連絡いたします)

- ・生活文化同人の活動方針や、定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」ですが、世話人以外の方も自由に参加できます。(ただし、酒代などは自腹です。)参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■編集後記

- ・この前、初めて沖縄の楽器「三線(さんしん)」をいじらせてもらいました。面白かった。(飯島)

■会報編集局より

- ・会報原稿を募集しております。「私の近作」「主張」「旅の報告」「スケッチ」など何でも OK です。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。

◆2003 年度事務局 新井聡 (アトリエ・ヌック)

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南 2-5-5-404

Tel : 048-432-8651. Fax : 048-432-8651.

E-Mail : nook@k.jps.net

◆2003 年度会報編集局 飯島克如 (まちづくりカンパニー・シーブネットワーク)

高松俊秀 (東京理科大学修士 2 年)

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-7YK 駿河台

Tel : 03-3233-2311 (代表) . Fax : 03-3233-1312.

E-Mail : kijima@tama.or.jp

生活文化

seikatsubunka

大平建築塾紹介特集号

目次

- P 2... 第三回語る会報告「木造住宅のささやかな試み」
P 9... 第十回大平建築塾報告

生活文化同人会報

2003年10月 No. 63

2003年第4回「語る会」のお知らせ



「この度、一年間のイタリア留学を無事終え元気に戻って参りました。ミラノを拠点にたくさんの都市をまわりましたので、スライドを交えつつ、イタリアの建築と町並み等々お話ししたいと思います。」

語り手：佐々伸子

テーマ：イタリア紀行

日時：10月31日 午後6時30分から

場所：市田邸

■木造住宅のささやかな試み—素材そして架構・建具 報告者:飯島克如

建具屋の松本です。今日の話は、連合を止めてから、その間にやった、いくつかを皆さんにみてもらって、現状報告といったような話になるんだろうと思います。皆さんはたくさん設計しているのかもしていませんが、私は余りありません。5棟ぐらいしかないですね。生活は楽ではありませんが、でも今は楽しいですね。



さて、それで本題に入りますが、家の形を決めるもの。あたりまえのことをいくつかリストアップします。まず、敷地条件があります。それから、住み手の生活というのが当然あります。これが一番重要だという見方をする人も居ます。それから、予算、銭。銭の無い時はスッポンの設計をしなくてははいけない。スッポンというのは総二階、あちこち出っ張ったり引っ込んだりしていないもの。その辺をわきまえて設計をしなくてははいけないですね。

それから、素材。これが今回話したいことです。普通の設計のやり方は敷地条件や住み手の生活や予算あたりから色々考えて、図面表現で形を決める。後は工務店に見積もり依頼をする。材料を杉だとか檜ぐらいは指定をするでしょう。だけど、それらが何処から来るのか、設計者には興味が無い。つまり、工務店に頼めば何とかかなると思っている。しかし、そうではない他の方法があっても良いのではないのかと、自分なりに考えて居たんです。それは材料をみて設計をするということです。何処からきたのか判らないような材料でやるのではなくて、目の前の材料で、それを前提として設計をやるという設計の方法論です。

【素材から始める設計のきっかけ】

なぜそんなことを考えるようになったのか。連合設計社に居た時に、秋田から材料を産直して、ナショナルトラストの米山さんの家を設計しました。住宅特集で出ている木ネットの記事を読んで、やってみたいと思ったんです。それをやっているうちに、日本の林業の現状というのがとてもおっぴきならない状況だということが僕にわかってきたんです。それが始まりでした。

それから、いろんな林業の産地、原産地を訪ねる旅をしました。その中で、岐阜県の付知というところに行きました。付知に家具等を主にやっている木工の牧野さんと言う方がいて、そこへ職人の話を聞きに行ったわけです。彼は「僕は木を見て形を決める。」「木の曲がり具合とか表情をみて、形を決めている」と言うんですよ。僕は、うらやましいと思ったんです。「そうだよな、もの作りってそうなんじゃないの。」そのあたりから、素材から発想して作る形が建築にもあって良いのではないかと思うようになったのです。

それから、沼田に古い民家の実測調査を手伝いました。その民家には外回りなどをみて回ると、普通に1間間隔ぐらいに柱が立っているわけですが妙にリズムを崩している柱があ

る。何でそういう風になっているのか外見では判らない。それが小屋伏等の調査をしてみ始めて判ったわけです。梁が曲がっていたんです。曲がっている柱をそのまま受けたかったんだね大工は。それで、そこだけ間隔を変えているんです。そんなもの、横材を受けてしまえばそれまでなんだけれども、曲がっている松材を見て大工は色々と考えたんでしょう。そういう光景が僕には想像できて、良いなと思ったのです。

三つ目の経験は、鯖街道の熊川宿と言うところに、逸見さんという家があって、その文庫倉という二間半程度の小さい蔵の改装をやったんです。そこでもやはり材の使い方が活かしてた。根曲がりの柱を使っているんです。これが僕には妙に綺麗に思えた。特に素敵だったのは、耳付材(製剤しても木の皮が残っている材)を使っているんですが、出隅のところで、根曲がりの柱を使っているから、柱がずっと足元のところで消えてしまうんです。それが妙に綺麗で、こういうのをやってみたいと思ったんです。そんな経験をして、材料から建築の形を決めると言うことをやってみたいと思うようになったわけです。

【素材の拘りについて】

僕の場合は素材といっても特に木材です。国産材を使うと言う拘りがあります。と言うのは、一連のそういった自分の動きの中で、日本の林業がのっぴきならない状況にあるというのがわかったからです。だから、今自分が木造の住宅の設計をすると言う立場はありがたいと思っています。仕事をしながら日本の林業振興に貢献していくことが出来る。だから、国産材を使うことに関しては非常に拘って設計をしているつもりです。その中で心に決めていることがあります。

ベニヤは使わない。理由は簡単で、南洋材だからです。もうひとつ、ベニヤは腐るから使いたくない。屋根の野地板にも使わない。屋根をはがして見たことはありませんが、大工は腐っていると言います。自分が経験したのは水周りです。水周りは腐っています。そんなものを耐力壁の変わりに使っていたら危なくてしょうがないから、構造材としてはベニヤを絶対に使いません。ただ、「一枚も使わない。」と言いたいです。実は建具が困るわけです。とくに建具の面材は難しくなる。ただ建具もベニヤを使わないでやったことはあります。それが、資料にある奥武蔵の家、建具屋の新井さんの家です。その家は一枚もベニヤを使っていません。建具屋がついているから、何とかなったわけです。だけど、建具だけは何ともなんないんです。何とかあったとしても、うるさい。建具にすらベニヤを使わないと言うのは難しく、どうしても使いたくない時は強引に襖にしています。

集成材は使わない。絶対使いません。理由はいくつかあって、集成材をいくら使ったところで日本の山が豊かになるとは僕には思えない。山に落ちるお金と言うのは木端材のお金だけだろうと思います。その二束三文で手に入れた材が接着剤で貼り合わせて集成材になるわけです。それで誰が得をするのかと言うと、接着剤のメーカーと集成材を作るメーカーなんです。山にお金を還元できない。もうひとつの理由は、耐力的に何年持つか自信が無

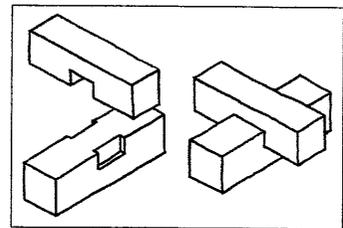
い。そもそもどうやって試験をしているのか判らない。60年持つと言うのをどうやって試験するのか。僕には持つとは到底思えない。

節や割れを厭わず無垢材で作る。無垢材でということをお願いですね。割れとかを建て主が気にすると木材は使えません。それを良しとしなくては使えないので、一所懸命に説明します。そういうものなんだ。心配しないでくれ。節は良いものなんだ。節があるから木なんだということを一所懸命話します。

あるもので作る。あるもので、あるがままに作る。長いものは長いままに使う。丸いものは丸いまま使う。耳付材大いに結構。何で柱はピン角でなくてはいけない。何であるもので作るのかと言うと、乾燥材で使いたいからです。そこにあるもの、少しでも長くストックされた材料、それを使って家を作りたいからです。こんなことを基本姿勢として設計をしています。

【デザインの方法】

木造らしく作る。それは木が見えると言うこと。真壁、化粧梁で表現すると言うこと。丈夫な木組みで作ると言うこと。渡り腮（あご）ですね。黙っていれば仕口は渡り腮です。それから、通し貫を使う。理屈としては応力を集中させないと言うことです。例えば筋交いは完璧に応力集中型です。部分で耐えるから金物が要るんです。通し貫は変形が大きいらしい。ちょっとした地震でも、壁にクラックが入ることがあるという。しかし、大地震の時は粘るらしい。いきなりボキッとはいかないらしい。ただ、中くらいの地震の時に壁がビリビリいくのはまずかんべえと、筋交いを併用しようとしているんです。中地震では筋交いで受ける。よっぽど大きい地震では貫で耐える。その考え方で良いのではないかと。それから、開放的に作ると言うこと。これにも僕は拘って設計しているつもりです。出来れば、柱とか壁とかできるだけ無いほうが良いと思っています。ただ、無いほうが良いと言っても住宅だから、少しは作らなくてはいけない。そのとき、構造耐力的にどうやっているのかと言えば足固めと指鴨居です。出来るだけ木造ラーメンに近い形で考えていく。完璧ラーメン構造と言うのは木造では難しい。完全な木造の大断面を使えば出来ると思いますが、足固め、指し鴨居を使って、特に1階部分を木造ラーメン構造に近い形にしようとしています。最後、建具屋です。建具をすごく意識して設計の中に取り入れようとしています。建具のデザインは、建具本体のデザインが重要だと言うことももちろんあるんですが、重要なのは、枠の収まりであったり、開閉形式であったり、選択であったり、高さの選択であったり、まず第一なんです。それによって架構形態が変わることもありうる。僕は今まで内法高にとられて設計していました。5尺8寸とか6尺と言う内法高にずっと拘ってしまったんです。最近やっとそういうことから逃れられ始めています。「内法高が同じである必要が何処



渡り腮

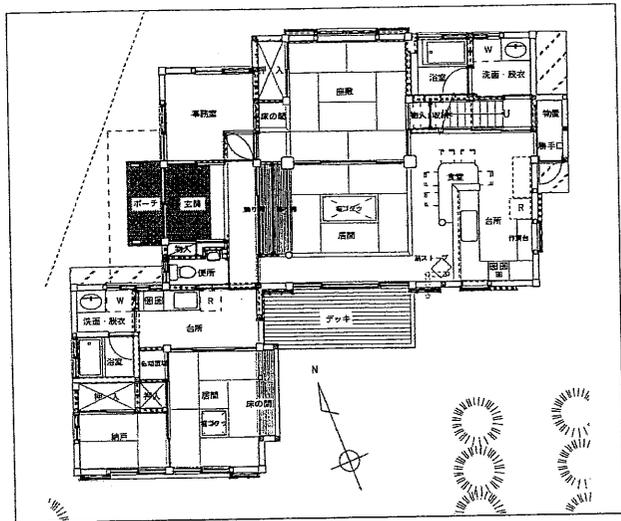
にあるの」ということにやっとこ気づき始めました。場所によっては天井までであっても良いではないか、細長くて良いではないか。横長でも良いでもないかと、自由に考えられるように最近やっとこなってきました。

【奥武蔵の家】

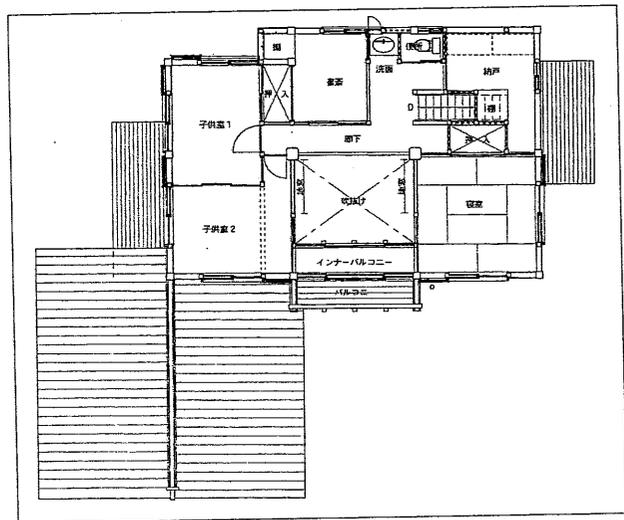
奥武蔵の家と書いていますが、建具屋の新井さんの家です。二世帯住宅です。面積は55坪の延べ床だったと思います。二世帯住宅でありまして、二世帯住宅で何を共有するかと言うのがありますが、ここではトイレだけです。だから、お母さんのところがかなり独立性の高い設計になっています。道路が南側にあるんですが、ここにカーポートが使われていまして、カーポートを回って入る変わったアプローチにしています。

この家の場合、何があるものだったのかというと、7寸角の杉柱です。基本的には2間角のグリッドで、その交点に7寸角の柱を入れるということを基本に柱を組んでいます。真中にあるでかいやつも元々は原木置き場、土場で転がっていた丸太です。径40センチぐらいの広葉樹の丸太です。耳付材ですが、尺2寸です。片一方が楠です。もう一方が棕の木です。長さが、一方が5.5m、もう一方が6mでしたので、5.5mの方を基準にして断面の高さ関係を決めています。だから、7寸の柱と通し大黒がこの家の形を決める決め手になっています。

1階は、畳敷きの居間、南北に抜ける座敷、後はオープンな形にした台所などの水周り。2階も、間取的にはシンプルです。本当は、全く素直に形を作りたかったけれども、法面が近くて、変則的な形になっています。子供室を二つと、寝室を吹き抜けて挟むというパターンです。吹き抜きの窓を拭くためにインナーバルコニー、奥さんの書斎があって、納戸がある

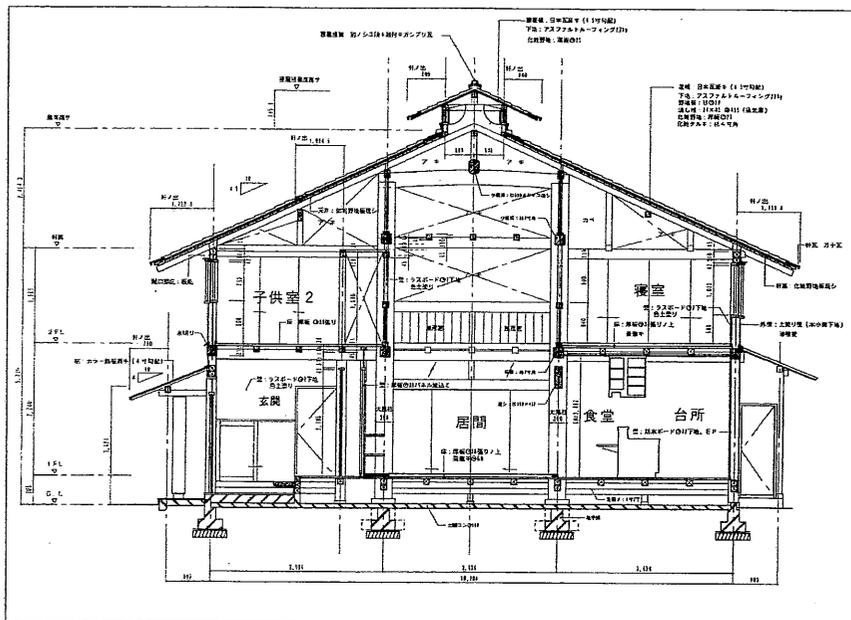


1階平面図



2階平面図

というお決まりのパタンです。それで、6畳ですねこの吹き抜けが、でも、小屋架構がでないものですからぜんぜん足りません。最低でも8畳ないとこの家はだめでした。



断面図

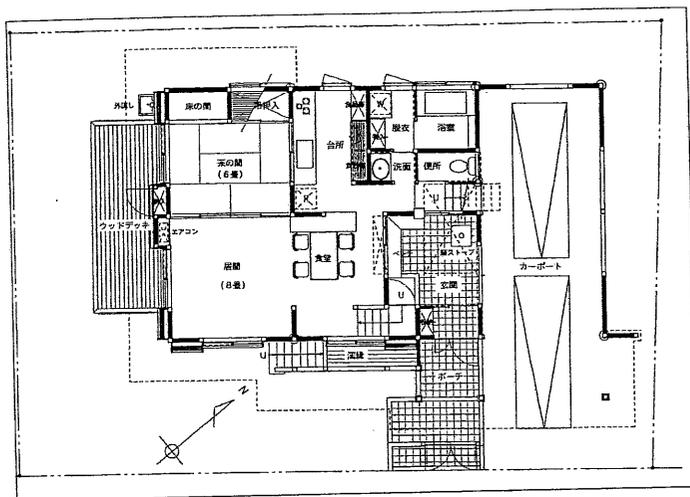
この家の場合は土台がありません。基礎の上に直接柱が乗っている状態です。石端建てといいます。石端建てにして基礎の上に直接柱を立ててそれに足固めをさして行く。4寸角2丁で合計8寸の高さになるんですが、3尺ピッチでダボで繋いで足固めにして入れました。足固めが入るところは足固めを全部入れています。石端建てですが、独立基礎ではありません。地中梁です。独立基礎だと不同沈下が怖いので、それを避けるために、地中梁を2間グリッドでまわしています。但し、この布基礎のように出てきてしまうと面白くないので、隠して入れています。2階の桁高、地回りですね、それは2mを切っています。梁下で1800やっとなんです。何でそうしたかと言うと、4メートルの7寸角を二つに切れれば2本に使えるだろうと言う単純な発想です。地回りですから、地回りレベルをすべてそう出来ますから、一本の材が2本に使えると思ってこの高さを決めたわけです。

特徴的なことをいうと、ほとんど天井を張っていないということです。甲乙梁を4寸角の甲乙梁を3尺ピッチで入れています。それで厚板を一発やってそれで終わりです。壁は泥壁です。屋根の垂木は4寸角です。4寸角の垂木を3尺ピッチで入れて厚板を打っています。厚板の上に空気層をとっています。空気層をとって、瓦葺なんですけど、冬は空気層の動きを止める、夏は空気層が動くようにして、越屋根から抜けると言うことをやっています。動かないと言うのは空気層が断熱材として働くだらうと言う期待をもっているわけです。7寸角柱は両面真壁で出すんですが、収まり柱の4寸角の柱は全部隠しました。外回りは泥壁ですが中はラスボードで土を塗りました。それから、建具屋の新井さんの家ですから、全部

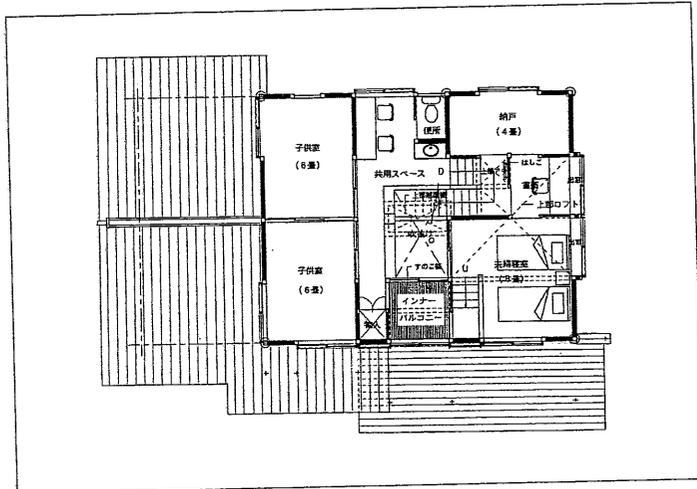
木建です。新井さんに普通に作ったらどれくらいかかるのと聞いたら、800万円ですって、建具代だけで。と言うことは、これぐらいの家で普通の家の倍かかっています。

【新潟の加茂の家】

やはり2間グリッドを基本にしています。スキップフロアで構成しているわけですが、この1階の部分が高床になっています。なぜ高床になっているのかと言うとひとつには地域性の話があります。昔は豪雪地帯でした。それから足固めを効率よく効かすためにはある程度距離があったほうが良いのです。だから、この家ではいきなり玄関から半階上がる構成にしたわけです。それだけでは、もったいないのでその下は全部物入れにしました。階段の下から入るようにしています。間取りとしては、何のことは無い、食堂があって、茶の間があって、あたりまえの台所があって、中二階に上がっていく形です。台所と階段の間に入



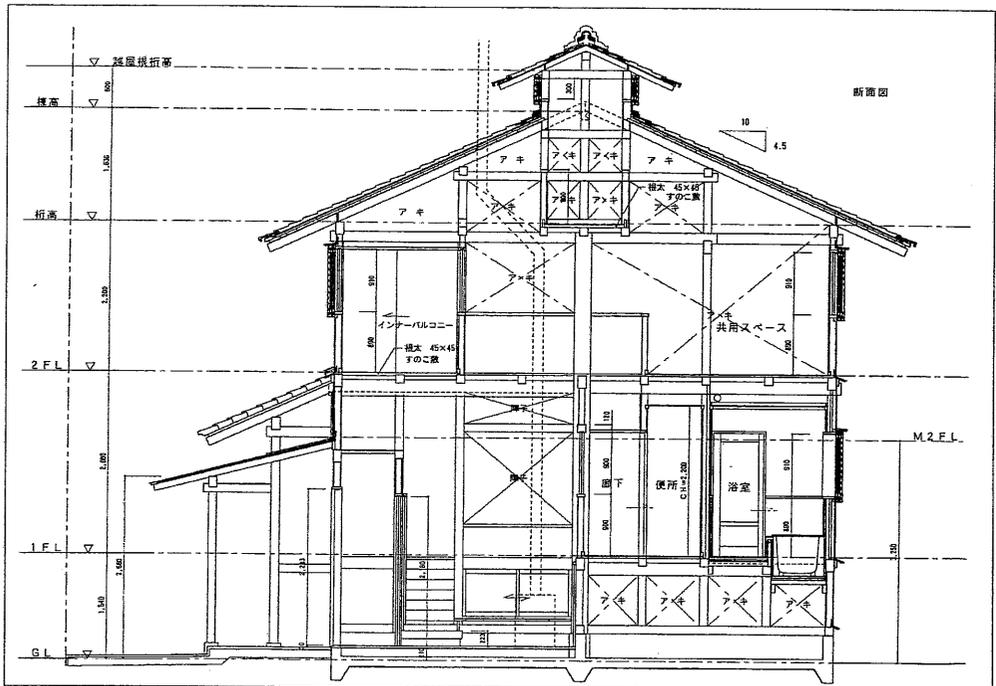
1階平面図



ている小壁は構造の補強です。階段を下りるときにアイストップになって、居間も階平面図ここに区切られていて落ち着くし、だけど繋がっていると言うことで良いと思ったんで、これは邪魔くさそうに見えるけれども、あえてつけました。2階は階段を上がると中二階で書斎があって、風が抜けるように納戸がある。この中二階はカーポートの上で吹きさらしです。よほど寒かろうと言うことで、安藤さんが良くやる床下に泥を入れるというやり方をやろうとして、床を二重に張っています。設計では泥をいれて床を張るということをやっているのですが、左官屋がやけに高いと言ったんで、そんなんじゃなくても出来ると思ったんだけどもあきらめました。それで、何を入れたかというとおがくずを入れました。その寝室から上がりますと、得意のインナーバルコニーがありまして、子供室が二つ。この家はさらに欲張ってその上にロフト。越屋根はロフトから登れるようにしています。出来た時、スノコ

敷きの所まで上りましたがとても怖くはありませんでした。空間的には井戸の下から上を見上げる形になってしまい、6畳くらいあればよかったです。通し大黒は8寸です。

このうちは何があったのかというと、4寸角材がいっぱいありました。最初提案した時は4寸角材だけで作る事だったんですが、この家は4面真壁なんで、4寸角を重ねていくと、重ね目から雨が差すのではないかと言うことで、4寸角材だけでやるのは断念しました。と言うわけで、当初の4寸角の残骸が至る所に残っています。この家は軒を4尺出しているのので、ここから2本の重ね梁にして飛び出させています。このあたりは積もる時には1mも積もるんですが、法規にある積雪荷重で見るとほとんどたわみません。三尺ピッチで垂木を入れて野地板に厚板を一発入れています。それが天井と兼用です。ぱっと見て4寸角が目立つのはそういうわけなんです。



断面図

第十回大平建築塾報告



恥ずかしながら、今回初めての「大平建築塾」の参加でした。参加してみたの大きな発見がこの写真です。黒光りする床と鮮やかに外の光が飛び込んでいるこの写真。

私が宿泊した新築復元された下紙屋の中はとても明るいものでした。翻って、紙屋などの吸い込まれるばかりに黒い天井。

時を重ねて「在る」ことを肌で感じる事が出来ました。

この、「大平建築塾」も十回の時を重ねます。

(会報編集局)

●第十回大平建築塾次第

8月2日(土)

受付

開塾式

大平宿の見学

きこり体験

景観模型展覧会 「世界の風景」

夜会公演 (山本竹勇「津軽三味線」)

全体懇親会

8月3日(日)

分科会 I 「集落のデザインエッセンスを今に生かす」

分科会 II 「ひと裁ち折り紙」

分科会 III 「『吉田桂二』分析」

分科会 IV 「伝統的木造技術のこれからの課題と可能性」

基調講演 「保存と創造を結ぶ」

各棟懇親会

8月4日(月)

障子張替え、後片付

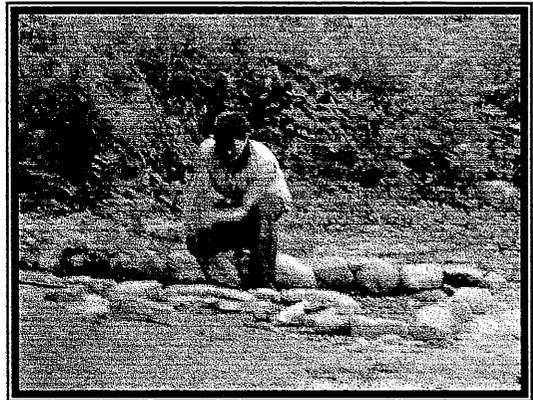
閉塾式

●大平宿での生活



受付を終えて、宿舎が決まりしばらくすると、3日間の食材が配られます。これを上手く使いきって、3日間を乗り切ります。

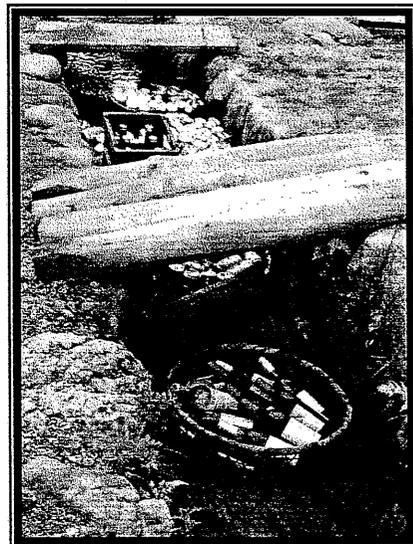
火をおこすために、まずは薪割り。鉈を振るって割っていきます。



囲炉裏周り、窓側の台所を使って、食事の準備をしています。



街道沿いに流れる小川は、とても冷たいので冷蔵庫代わりに利用します。ビールやジュースの、果物や野菜を冷やしたり。



●きこり体験



講師は杣の田中淳司さん。大平塾の裏手の森を会場に、きこりの体験ワークショップを行いました。

背中を倒す木の幹に当てて、切り倒す木が安全な方向に倒れるかどうか確認しています。

切り倒した木の枝を皆で払って、最後に鋸で丸太にしていきます。



●景観模型展示



いつも会報で、紹介されている景観模型工房の盛口さんの「景観模型」ですが、今回大平建築塾での野外展覧会を開きました。

世界各国の方が作られた精巧な模型は、一つ一つが、製作者の強い思い入れを感じるものばかりでした。展示は、模型の他に、参考とした写真と製作者本人によるスケッチをパネルで展示していました。

●夜会公演



大平宿の夜は、都会の夜とは違い、満天の星空の下でありながら闇はとても深いものです。各宿舎での夕食の後、津軽懐中電灯の明かりを頼りに、紙屋の会場に参加者が集まり、夜会公演は始まりました。

今回の夜会は津軽三味線の山本竹勇さんを迎え、津軽三味線の調べを堪能しました。竹勇さんの息子さんも演奏者として参加しました。

山本竹勇さんの奏でる、津軽三味線は情緒豊かで、表情の豊かな音楽でした。

いわゆる、パーカッションの闊達なビートとは異なりますが、情緒豊かな三味線の響きは生で聞くととても味わい深いものでした。

飛び入りのチター演奏も加わり、夜遅くまで懇親会は続きました。

●基調講演



二日目の夕方より、紙屋を会場に基調講演は開かれました。

今回の基調講演は、吉田桂二さんが講師となつて、「保存と創造を結ぶ」をテーマに話をされました。

街並み保存の運動の歴史と、大平宿の保存の歴史、第十回と言う節目の時を迎えた大平建築塾ですが、今一度、原点を振り返るとともに、これからどうするかを語られま

した。投げかけられた、問題は、「木」という材料の生産の現場から、建築の設計、そして、「町並みづくり」や、「まちづくり」までの幅広い話題を含んでいました。

基調講演の後は、各宿舎に分かれ、囲炉裏を囲んでの懇親会。まちづくりの話、建築の話、それから、大平建築塾のこれからについて、それぞれの宿舎で夜更けまで語り合いました。

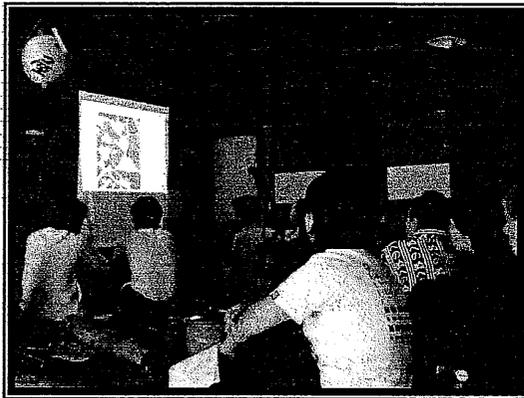
●集落のデザインエッセンスを今に生かす

集落はひとによって発想され築かれた自然である。
集落は都市であり町であり住まいであり道である。
時に川であり、海であり、空であり、大地である。
集落はその総体として「世界」である。
そこで笑い、泣き、語り、くつろぎ、佇む。

そこには生活の事実がある(あった)。

そこで多くの命が生まれ育まれ、それと同じだけ失われていく。
集落は一瞥すると永き時代を超えてきた、安定した静的な「世界」だが、内実、日々さまざまなもの生成明滅を続ける動的な「世界」といえる。
それは私達が日々設計する住まいと(おそらく)同じである。

集落は「解釈」を待っている。



集落をどのように、自分の言葉で掴んでいくか。ある意味で、「集落」と言うのは茫漠とした空間なんだけれども、それを解釈していくことが重要になってくる。

わたしも、日本の集落をきちんと見ることによって、外国の集落をみてよく解釈できなかったものが、出来るようになった。逆に、外国の集落から日本の集落も解釈できる。そういう表裏一体の関係になっている。

今回、お話す集落の話は今の段階における自分の解釈です。かなり、乱暴な部分もありますが、若干ヒントとなる着眼点が見つかるならば、それを手がかりにして後は皆が考えて欲しいと思います。

●ひと裁ち折り紙

折り重ねた紙をある一直線で切って、開くと何かの形が出来ている。この方法で、好きな形を作る遊びです。

思い通りの形を作るために、折り方を覚えたり、工夫して新しい形を創造したりして、遊びます。

これは、まだ、誰も本格的にやった人はいなかったようです。私は 10 年ほど、漢字やカタカナ、アルファベットの A-Z、数字の 0-9、ハートや星やさくらんぼや紅葉の形などを作って、楽しんできました。これから広まり、発展していく可能性のある遊びだと思っています。

●「吉田桂二」分析

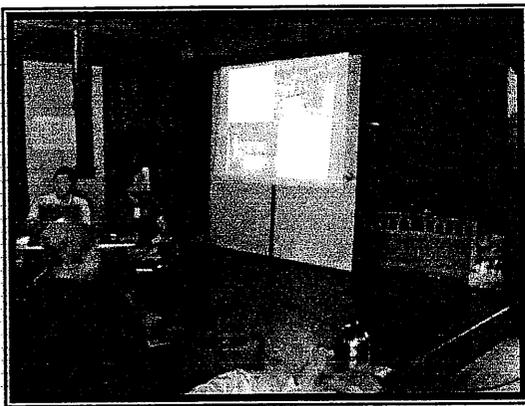
戦後間もなくの「小住宅時代」に全盛だった「垂木構造」と、その構造的限界を補う「登り梁構造」はいつでも架構と間取りの関係が密接であり、吉田の設計した住宅や山荘の多くは明快な小屋組の下で豊かな空間をつくっていた。

信州のある住宅の設計で民家に倣い「和小屋」による空間を試みた吉田は、これを機に大平宿と出会う他、この頃から日本各地の民家、町並みのスケッチをライフワークとしてゆく。垂木構造、登り梁構造、和小屋という3つの架構を操りながらの手法は、次第に和小屋の架構を露出する空間づくりへと進んでいった。

暮らし方や間取りの問題にも着目していた吉田にとって、プランの自由度が高い和小屋はその点でも好ましかったが、架構が見せる構造的な緊張感の表現を意図して、露出可能な整理された小屋組の創出を実現した。その設計術は「木造住宅の設計手法」として出版され、一つの完結をみる。

また架構と間取りの整合性へと収束しながら、意図的な遊離によって様々なバリエーションをつくる試みがなされ、規模の大きな住宅の場合は複雑に重なる屋根を処理するため、複合架構へと発展する。架構が運動することで住宅の形を決めてゆく手法については、まだ検証の余地が多分に残ると考えている。

●「伝統的木造技術のこれからの課題と可能性」



伝統と新技術の融合と言うことですが、私達のところで言うと、その場合、伝統工法とは必ずしも古いと言うことではなくて、それは、木と木をどう接合させていくのかと言うことで、それは普遍的な実用性があるのではないかと考えています。一応言葉とすると、普遍的なそういう技術と、工学的に考えられた材料とを私達が生きている中で融合が可能かと言うことも当然中に入れていきたいと考えています。それと、こういう場がそうだと思いますが、技術と言うのはある限られた人に集中します。その結果閉じられた空間となり、衰退してしまう。それはやはり望ましいことではないですから、自分達の持っているものを出し合いながら技術を高めあうと言うこともやっていきたいと考えています。それが結果的にいい家作りになるのではないかと考えています。

●反省と今後

第十回を迎えた大平建築塾。ひとつの大きな節目を迎え、これからを見据えた話し合いが、二日目の夜に各宿舎で行われました。また、建築塾閉塾後の8月22日には事務局を主体に反省会が市田邸にて開かれました。大平建築塾の今後のみならず、生活文化同人の今後のあり方も含めた、議論が展開されました。なかなか、確固とした結論はえられなかったものの、ひとつの成果としてメーリングリストの立ち上げ(20ページに案内を掲示しております。)、大平建築塾の継続などが話されました。

以下、事務局に寄せられた感想、反省、要望などの文章を紹介します。

○おおくらや ミーティング議事録 …… おおくらや家長 寺本雅男

1.家屋の修理

- ・丸一日は修理に時間を取る
- ・プロを呼ぶ(建具職人、経験者)
- ・建具がきっちりハマっていたり綺麗であれば壊されにくい(おおくらやの場合ほとんどの建具がハマらない)

2.備品

- ・今回「おおくらや」の場合、食器以外の共通仕様の物が全くなかった。
- ・かまどがかなり傷んでいる。一部は修理不可能

3.持参品

- ・個人の食器類(特に箸、スプーン、フォーク)の持参徹底

4.開催月

- ・冬は無理としても春、夏、秋に開いて欲しい。

5.参加者の割り振り

- ・学生は同じ学校で揃えないほうが各家へ行きやすいし、親交を深めやすい。
- ・仲間で固まってしまう他家へは初めての人がばかりなので行きにくい。

6.名札

- ・色分けして欲しい、特にスタッフの人が判るように。

7.民家の守り事

- ・現在も貼ってあるが各部屋に貼っておく。(良く目につくように)

8.役割

- ・何をしたいのか判らない(指示をすれば動いてくれるので役割を決める)
- ・最初に家に集まった時に全員に役割を決める(家長の仕事!)

9.分科会

- ・専門的過ぎて判りにくい
- ・初日の体験、各家の案内に参加しなかったのに終わっていた。特に各家の案内を聞き取った。
- ・家の実測をしなかった。

10.食材

- ・多すぎる。買出し係も食事係も大変な労力。もっとシンプルにする。例えば《大平鍋》(ちゃんこ風、豚汁風等)を囲炉裏でつくり、後はご飯と漬物で十分だと思う。

11.飯田での集合場所

- ・市役所の周りを探した。プラカードのようなものを用意して欲しい。
- ・飯田駅前だとわかりやすいのではないか。

12.管理の整備

- ・管理者をきっちりする。備品などもチェックリストで使用前、後にチェックする。
- ・建具なども壊したり破ったりしていないか。

13.ホームページ

- ・大平建築塾は4件?大平宿は2千件以上との情報あり。

14.大平宿の歴史

- ・深見荘の蔵の2階で少し展示してあったがもっと充実して欲しい。

15.大平建築塾

- ・来年も是非開いて欲しい(おおくらや全員)

まとめ

今回の《おおくらや》約20名、二日目の夕食後、大平建築塾の今後についての話し合いは活発な意見が飛び交い、有意義な一時でありました。約半数が初参加だった事もあるが最初は少し戸惑っていたが、ほぐれていくにしたがって発言をしてくれたので、その意見、要望を上記に書き出しました。大きく分けて食事関係と家の管理関係の二大問題に多くの意見、要望が集まりました。

今回の《おおくらや》の建具、特に障子はひどいもので10回中最悪のものでした、紙を破るだけでなく棧も折ってしまっているという悪質さ、16枚の破れ障子、最終日の2~3時間ではとても貼り替えは無理と思えたが、深見荘、下紙屋の大量助っ人による人海作戦にて完遂、皆さんに感謝感激雨あられ(古いなァ)、部屋が明るくなりました。

2年前の火事の経験により全ての家の煙突が新しくなっていたのは納得しました。

- ・食事については色々な意見が出ました。上記以外に、まず自分の食い扶持は自分で持つてくる。各家々で違う料理を作り味比べ、お裾分けをする。等、検討の余地大にあるとおもいます。
- ・そのほか、自在カギが上下することを知らない人が何度か参加している人でも知らなかったのには少々驚きました。まず、火の付け方、囲炉裏の薪の燃やし方、火の調節の仕方等の田舎生活の根本を教えてくれるお年寄りを招いて交流するのも若い人達には良い経験になると思う。
- ・次回（続第1回？）があれば（あると思う、いや、あってほしい）の必要持参品
*しやもじ *おたま *なた、斧、ノコギリ *コンポスト用の発酵促進剤 *古新聞（火付け用）*火ばさみ*飲食物冷却用カゴ類 *室内用ほうき、ちりとり
- ・写真コンテスト、する？しない？はっきりして欲しい。
- ・前回の写真の展示及び帝望写真の注文予約をしてほしい
- ・参加者名簿、欲しい（写真などを送るのに必要な時がある。）

最後に大平宿の今後について維持管理費を徴収する、とか、日本ナショナルトラストに管理してもらおう、とか、飯田市に管理してもらおう、とか、色々発言がありました。これらはこれで大変重要なことですが、まずは目の前のできることから手を付けていきたいものです。

○下紙屋 ミーティング議事録 下紙屋家長 大平秀和

1.建物の修理

- ・10年前の修復からだいぶ経ち、各建物に痛みが目立つ。参加者の中には大工さんやその道のプロなどがいるので、障子紙の張り替えだけではなく、簡単な建物のメンテナンスを参加者全員で一日おこなう。建具の直し、板壁や屋根の板葺きの補修など。
- ・費用のかかる補修のために、参加者から寄付金を集める。または、参加費にいくらか上乗せして徴集する。
- ・お金ではなく労力で建物の維持に貢献するのも良いのでは。
- ・若い参加者の中には木造建築の基礎を覚えたい人がいるので、補修に関わる事で勉強になる。
- ・紙屋の痛みが激しく、もう一度きちんとなおす必要がある。

2.生活の場

- ・生活の現体験の場であるので、米のとぎ方や竈の火のお越し方、囲炉裏の使い方などを教える講座もあって良い。
- ・現在の生活を見直す場でもある。生活の視点で大平宿を見る。

3.世代

- ・吉田先生の問い掛けは、若い世代に期待しての投げかけではないか。
- ・若いメンバーが中心になり、現メンバーがサポートする体制にしていく事を始める。
- ・東京で2ヶ月に1度ぐらいの割合で、大平宿のことを考える場を設ける。そこには若い人の参加を募る。

4.その他

- ・10年前の建物の改修の様子を新しい参加者に伝えることも必要か。（要望あり）
- ・毎回企画を考えるのではなく、数年の予定を立てて、参加者に継続的に来てもらう
- ・建物を見ながら木構造の基本をおしえてもらいたい。
- ・飯田市民にも関心を持ってもらう。お知らせを出す。地元の人用のイベントを考える。
- ・地元の人の協力を得られる努力をする。もっと地元との交流をおこなう。
- ・大平宿から現在の都会生活に何かを発信する基地にしたい。
- ・武蔵工業大学の学生グループからホームページの立ち上げの提案あり。→ 更新や問い合わせなどの対応も必要。
- ・学生グループが固まってしまう。初参加で、内気な人のことも考慮してほしい。→ せっかく参加したのだから自ら打ち解ける努力も必要。
- ・悲観的なことばかりではないのでは？歴史的建物でのイベントで140名の参加はなかなか無い。

○メッセージ 益子昇（船乗りトニー）

たとえ年一度の二泊三日であっても実際にかつての山暮らしを体験し、ホンモノの伝統的民家の中で過ごすことができる大平建築塾が後の世代に果たす役割は今後も重大なものがあります。

情報過多で居ながらにしてほとんどすべてがバーチャルリアリティの中に処理されてしまう今日の社会にあつて、自らが足を運び、火を起こし、小川の水を使い、天然木のしつらえの室内を清掃し、障子を張替えながらホンモノの、木構造を学ぶ……。それら一連の作法を通して、失われつつある生活文化について満喫できる場所は他にそれほど多くの事例があるとも思えません。

仮に大平建築塾を我々が閉じたとしても、吉田先生は新しく開校されて校長先生となられた学校の野外実習の場として、今後も大平宿通いはつづけられるでしょう。そこで毎年の企画運営と事務局作業の大変さは認めた上で、来年からは先生を顧問格として負担を少しでも軽くしてさしあげ、大平建築塾の塾長は弟子どもが年番制で交代して務めることとし、各部屋別の家長とタイアップしながら当日の運営にあたることを確約して、今後も継続してゆくことを切に望みたい。

私自身は現在死んだ振りをしながら、のたれ生きているような状態にありますが、再起への希望だけは失っていません。2～3年の内には関西で事務局を引き受けることが可能になるようにがんばります。

これまでは「ひとすじの道」という言葉をなにより好んで頼りにもしてきましたが、最近、「ふたすじの道」という言葉を眼にして少しめざめました……。

○反省・要望として 島田眞弓

暮らし

- ・お客さんになっている人がほとんどいなかった。ことに学生たちが責任者になって、一所懸命役目を全うしようと頑張っていた。
- ・火を使って煮炊きするのは朝・夕の2回にし、昼食は朝のうちに用意することを周知する。
- ・洗剤の使用は最小限にする

管理をきちんとするように管理者に要求する。

- ・水道の蛇口が外れたままなので修理すること
- ・電球の交換は誰の役目？
- ・道具（鉋や鉞）の紛失、鍋の不足～～備品リストを作成し、使用前後にチェックできるようにする。チェック用紙は鍵といっしょに返却する。棚に道具類の所定の位置を書き込み、不足した物が一目瞭然に解るようにしておく。
- ・雨戸のすべりが悪い
- ・煙突掃除が必要
- ・高窓の障子のワーロンを張り替える
- ・縁側に集めた箆箆やコタツ檜（やぐら）などが積みあがり、物置と化している。雨戸も開けられないので、風が通らず、風景を見ることもできず、整理が必要。

○大平建築塾について 盛口尚子

何度か参加させていただいた、この塾での私の大きな収穫は、子供達といっしょに参加したこと。たくさんの元気な方々とお知り合いになれたこと。そして、いろいろを囲む生活体験です。

当時、小学生で参加した二人の子供たちも今は高3と中3になりましたが、夏休みになると必ず今でも大平の話題がのびります。

過去に参加した折、大平の分校（小学校）について調べました。廃校になってしまった大平の分校のことが、本になって残っていました。学校での生活、廃校となる日のこと、教師・子供達の様子が手に取るようにわかる内容でした。かつて、ここで人が暮らし、歴史を積み重ねてきたことを知って、大平に来た時は、前に参加したときよりも違った印象をもちました。

最後になるかもしれないということで、私が今回、大平で一番楽しみにしていたことは、満天の夜空を見上げることと、夜いろいろのそばに座って静かにパチパチという燃える音を聞きたいということでした。夜遅くまでいろいろのそばに座ってすごすことは、眠けとともに挫折してしまいましたが・・・。

また、久しぶりの参加での今回、景観模型展を実験的に野外でさせていただけたことは、私達にとっても大きな収穫となりました。ありがとうございました。

今後への意見としては、毎年ではなく2～3年に一度の開催もありうるのではと感じております。

事務局の方々には、いつもたいへんお世話になり、ありがとうございます。

○アンケート集計から 詳細な内容を知りたい方は、事務局まで御連絡ください。

閉塾後のアンケートでは28人の回答を得ました。()内が記入者数を示しています。

大平建築塾の参加回数は？	初めて (24)、2回 (2)、4回 (1)、9回 (1)
開催を何処で知りましたか？	知人の紹介 (13)、雑誌等 (6) 案内状 (4)、その他 (4)
開催の時期について	問題無い (26) その他 (1)
民家での宿泊や炊事、食事は？	快適でした (21)、不満がある (3) ・食材の配分がわからない ・食器以外の道具が不足 ・メニューが複雑
面白かった企画は？	基調講演 (15)、分科会 (10)、夜会公演 (7)、全体懇親会 (8)、きこり体験 (8)、景観模型展 (8)
大平宿の印象は？	・囲炉裏、火の大切さ、すばらしさを知りました。 ・時間を忘れるほどに落ち着きました。 ・伝統工法の根っこところが経験・体験できた (他)
今後の開催について	同じように開催して欲しい (16) 形を変えて開催して欲しい (8) ・分科会のやりかたを工夫する。 ・炊事のための時間を減らし、ほかに時間を使えるように (他)
大平宿保存への提案	・飯田市の人々を中心に宣伝し、利用してもらう。 ・きちんとした事務局体制をつくる。 ・何か形に残るものを皆で協力して作ってみたい。 ・実際の作業を通じて保存をしていけたらと思う。 (他)

■2003 年第 4 回「語る会」のお知らせ

語る人：佐々伸子氏

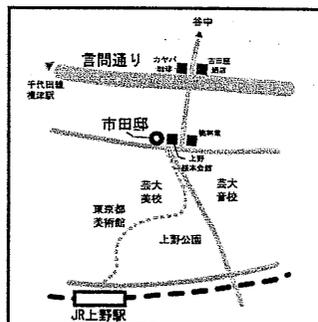
テーマ：「イタリア紀行」

日 時 10 月 31 日（金曜日） 午後 6 時 30 分より

場 所 谷中・市田邸 東京都台東区上野桜木 1 丁目 6-2

- ・「語る会」は参加自由、気軽な交流の場です。自分の仕事を持ち寄って発表したり、気になっていることなどを酒を飲みながら話し合います。
- ・参加希望者は 6 月 18 日までに下記までご連絡ください。発表希望者も下記までご連絡ください。

◆事務局 新井聡（アトリエ・ヌック）
〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南 2-5-5-404
Tel : 048-432-8651. Fax : 048-432-8651.
E-Mail : nook@k.jps.net



■メーリングリストを立ち上げました。

第 10 回大平建築塾の開催を機に、これまでの歩みを礎として新たなステップを踏み出すことが必要だという意識が共有されました。そのための情報交換の道具としてメーリングリストを立ち上げました。大平の思い出、同じ釜の飯を共にした仲間への連絡、運営に対しての意見、苦言、提言、企画、参画など自由に活用ください。

すでに、登録の御案内のメールが配信されている方もいらっしゃると思いますが、新たに e-mail のアドレスを取得し、メーリングリストに参加を希望する方は下記、生活文化同人事務局まで御連絡ください。

振るっての御参加をお待ちいたします。

■次回世話人会のお知らせ

日時・場所：未定(会員の方には後日、事務局よりご連絡いたします)

- ・生活文化同人の活動方針や、定例会の内容などは、自薦・他薦による複数の世話人の協議によって決められています。その話し合いの場が「世話人会」ですが、世話人以外の方も自由に参加できます。(ただし、酒代などは自腹です。)参加を希望される方は事務局まで事前にご連絡ください。

■編集後記

- ・先日、久しぶりに友人達とバーベキューをしました。楽しかった。(飯島)

■会報編集局より

- ・会報原稿を募集しております。「私の近作」「主張」「旅の報告」「スケッチ」など何でも OK です。原稿は下記編集局まで郵送してください。
- ・掲示板を活用してください。出版や個展、見学会等のお知らせを掲載します。

◆2003 年度事務局 新井聡（アトリエ・ヌック）

〒335-0014 埼玉県戸田市喜沢南 2-5-5-404
Tel : 048-432-8651. Fax : 048-432-8651.
E-Mail : nook@k.jps.net

◆2003 年度会報編集局 飯島克如（まちづくりカンパニー・シーブネットワーク）

高松俊秀（東京理科大学修士 2 年）
〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-7YK 駿河台
Tel : 03-3233-2311 (代表) . Fax : 03-3233-1312.
E-Mail : kiijima@tama.or.jp